Japanese Association of Qualitative Psychology 20th Annual Conference

日本質的心理学会 第20回大会

プログラム抄録集【増補改訂版】

大会テーマ **世界を制作する**

日時 2023年 11/4(土)・5(日)

場所 立命館大学 大阪いばらきキャンパス（大阪府）

大会委員長
森岡 正芳（立命館大学）

大会副委員長
南 博文（筑紫女学園大学）

共催

立命館大学総合心理学部
立命館大学人間科学研究科
立命館大学人間科学研究所

大会準備委員会事務局 **日本質的心理学会第20回大会準備委員会**

〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町2-150 立命館大学総合心理学部気付

E-mail：rits.suteki@gmail.com

日本質的心理学会第 20 回大会

プログラム抄録集

立命館大学

大会の開催にあたって

第 20 回大会は 2023 年 11 月 4 日－5 日の日程で、立命館大学大阪茨木キャンパスで行われます。大会のテーマは「世界を制作する」です。20 回という記念すべき大会です。フィールドにて感受された体験の質を活かし記述を磨く。手作業、手造りの感触が残る質的研究法も今や多様に展開し、人間科学、社会科学の諸分野に応用されてきました。異なった領域の交差を作るにあたって重要な役割を果たしています。質的研究は何かを制作するというポイエシス(詩作)の作業そのものです。手間と時間がかかります。制作は無からは生まれません。素材、マテリアルを手になじませながら、並べたり、重ね合わせたり、つないだりすると、そこに思わぬ感触が湧いてきます。作ることのリアリティは、形になったものがすべてではなく、むしろその制作プロセスそのものにあるように思います。

多様な企画の準備が整いました。初日はトゥール大学のエルベ・ブルトン教授を迎え、フランスで独自に展開しているライフストーリーと微視的現象学について講演をいただきます。また午後の企画シンポジウムでは、村上靖彦教授(大阪大学)がこれまでに取り組んでこられた現象学的質的研究法を紹介いただき、午前の講演との認識論。方法論の交差を深められればと思います。もう一つの企画シンポジウムでは大会テーマにちなみ野中哲士教授(神戸大学)にご登壇いただき、心理学の「制作論的転回」という大胆なテーマが予定されており、活発な議論がなされると期待します。前日 11 月 3 日夕刻からは、ウェルカム・セッションとして、多数の講習会も用意しています。

川喜田二郎は「KJ 法は平和を作る」という言葉を残しています。この時代にこそこの声を活かしたいものです。大会会場の立命館大学大阪茨木キャンパスは、新大阪駅からも、大阪空港(伊丹)からも近く、JR 茨木駅から徒歩 5 分。阪急・大阪モノレール南茨木駅から徒歩 10 分程度。至便です。多くの集いの中で質的研究を活かす輪を作ってまいりましょう。

日本質的心理学会第 20 回大会
大会準備委員長　森岡正芳

１．大会参加者へのご案内

１）大会概要

大会テーマ：「世界を制作する」
第 20 回大会
公式サイト　https://www.jaqp2023.jp/
Facebook　　https://www.facebook.com/jaqp2023/

日本質的心理学会 HP：　http://www.jaqp.jp
第 20 回大会事務局メールアドレス：rits.suteki@gmail.com
会期：2023 年 11 月 4 日（土）～ 5 日（日）
場所：立命館大学大阪いばらきキャンパス

２）大会参加について

受付場所および時間：A 棟 3 階 AS357 教室（11 月 4 日 9：30 開始 、11 月 5 日 9：00 開始）

① 大会参加事前申し込みの方

入金済みの方には事前に参加証と領収書が発送されます。受付でネームホルダーと大会プログラム・抄録集を受け取り、各会場へお越しください。

② 大会当日参加申し込みの方

当日参加の方は受付でご記名後、参加費を現金でお支払ください。参加費は下記の通りです。

大会参加費（当日）：	非会員	7,000 円
	一般会員	5,000 円
	会員（大学院）	3,000 円
	会員（学部）	1,500 円

- ✧ 学生会員の方は学生証をご提示ください。聴講生、研究生は学生に含まれます。
- ✧ 大会初日の開始時刻前後は受付の混雑が予想されます。混雑時にはお並びいただく人数を制限する可能性もございます。時間には十分なゆとりをもってお越しくださるようお願い申し上げます。
- ✧ 大会期間中のお知らせや変更は、受付の掲示スペースにてお知らせいたします。
- ✧ 期間中には日本質的心理学会デスクが設置されます。入会等の各種問い合わせはこちらにお願いします。

３）クローク

大会期間中、A 棟 3 階 AC341 教室にクロークを設け、皆さまのお荷物をお預かりいたします。利用時間は **11 月 4 日（土）9:30～18:15 および、11 月 5 日（日）9:00～17:30** です。

ご利用の際には必ず係員より番号札をお受け取りください。**なお貴重品についてはお預かりできませんので、個人で管理していただきますようお願いいたします。**

４）学内無線 LAN の使用について

eduroam 加入機関学生・教職員は所属機関の ID を用いて無線 LAN（WiFi）に接続できます。また大会の前日の 11 月 3 日（金）12:00 から 11 月 5 日（日）18:00 まで、ゲスト用に無線 LAN がアクセスできます。ユーザーID、パスワードは学会当日、受付会場において個々人にお知らせいたします．なお、無線 LAN の接続方法については大会受付にてマニュアルを用意しております。

５）昼食

大会 1 日目（11 月 4 日）・大会 2 日目（11 月 5 日）ともに学内の食堂の営業はございません。大会期間中は、立命館大学周辺の飲食店やコンビニエンスストアをご利用ください。

６）休憩・喫煙に関するご注意

A 棟 3 階 AS365 教室は、休憩スペースとしてもご利用可能です。なおゴミにつきましてはなるべくお持ち帰りいただきますようお願いいたします。

キャンパス内は全面禁煙です。また、キャンパス周辺での喫煙もご遠慮ください。

７）会員控室（打ち合わせ室）

シンポジウムの打ち合わせには、A 棟 3 階 AS365 教室の休憩室をご利用ください。またエスカレーター付近のミーティングスペースもご利用いただけます。なお大会当日は他の階において資格試験等が実施されておりますので、大会フロア以外のスペース利用はご遠慮ください。

８）書籍および企業の展示・販売

大会期間中には書籍および企業の展示・販売をポスター会場（AS358・AS368 教室）で行いますのでぜひお立ち寄りください。

９）託児

託児は、事前申込制となっております。当日受付にて、お申込をされていた旨をお伝えください。なお、「託児スペース利用規定」に同意いただいた方に、ご利用いただけます。事前申込がない方はご利用いただけません。

２．大会企画概要

第 20 回大会では下記の招待講演と講習会、シンポジウム、口頭発表、ポスター発表を開催いたします。

【招待講演】

11 月 4 日（土）10：00～12：00　　A 棟 3 階　AC330 教室

「ライフストーリーから人生と知を創造する：解釈学及び微視現象学の観点から」
"Creating life and knowledge from stories and life histories: hermeneutic and microphenomenological perspectives."

講演者　エルベ・ブルトン教授(トゥール大学)　Professor Hervé Breton (Université de Tours)
司会　森岡正芳(立命館大学)
＊講演は英語で行う予定です。

【講習会】

11 月 3 日（金）に 8 つの講習会が開催されます。講習会の内容や時間については、大会ウェブページを参照してください。

講習会は事前申込をされた方のみ参加できます。講習会の開催場所については、事前申込をされた方に直接お知らせいたします。

【シンポジウム】

本大会では、大会企画シンポジウム 2 件、常任理事会企画シンポジウム 1 件、委員会企画シンポジウム 3 件、そして会員企画シンポジウム 20 件を開催いたします。それぞれのシンポジウムの開催日時および会場につきましては大会プログラムをご参照ください。

シンポジウム会場には、マイク、プロジェクター、PC 接続用ケーブル、備え付けの WindowsPC(PPT 利用可)をご用意しています（接続ケーブルの仕様は HDMI、もしくは RGB(D-Sub15 ピン）です。Mac 用アダプターおよび USB type-C アダプターのご用意は出来ませんのでご注意ください)。ノートパソコンを使用される場合は発表者ご自身でご用意ください。会場の機器の使用方法は各会場の大会スタッフまでお尋ねください。

【口頭発表】

<発表の形式>

1 セッション(120 分)に 5~6 つの発表を予定しています(割り当てについては大会実行委員会にご一任ください)。各発表は、発表 12 分、議論 3 分(計 15 分)です。残りの時間は議論の時間とします。この議論の時間の進行は座長にお願いします。座長は発表者の中から選び、大会実行委員会からご連絡します。なお、PowerPoint や Keynote 等のスライドを使用して発表する場合、見やすいフォント（28 ポイント以上推奨）の大きさにしてください。

発表会場には、マイク、プロジェクター、PC 接続用ケーブル、備え付けの WindowsPC(PPT 利用可)

ください)。 ノートパソコンを使用される場合は発表者ご自身でご用意ください。会場の機器の使用方法は各会場の大会スタッフまでお尋ねください。

＜発表上の注意＞

倫理的配慮が必要な研究の場合には、それに関しての記載をしてください。利益相反の有無については、当日発表資料に明記してください。

発表当日の時点で未発表のものに限り、二重発表は認められません。

＜口頭発表の座長を担当される方へ＞

座長の方には、各担当セッションの進行をお願いいたします。

各発表は、発表 12 分、議論 3 分(計 15 分)です。各セッションの進行については座長の先生にお任せいたしますが、複数セッションを移動する参加者もいますので、予定の時間をできるだけ超過することのないようにご協力をお願いいたします。予定通りに進行した場合、全登壇者発表後 30 分程度の総合議論の時間を設けることができます。それぞれの発表への質疑応答や、各発表に共通する内容や論点についての議論をしていただけます。

セッションごとに学生スタッフを配置予定です。本部との連絡係を担当いたします。技術的な問題や PC の操作方法については答えられない場合がありますが、何かあった折には、学生スタッフにもお声かけください。

【ポスター発表】

<発表の形式＞

ポスター発表は大会 1 日目（11 月 4 日)、2 日目（11 月 5 日）に分けて実施いたします。ポスターはポスター会場（AS358・AS368 教室）において、9：30 より掲示可能です。発表者は、各自の発表日時および演題番号を確認して所定のパネルにポスターを貼り付けてください。

在席責任時間は 1 日目の発表者は 12:00～13:00、2 日目の発表者は 13:00～14:00 です。この時間帯にはご自身のポスター前で待機して質疑応答を行ってください（スタッフが発表者の在席を確認します)。ポスターの取り外しは、1 日目発表者は 17:00 までに、2 日目発表者は 15:30 までに行ってください。片付けられなかったポスターは大会事務局で回収し処分いたします。

所定スペース内でポスターが貼れる範囲は、縦 180cm×横 90cm です。ポスターの貼付には大会事務局で準備した画鋲をご使用ください。演題番号は事務局で事前に貼付してあります。

＜発表上の注意＞

倫理的配慮が必要な研究の場合には、それに関しての記載をしてください。利益相反の有無については、当日発表資料に明記してください。

発表当日の時点で未発表のものに限り、二重発表は認められません。

＊優秀口頭発表賞・優秀ポスター賞

今年度の大会発表では、発表申込時の抄録と自身の研究の卓越性についてのアピールをもとに、大会当日「大会発表候補者セッション」を設定し、口頭発表とポスター発表について審査を行い、各２件を優秀賞として選出します。

対象は大学院(修士課程、博士課程)在学中または修了後３年以内の方です。自薦制になっております。抄録に基づく１次選考を通過した発表が、本審査の対象となります。

３．会場へのアクセス

立命館大学大阪いばらきキャンパス　大阪府茨木市岩倉町 2-150　A 棟

各駅からのアクセス

〈鉄道をご利用の場合〉

JR 京都線「茨木」駅より徒歩約 5 分

阪急京都線「南茨木」駅より徒歩約 10 分

大阪モノレール「宇野辺」駅より徒歩約 7 分

〈飛行機をご利用の場合〉

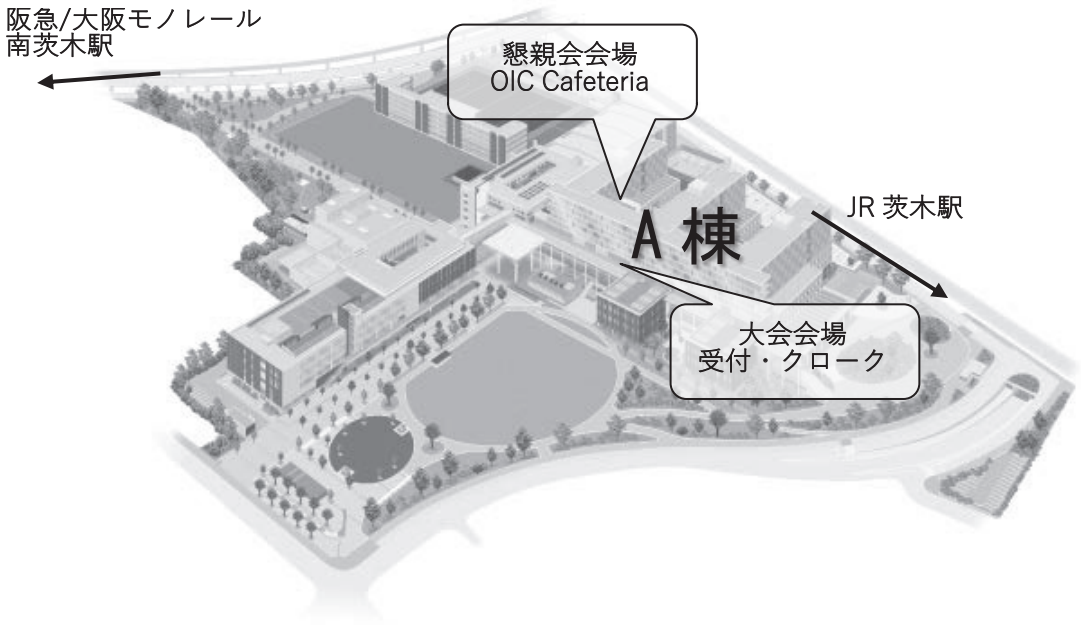
「大阪空港」駅より大阪モノレール「宇野辺」駅より徒歩約 7 分もしくは大阪モノレール「南茨木」駅より徒歩約 10 分（キャリーケースなどお持ちの場合は大阪モノレール「南茨木」駅より来られることをオススメいたします）

✧　**会場までのアクセスについては立命館大学の HP もご覧ください。**

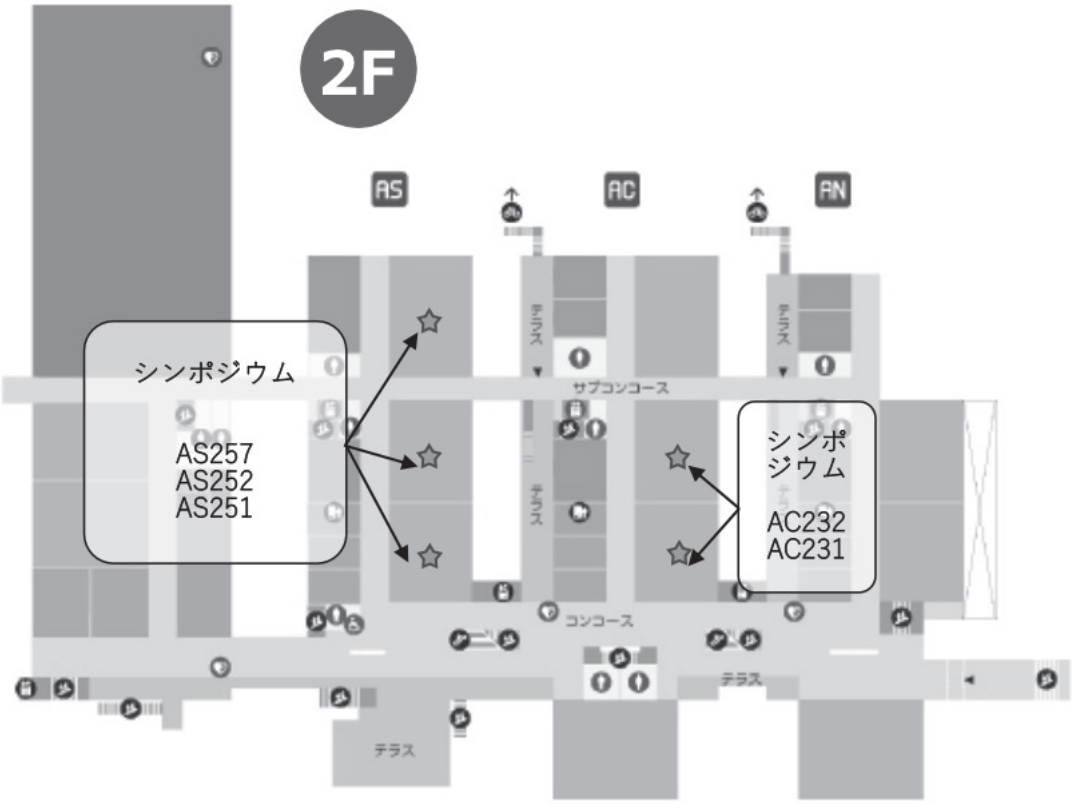
立命館大学大阪いばらきキャンパス　アクセス

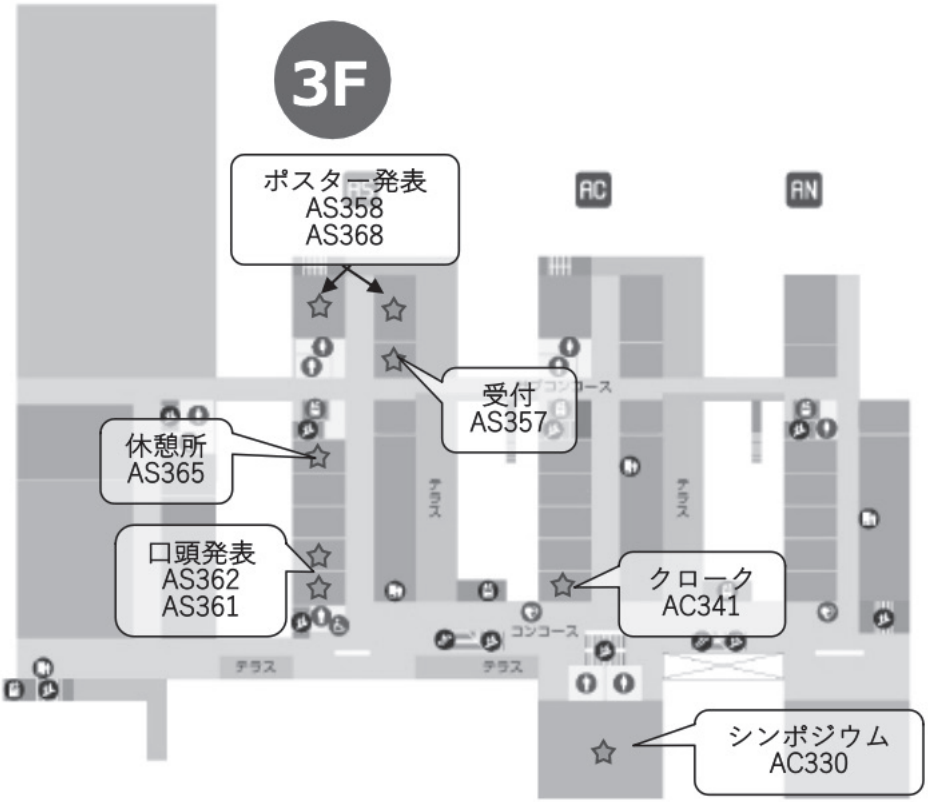
URL：https://www.ritsumei.ac.jp/accessmap/oic/

４．会場案内

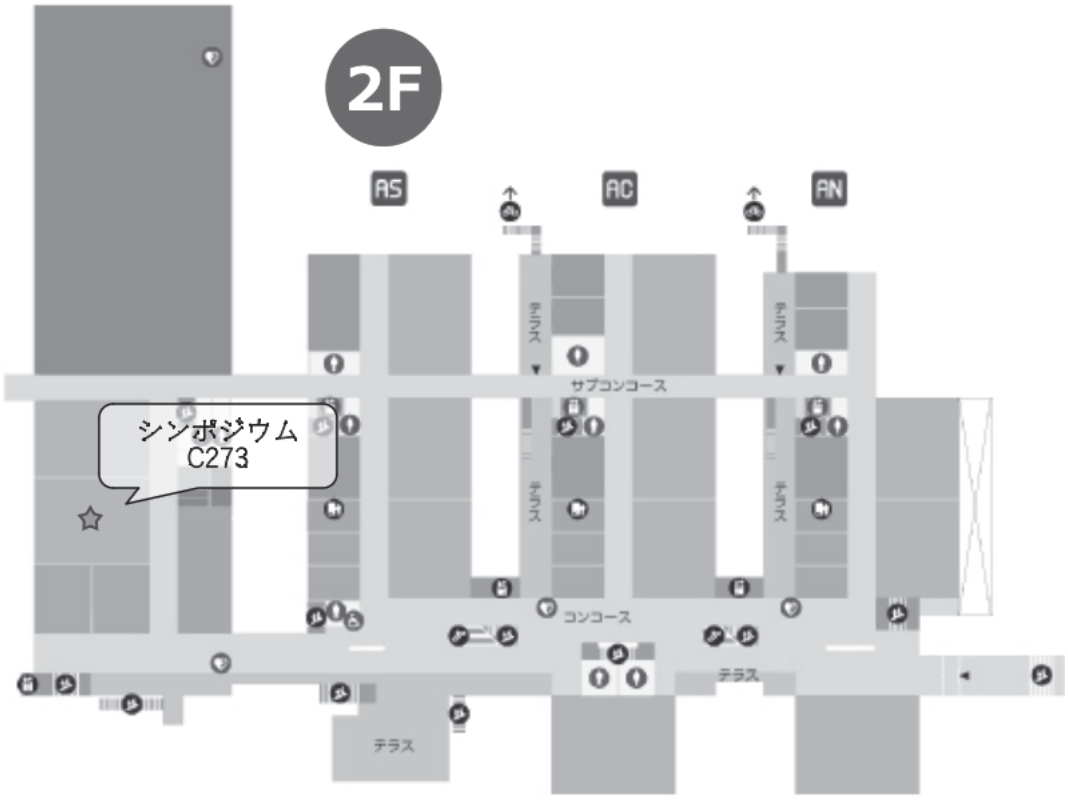


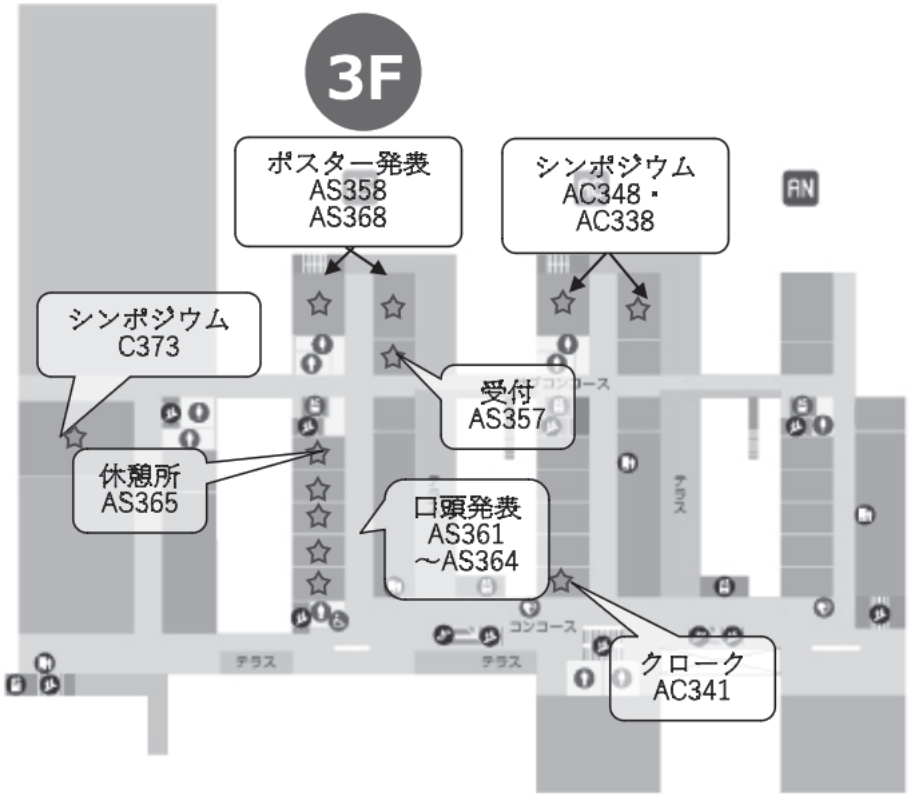
フロアマップ<1 日目>


2F
AS
AC
AN
シンポジウム
AS257
AS252
AS251
シンポ
ジウム
AC232
AC231
サブコンコース
コンコース
テラス


3F
AS
AC
AN
ポスター発表
AS358
AS368
受付
AS357
休憩所
AS365
口頭発表
AS362
AS361
クローク
AC341
シンポジウム
AC330
コンコース
テラス

フロアマップ<2 日目>


2F
AS
AC
AN
サブコンコース
シンポジウム
C273
コンコース
テラス


3F
ポスター発表
AS358
AS368
シンポジウム
AC348・
AC338
AN
シンポジウム
C373
受付
AS357
休憩所
AS365
口頭発表
AS361
～AS364
クローク
AC341
コンコース
テラス

５．大会プログラム

１日目(11 月 4 日・土)

	受付	シンポジウム会場						口頭発表会場		ポスター会場		クローク	休憩室
	AS357	AC330	AS251	AS252	AS257	AC231	AC232	AS361	AS362	AS358	AS368	AC341	AS365
9:30	受付開始 (9時30分から)	(10:00-12:00)										受付開始 (9時30分から)	
10:00		招待講演	会員企画シンポジウム1	会員企画シンポジウム2	会員企画シンポジウム3	会員企画シンポジウム4							
10:30 11:00		ライフストーリーから人生と知を創造する－解釈学及び微視現象学の観点から	ICT教材とハイブリッドになった教師の志向性を問う	土地の力を描き出す －映画を使ったビジュアル・エスノグラフィー－	「病棟文化が変わる」-「対話の仕方と役割認識」の変化で共支援的なナラティヴ・コミュニティに変容した緩和ケア病棟の物語-	子育て中の母親インプロバイザー（即興演者）の上演参加 －「ザ・ベビデルテスト」上演をめぐる語りから考える－							
11:30		講演者：Hervé Breton 司会：森岡正芳	呉文慧, 馬場大樹, 高村直樹, 江草遼平	村本邦子, 河野暁子, 呉宣児, 大城凌子, 張亦瑾	田代順, 大西都子	直井玲子, 園部友里恵, 豊田夏実, 下村理愛, 中込裕美, 江戸川カエル							
12:00										(12:00-13:00) 責任在席時間 （優秀賞選考セッション，一般セッション）			
12:30													
13:00		(13:30-15:30)											
13:30		大会企画シンポジウム1	会員企画シンポジウム5	会員企画シンポジウム6	会員企画シンポジウム7	会員企画シンポジウム8		口頭発表1 （優秀賞選考セッション）	口頭発表1　サテライト （優秀賞選考セッション）				
14:00 14:30		制作論的転回？ 同じ川は二度入れない、同じモノは二度作れない	AIが質的研究をどう変えていくか	TEAにジルベール・シモンドンの個体化・展結を取り入れる試み－右上がりTEMに対しての分析例を用いて－	実践者からみた「こどもの居場所」の課題 ―必要不可欠なヒト・モノ・コトについて考える	不思議な経験に遭遇したらどうしたらよいか？ －例外的事象から事例研究へ－		0-1～0-5	0-1～0-5				
15:00		南博文, 野中哲士, 澤野美智子, 飯嶋秀治	薛海升, 中田友貴, 大橋英永, 能智正博, 尾見康博	福山未智, サトウタツヤ, 木戸彩恵, 小澤伊久美, 阪下ちづる, 田垣正晋	松嶋秀明, 保坂裕子, 上野敏子, 川崎敦子, 鈴木晶子	渡辺恒夫, 岩崎美香, 大門正幸, 森岡正芳							
15:30		(16:00-18:00)											
16:00		大会企画シンポジウム2	研究交流委員会大会企画	会員企画シンポジウム9	会員企画シンポジウム10	会員企画シンポジウム11	会員企画シンポジウム12	口頭発表2 （優秀賞選考セッション）	口頭発表2　サテライト （優秀賞選考セッション）				
16:30 17:00		現象学的質的研究法（PQR）の可能性	他者の体験を「想起」する－場所、コミュニティ、継承－	質的研究法を学びほぐす－障害児・者教育の視座から－	質的研究、またはインタビューが研究協力者に与える、正／負の影響	身体を用いた社会的行為の組み立てられ方の考察 －介護・超音波検査・掻破行為と身体－	子育てという活動に再び挑む－社会文化的視点から－	0-6～0-10	0-6～0-10				
17:30		村上靖彦, Hervé Breton, 森岡正芳	安斎聡子, サトウアヤコ, 伊藤哲司, 森直久, 佐藤由紀, 杉山高志	生田邦紘, 呉文慧, 橋見友輔, 横山華介	伊東美智子, 宮下太陽, 渡邊卓也, 市川章子, 八ツ塚一郎	飯田奈美子, 松浦智恵美, 大和田浩美, 加戸友佳子, 樫田美雄, 岡田弘光	土倉英志, 太田礼穂, 渡辺涼子						
18:00	受付終了 (18時まで)											受付終了 (18時15分まで)	
18:30	懇親会												

大会プログラム

2日目（11月5日・日）

	受付	シンポジウム会場				口頭発表会場				ポスター会場		クローク	休憩室
	AS357	C273	C373	AC338	AC348	AS361	AS362	AS363	AS364	AS358	AS368	AC341	AS365
9:00	受付開始 （9時から）											受付開始 （9時から）	
		(9:30-11:30)											
9:30		質的心理学フォーラム編集委員会企画シンポジウム	会員企画シンポジウム13	会員企画シンポジウム14	会員企画シンポジウム15	口頭発表3 （優秀賞選考セッション）	口頭発表3　サテライト （優秀賞選考セッション）	口頭発表4 （優秀賞選考セッション）	口頭発表4　サテライト （優秀賞選考セッション）				
10:00		「現場」を問い直す	孤立からつながりへ―エージェンシーをめぐる対話―	歌、コラージュ、ジャーナリングを媒介とした主体回復へのナラティヴ・アプローチの検討	動いている世界とともにどのように研究するか：ードゥルーズの生成変化の哲学をもとにー	0-11～0-15	0-11～0-15	0-16～0-21	0-16～0-21				
10:30													
11:00		松熊亮, 土元哲平, 鈴木勝己, 吉川侑輝, 千田真補, 河村裕樹, 神崎真実	青山征彦, 木下寛子, 保坂裕子, 浜田寿美男	松本佳久子, 宮本悠起子, 鍋島宏之, 谷本拓郎	梅見友輔, 辰己一輝, 得能想平, 石黒広昭								
11:30													
		(11:45-12:45)											
12:00		総会											
12:30			(13:00-15:00)							(13:00-14:00)			
13:00			編集委員会企画シンポジウム	会員企画シンポジウム16	会員企画シンポジウム17	口頭発表5	口頭発表5 サテライト	口頭発表6	口頭発表6 サテライト	責任在席時間			
13:30			「変化」をとらえる質的研究	ヤーン・ヴァルシナーの記号論的文化心理学と質的研究法ー未来へ向けた可能性を考えるー	詩的リアリティとビジュアル・ナラティヴ	0-22～0-25	0-22～0-25	0-26～0-30	0-26～0-30				
14:00													
14:30			大川聡子, 北出慶子, 小路浩子, 小林智之, 小林聡子, 能智正博	滑田明暢, サトウタツヤ, 宮下太陽, 上川多惠子, 土元哲平, 木戸彩恵, 小松孝至	横山草介, 家島明彦, やまだようこ, ふくだべろ, 南博文, 高田明								
15:00													
		(15:15-17:15)											
15:30	受付終了 （15時30分）	常任理事会主催国際シンポジウム	会員企画シンポジウム18	会員企画シンポジウム19	会員企画シンポジウム20								
16:00		土着心理学の発想とその展開	行動の時間的特徴とその表現　ー静止画による表現をめぐってー	観察と介入の二分法を超えて　ー文脈的行動科学と質的心理学の対話ー	言説分析と社会的課題―三人連句読みつなぎ（２）								
16:30													
17:00		伊藤哲司, ロジェリアペプア, ヴァクラヴリンコヴ, 韓圭鎬, 村本邦子	阿部廣二, 高梨克也, 細馬宏通	瀬平劉アントン, 本田陽彦, 瀬平劉キャサリン, 植田嘉好子	ハッ塚一郎, 川野健治, 岡部大祐								
17:30												受付終了 （17時30分）	

招待講演・シンポジウム

招待講演　　11 月 4 日（土）10：00-12:00　AC330

「ライフストーリーから人生と知を創造する：解釈学及び微視現象学の観点から」
"*Creating life and knowledge from stories and life histories: hermeneutic and microphenomenological perspectives.*"

講演者　エルベ・ブルトン教授(トゥール大学)　Professor Hervé Breton (Université de Tours)
司会　森岡正芳(立命館大学)
＊講演は英語で行う予定です。

講演要旨

ライフストーリーおよび伝記的手法を用いた成人教育・生涯教育が、フランス語圏で独自に展開している。ガストン・ピノー（Gaston Pineau）が、国際ライフストーリー成人教育・伝記的教育研究学会（ASIHVIF）を創設（1991）。現在はその後継者トゥール大学のエルベ・ブルトン教授を中心に、展開している。ライフストーリーとは、「体験された時間経過の事実に基づいて意味を探究し、構成すること」（Pineau & Marie-Michele ,1983）である。ブルトン教授は、自己形成(autoformation)としてのライフストーリー研究の専門家で、一人称と二人称の記述の持つ方法論的な意味を探究してきた。とくに、微視的現象学(microphenomenology)記述法の導入によってライフストーリーを、自己探求の方法として枠付け、独自の展開を試みてきた。ブルトン教授は、ライフストーリーによる自己形成プログラム(Life Stories in adult education program)を組織し成人教育、健康教育の実践を積み重ねている。

「人間的経験とその直接の生き生きとした性質を再発見することが、現象学の根本課題」（Varela,F.J.(1996)神経現象学 neurophenomenology)である。現象は客観的・可視的事象とは異なった非局在的な次元のものであり、事象の布置関係から浮かび上がる一回性のものである。
現場で起きてはいるが見えてこなかったことをとらえるのが、微視的現象学の方法である。
ライフストーリーを語り聞くことは、日常意識の多くの部分を占める自己中心的なものの見方を宙吊りにする機会になる。すなわち、現象学的還元（エポケ Epoché）の実践的な意味がそこにある。

ナラティヴ実践におけるライフストーリーの課題の一つは、対象者が自分の人生を語り、作り出すナラティヴにおいて、何が事実として与えられているのかを探究することである。ナラティヴの活動を通して体験された事実、「生きられた事実」(lived facts)が浮かびあがる。人の生における事実は、安定した対象ではない。「生きられた事実」が一人称で捉えられるか、二人称で捉えられるか、あるいは三人称で捉えられるかによって、「生きられた事実」は異なる意味を帯びてくる。ナラティヴを構成する事実は、ある部分、説明のつかないまま残っている要因に依存している。事実とフィクションの境界は、多孔浸透性(porus)の特徴を持つ。語り手によってどのように事実が選択されるか、その過程に注目する。ナラティヴの遂行中、影に隠れたままの記憶痕跡をどのように把握し形にするか。

本講演では、以上のような課題について、ライフストーリー分析の実際例を通じて検討していきたい。

Main purpose of lecture

Adult and lifelong education using life story and biographical methods is developing independently in the French-speaking world. Gaston Pineau founded the International Association for the Study of Life Story and Biographical Education of Adults (ASIHVIF) in 1991. It is currently being developed by its successor, Professor Hervé Breton of the University of Tours. Life story is "an exploration and composition of meaning based on the facts of an experienced passage of time" (Pineau & Marie-Michele ,1983). Professor Breton is an expert in life story studies as auto-formation and has explored the methodological implications of first- and second-person accounts. In particular, he has attempted to frame life stories as a method of self-inquiry by introducing a microphenomenology of description and has attempted to develop his own original method. Professor Breton has organized Life Stories in adult education program and has been practicing adult education and health education.

“The fundamental task of phenomenology is to rediscover human experience and its immediate vividness" (Varela, F.J., in “Neurophenomenology”1996). Phenomena are of a non-local dimension, different from objective and visible events, and are one-time phenomena that emerge from the distribution of events. The method of microphenomenology is to capture what is happening in the field but has not been seen.

Telling and listening to life stories is an opportunity to suspend the self-centered view of things that occupies so much of our daily consciousness. In other words, this is the practical meaning of phenomenological reduction (Epoché). One of the challenges of life stories in narrative practice is to explore what is given as fact in the narratives that subjects tell and produce about their lives. Facts experienced through the activity of narrative, "lived facts," emerge. The facts of human life are not stable objects. Depending on whether "lived facts" are taken in the first, second, or third person, "lived facts" take on different meanings. The facts that constitute a narrative depend, in part, on factors that remain unexplained. The boundary between fact and fiction is characterized by porous permeability. It focuses on the process of how facts are selected by the narrator. How do we grasp and give form to the traces of memory that remain hidden in the shadows during the execution of the narrative?

In this presentation, it would like to be examined these issues through actual examples of life story analysis.

講演者紹介

トゥール大学正教授、フランス大学研究所上級研究員。
成人教育、人間科学、公衆衛生におけるナラティヴ・プラクティス（自己物語、ナラティヴ・インタビュー、集合的ナラティヴ、微視現象学記述）を中心に研究。 l'Association internationale des histoires de vie en formation (ASHIVIF)（国際ライフストーリー教育研究会）会長。

Bio

Hervé Breton is a full professor at the University of Tours, and Senior member of the French University Institute. His research focuses on narrative practices (self-narratives, narrative interviews, collective narratives, microphenomenological descriptions) in adult education human sciences and public health.

Email: herve.breton@univ-tours.fr
CV: https://cv.archives-ouvertes.fr/herve-breton
Website : https://www.univ-tours.fr/annuaire/m-herve-breton

Recent Papers

BRETON, H. (2023). Life history, lived temporal facts and adult education. *Linhas Críticas*, *29*, e47892. https://doi.org/10.26512/lc29202347892

BRETON, H. (2022). *L'enquête narrative en sciences humaines et sociales*. Armand Colin (Collection U).

BRETON, H. (2021). La narration du vécu à l'épreuve du « problème difficile » de l'expérience : entre mémoire passive et historicité. *Práxis Educacional,* Vitória da Conquista, v. 17, n. 44, p. 24-37, 2021. DOI: 10.22481/praxisedu.v17i44.8006.

BRETON, H. (2021a). Narrative régimes. An Alliance between Descriptive Phenomenology and Biography. In *An Ecology of Life: Discourses, dialogue and diversity in biographical research* (p. 53-64). Brill Sense Publisher.

BRETON, H. (2021b). Counselling and guidance for adults: a narrative paradigm. Studia Poradoznawcze, Journal of counsellogy, University of Lower Silesia, Wroclaw, [Poland]. Vol. 9. p. 294-303.

BRETON, H. (2020). From experience to language in narrative practices in therapeutic education. In *Discourses we live by: Personal and professional narratives of educational and social practices* (p. 53-73). Cambridge: Open Book Publishers.

BRETON, H. (dir.). (2019). Dossiê : Pesquisa (auto)biográfica em educação na Ásia. *Revista Brasileira de Pesquisa (Auto)Biográfica.* (Université Nationale de l'État de Bahia, UNEB, Salvador de Bahia, [Brésil]), 2019/4, 12, 816-820.

BRETON, H. (2017). Interroger les savoirs expérientiels *via* la recherche biographique. *Le sujet dans la Cité – Actuels,* 6, 25-41. https://doi.org/10.3917/lsdlc.hs06.0023

大会企画シンポジウム１　　11 月 4 日（土）13：30-15:30　AC330

「制作論的転回？同じ川は二度入れない、同じモノは二度作れない」

「世界が発見されるものであるのに劣らず制作されるものでもあるとすれば、知ることは報告することであるばかりか、作り直すことでもある。」（グッドマン, N. 『世界制作の方法』みすず書房, p.35）

企画・司会　　南　博文（筑紫女学園大学）
話題提供　　野中哲士（神戸大学・人間発達環境学研究科）
指定討論　　澤野美智子（立命館大学・総合心理学部）
　　飯嶋秀治（九州大学・人間環境学研究院）

企画趣旨

私（企画者）が住んでいる海に面した山の中腹から、強風の中、風と戯れるようにして空中に静止したまま飛び続けているカラスを目撃することがある。彼（彼女）は、風に向かうようにして羽根を拡げていて、ある微妙なバランスを取りながら同じ空中の場所に止まっているように見える。流動する大気の圧力を利用していることは確かだが、それによって「同じ位置」をキープしている。

このような流動する環境との接触面で、動いている自らのからだを同じ位置に保持する環境の支え（アフォーダンス）を発見するとはどのようなことを指しているのだろうか。生動する行為主体が環境にはたらきかけているのではあるが（その点で風に飛んでいく葉っぱとは違った「動き」がそこにある）、環境の方もこの行為主体に作用を及ぼしている。あるいは及ぼし続けている。そこには、動くものどうしの関係の移行と調整があり、さらに言えば「意志」のような「一定を志向する」はたらきが感じられる。しかし、そう言っていいのか？

上述の説明の中で、「はたらきかける」と「作用する」を使い分けているのは、その主語が生きた主体である場合に前者を、生きていない物質的な存在・現象である場合に後者を割り当てるという主語と述語との対応を気にかけてのことである。

ここで動詞”affect”という用語を持ち出して、affect する側と affect される側とが対称的である（置き換えられる）ような関係を扱っていこうとする学問的関心が、2000 年代くらいから主に人類学を淵源にして現代思想の中に登場してきている（西井・箭内, 2020）。Affect するものは、生命体であっても、非生命体であってもかまわない。

このような問題設定のうちに潜む言語適用の慣習（生命体と非生命体とでのカテゴリーの区別）を、「中動態」という論点から検討していく方向も無視できないが（國分, 2017; インゴルド, 2018, p.285）、観察という方法を学問の公共的な検証の手段にもつわれわれとしては、解像度の高い「場の観察」とその綿密な「記述」を基にどこまで議論を進められるかにディシプリンの生命線がかかっていると考える。むしろ、そこに現れる研究者の「手わざ」の鮮やかさに、「質」を追求する心理学とその隣接領域が現在、到達している「最前線」を見てみたい。

話題提供者は、野中哲士さんお一人である。「アフォーダンス」という言葉を使わず、高校生に分かる

文章で企画趣旨を書いてほしいとの言付けがあった。なので生態心理学の分野という紹介の仕方も控えるべきかもしれない。人のふるまいがその周囲・まわりとどのように出会い、その「際」で起こることをじっくりと見きわめ、フィールド（野）のまっただ中での観察に徹する方である。ご自身、バンドで活動する音楽家でもある。『具体の知能』（金子書房）という著書のタイトルが表すように、幼児の粘土遊びや、スプーン使い、字を書くようになる過程、陶器職人のわざの伝承、といった常に「現にそこにある」事象に密着し、「あらかじめ準備されていない状況に柔軟に適応する非機械的な知能」に関心をもつリアリストである。

指定討論者には、お二人の人類学者に入っていただく。人工物、あるいは人によって制作されたモノ、慣習、制度、言語、広く環境一般といった話題について、人間の内に閉じたメカニズムを考えてしまいがちな心理学の偏向に対して、医療の分野で人間および「非人間」的な存在が相互に影響し合う「アフェクト」の様相を見ておられる澤野美智子さん、そして暴力や苦しみといった身体的であり社会的でもある人間現象を縦横無尽に語る飯嶋秀治さんが、対抗的（オルタナティブ）な視野から、手触りのある議論に導いてくれるに違いない。（南　博文）

話題提供　　野中哲士（神戸大学・人間発達環境学研究科）

人間を含む生物の活動は、さまざまな機会や制約をもたらす環境の中で生起する。私たちが日々の暮らしのなかで切り結んでいるのは、長期間持続してきた重力や空と大地のコントラストであり、ローカルな土地の風土であり、その土地と独特の仕方で切り結んできた周囲の他者が織りなす周期的あるいは非周期的な出来事である。こうした環境との密接な切り結びは、モノをつくる場面にとりわけ顕著に見ることができる。たとえば、溶岩の堆積の隙間にごく微粒子の珪酸鉱物が沈殿することでできる紅玉髄や瑪瑙は、肌理が細かく均質で、特定の割れやすい方向をもたず、負荷を加えると「ヘルツ破壊」と呼ばれる独特の割れ方を呈する。独特な生成の履歴をもつ石のこうした物性が示す特徴的な割れ方に、古くから人が「参入」してモノをつくり、その生活に利用してきたことが知られている。人類学者のインゴルドは、モノをつくることは「素材に随う」ことであり、作り手が自ら辿りつつある行為の流れを、意のままにならない環境の素材の展開につなぎとめ、その変化に参入することにほかならないと述べた。おそらく同様の事情は、実は私たちのあらゆる行為に広くあてはまるだろう。環境の重力を推進に利用する「歩くこと」、放射光と地上環境の出会いに生じる包囲光を利用する「見ること」をはじめ、環境のなかで生起する私たち個体の行為は、いずれも個体の中で完結し得るものではなく、個体のスケールを越えた環境のダイナミクスに参入する側面を常に有している。だが、「魚は水の話をしない」という英語のことわざがあるように、私たちが生まれ育つありふれた環境と、そこで繰り返し起こっている出来事は、その中で暮らす私たちにとってはあたりまえすぎて、あらためて問題にすることはなかなか難しい。本話題提供では、環境との密接な切り結びが特徴的なモノをつくる場面（粘土を成形する土器づくり、石を打ち割る石器づくりなど）を題材とすることで、(1) いかにして作り手が複雑な環境の変化にみずからの行為を調整し、ひとまわり大きい「個体プラス環境」の変化のダイナミクスを導き得るのか、さらに（2）このような「個体プラス環境」の挙動を調整する技能がいかにして他者と共有され得るのかという具体的な問題について考察する。さらに、「つくること」に典型的に見られるような環境との密接な切り結びに焦点をあてることが、いかにして心理学の「制作論的転回」と呼べるような視座の転換をもたらし得るのかについて議論する。

大会企画シンポジウム２　　11 月 4 日（土）16：00-18:00　AC330

「現象学的質的研究法（PQR）の可能性」

企画・司会　　森岡正芳（立命館大学）
小講演　　村上靖彦（大阪大学）
　　演題：現象学的質的研究法（Phenomenological Qualitative Research: PQR）の実際
パネリスト　　エルベ・ブルトン（Hervé Breton）（トゥール大学）(Université de Tours)
＊小講演は日本語で、ディスカッションはフランス語（日本語通訳あり；通訳 須藤美恵（立命館大学大学院人間科学研究科））にて行います。

企画趣旨

フッサールの創始した現象学が、精神医学、心理学、看護学その他、人間科学の諸領域において、現象を捉える方法として応用されてきた歴史はすでに長いものがある。最近はフェミニスト現象学といった動向が話題となり、現象学の実践性と社会性が注目されている。現象学的還元という持続的作業、すなわち自然的、習慣的態度を括弧に入れ、思考習慣によって無自覚に行っている認識を一旦停止し、既知の概念一般に依拠しないという観点は、心理学の実践領域においても、たえず照合したい態度である。そこから、現場で起きてはいるが見えてこなかったことが見えてくる。

村上は、看護や子育て支援の現場に入り、透徹した眼差しでその場に起きていること、そして起きたかもしれないといった可能性も含め、詳細に聞き取り、記述してこられた。数々の成書がある。この記述分析方法を村上は、「現象学的質的研究法」(Phenomenological Qualitative Research: PQR)と名づけている。刻一刻と変化する状況に応答する援助職の実践は、短期的なスパンで場面の劇的な変化があり、中期的には患者、当事者をめぐるケアがチーム全体で変化し、長期的には家族関係の変化や支援のスタイルも変化していく。PQR は、このような変化していく経験プロセスや実践の構造をそのダイナミズムの内側から記述することを目的とする。経験プロセスには固有のリズムがある。現場では、当事者たちとの経験の地平が共有されない、あるいはほころびるという事態がつきまとうが、村上は「交わらないリズム」、ポリリズムという観点から、共有しうる地平を探究する。独創的な方法論である。様々な実践現場でポリリズムの地平を開くところ、これが実践者の専門性のつかみどころであり、協働型支援の基盤を問うものである。

この企画では前半、村上靖彦先生より PQR に関わる小講演をいただく。それを受けてエルベ・ブルトン先生のコメント、質疑応答を行う。その後フリーにディスカッションをしていきたい。

Abstract

Husserl's phenomenology has a long history of being applied as a method for understanding phenomena in psychiatry, psychology, nursing, and other fields of human science. Recently, trends such as feminist phenomenology have become a hot topic, drawing attention to the practical and social nature of phenomenology. The perspective of continuous work of phenomenological reduction, that is, putting natural and habitual attitudes in parentheses, suspending unconscious recognition through habits of thought, and not relying on known concepts in general, is an attitude that should be constantly checked in the practical field of psychology. From this perspective, we can see what has been happening in the field but has not been seen.

Murakami has been in the field of nursing and childcare support, and with a penetrating eye, has interviewed and described in detail what is happening there and what might have happened. He has written numerous books on the subject. Murakami calls this descriptive analysis method "Phenomenological Qualitative Research (PQR). PQR is a method for describing such changing experiential processes and the structure of practice from the inside out. PQR aims to describe these changing experience processes and practice structures from within their dynamism. Experiential processes have an inherent rhythm. Murakami explores the horizon of shared experience from the perspective of "rhythms that do not intersect," or polyrhythms. This is an original methodology. This is where the horizon of polyrhythm opens up in various fields of practice, and this is where the practitioner's expertise lies and where the foundation for collaborative support is examined.

In the first half of this project, Dr. Yasuhiko Murakami will give a short lecture on PQR. In response to this Dr. Hervé Breton will make comments and answer questions. After that, we would like to have a free discussion.

講師紹介

村上靖彦

大阪大学人間科学研究科教授。2000 年パリ第 7 大学で博士号取得。著書に『母親の孤独から回復する――虐待のグループワーク実践に学ぶ』(講談社)『在宅無限大――訪問看護師がみた生と死』(医学書院)『交わらないリズム: 出会いとすれ違いの現象学』(青土社)『子どもたちがつくる町―大阪・西成の子育て支援』(世界思想社)『ケアとは何か: 看護・福祉で大事なこと』(中公新書)、近著に『客観性の落とし穴』(ちくまプリマー新書)他　多数。

研究交流委員会大会企画シンポジウム　　11 月 4 日（土）16：00-18:00　AS251

他者の体験を「想起」する

ー場所、コミュニティ、継承ー

企画・司会・話題提供：　安斎聡子（青山学院大学コミュニティ人間科学部）
企　　画：　佐藤由紀（玉川大学リベラルアーツ学部）
企　　画：　杉山高志（九州大学人間環境学研究院）
話題提供：　サトウアヤコ（アーティスト）
指定討論：　伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）
指定討論：　森直久（札幌学院大学心理学部）

企画趣旨

戦後 80 年を目前に控え、また、度重なる災害に見舞われるなかで、わたしたちの社会は、体験者の記憶の継承の必要性を繰り返し話題にしてきた。その際、議論に上るのは、体験者の記憶の受け継ぎや、遺構保存の是非などであろう。本企画でテーマとしたいのは出来事が起きた「場所」と「想起／記憶」、その継承の問題である。

直接体験者が減少するのと同様に、「場所」もまた変化する。出来事の痕跡は時間の経過とともに薄れ、景観も変わる。原発事故災害の一部の被災地のように、今日その場所に立つことのできない場所も存在する。出来事の想起はそれが起きた環境で、出来事の痕跡との接触が保たれた状況で行われるわけではないし、その出来事にかかわる人々によって行われるとも限らない。むしろ、他者の記憶を広く継承していくには、環境との接触を前提としない場面を想定することが必要であろう。

こうしたなか、それらの媒体となるものの一つに地図がある。地図は現実の環境を記号に置き換え構成した疑似的な環境であり、その使用は、特定の場所と接触のない人とも、一定程度イメージの共有を可能にする。地図は記憶の共有の場面やアーカイブのプラットフォームなどとして、実社会のなかでさまざまな成果を上げている。

本企画では、他者の記憶に出会う実践として、地図を用いた事例、地図を用いず環境の探索として行われた事例を報告しながら、環境と身体とのかかわりにおいて想起を捉える生態学的想起研究、対話や活動を通じた記憶の共有、継承に着目するアクションリサーチの観点から、環境、擬似的環境において展開される想起の質などを検討することで、行為としての想起、記憶の共有について考えたい。これらの議論は、他者の記憶を引き継ぐとはどのようなことなのか、そして社会のなかであいまいな定義のまま使われている「想起」「記憶」に明確な輪郭を示すことにつながるものと期待する。なお、本企画は大会前企画「サトウアヤコ 日常記憶地図ワークショップ（オンライン／福島県双葉町開催）」とも接続している。ワークショップ後の振り返りも含めながらフロアとともに議論を深めたい。

話題提供１：「日常記憶地図」の方法ー「場所の記憶」にふれる（サトウアヤコ）

言語化と媒介的なコミュニケーションに関心を持ち、「カード・ダイアローグ」、「日常記憶地図」など複数のプロジェクトを継続している。2019 年以降東京都現代美術館、長野県立美術館などの展覧会に参加。

「日常記憶地図」は、主に子どもの頃の反復的な移動を地図上でなぞり、「場所の記憶」や風景を想起するメソッドとして 2012 年に開発、個人的な記憶を通して土地の特性や変遷を観る展覧会や地域プロジェクト、また個人や家族間でのワークを展開している。

方法の考察や、これまでの実践を紹介しながら、自他の記憶にふれる体験、記憶の″共有″、地域主体での実践とアーカイブの可能性などについて考えたい。

話題提供２：コミュニティの過去を想起するー戦争体験と環境（安斎聡子）

話題提供者は、他者の記憶の継承と継承者の体験性を環境とのかかわりにおいて考えてきた。ここでは、環境の変化が比較的緩やかで、沖縄戦の痕跡が残存する沖縄本島南部の集落で行われた、住民によるまち歩きの事例を中心に報告する。

参与観察で確認されたのは、環境との接触において生起する想起の断片的かつ偶発的な様相であり、それらを持ち寄って行われる共同生成的な、集合知としての沖縄戦の記憶、そして継承者（非直接体験者）の体験性である。また、ここで語られた沖縄戦は、日常的なその他の記憶と混じり合って提示される「日常記憶」としての戦争体験である。これら、いつもの場所の日常における、他者の体験との出会い方を話題提供として報告する。

Remembering the Experience of Others

Anzai, Akiko (Aoyama Gakuin University), Organizer, Moderator & Presenting Author

Sato, Yuki (Tamagawa University), Organizer

Sugiyama, Takashi (Kyushu University), Organizer

Sato, Ayako (Contemporary Artist), Presenting Author

Ito, Tetsuji (Ibaraki University), Discussant

Mori, Naohisa (Sapporo Gakuin University), Discussant

Language: Japanese

「現場」を問い直す

企　　画：土元哲平　（中京大学心理学部）
鈴木勝己　（早稲田大学人間科学部）
吉川侑輝　（立教大学社会学部）
司会（兼企画）：松熊亮　（文教大学人間科学部）
話題提供：千田真緒（千葉大学大学院融合理工学府）
話題提供：河村裕樹（一橋大学大学院社会学研究科）
話題提供：神崎真実（立命館グローバル・イノベーション研究機構）

企画趣旨

ここ 2～30 年ほどの間に「現場」との関係のなかで行われる質的研究はもはや当たり前のものとなり、現場で研究を行う手法も相対的にみれば整備されたといえる。では今現在「現場」の研究というときに意識される問題、研究者として「現場」と関係しようとするときに避けられない課題や体験とは何だろうか？異なる領域・立場から「現場」とのかかわりを論じている登壇者たちの発表を通じて考えてみたい。

話題提供１：ファン活動としての現場研究－BTS ファンダムの共感的フィールドワーク-（千田真緒）

本発表では，韓国の 7 人組アイドルグループ「BTS」のファンダム「ARMY」を対象とし，自己変容や再デザインのプロセスとしての「現場」を記述していく。ARMY である発表者が，二人称(共感的)かかわり(レディ，2008)のもと，ARMY/フィールドワーカーとして，ファン活動の現場を記録した。ARMY/フィールドワーカーが，他者と共に愉しむことを通じて明らかとなったファン活動における現場の姿を，本発表を通じて共有したい。

話題提供２：現場から問いを引き受ける—「共在」の分析可能性　（河村裕樹）

本発表では、精神科の医局それぞれに固有の治療文化として理解可能な実践の論理を明らかにすることを目的に、精神科医局で行ってきたフィールドワークを事例として、研究の問いを現場の人びとから引き受ける調査のひとつのあり様を検討する。そして、調査者が現場の人びとと共在することは、排除するべき問題というより、それ自体が分析可能性を備え、現場を形作る活動のひとつであることを論じる。

話題提供３：フィールドワーカーの視点とともに現れる場を描く　（神崎真実）

フィールドは、研究者の視点や問いとともに／に応じて現れる。本報告では、筆者が 2021 年より開始した居場所づくりプロジェクトの事例をもとに、フィールドが現れてきた過程を筆者の視点とともに描

出する。具体的には、規範的媒介項（山本，2015）を手がかりとして、メンバー同士の相互作用が安定するまでのプロセス―研究上の焦点化が行われる前段階の相互作用と、相互作用が安定した後の身体性の発露について検討する。

Re-questioning the Problems of “Field”

Teppei Tsuchimoto (School of Psychology, Chukyo University), Organizer

Katsumi Suzuki (School of Human Science, Waseda University), Organizer

Yuki Yoshikawa (College of Sociology, Rikkyo University), Organizer

Ryo Matsukuma (Faculty of Human Sciences, Bunkyo University), Organizer & Moderator

Mao Chida (Graduate School of Science and Engineering, Chiba University), Presenting Author

Yuki Kawamura (Graduate School of Social Sciences, Hitotsubashi University), Presenting Author

Mami Kanzaki (Ritsumeikan Global Innovation Research Organization), Presenting Author

Language: Japanese

編集委員会企画シンポジウム　11 月 5 日（日）13：00-15:00　C373

「変化」をとらえる質的研究

企画／司会：大川聡子（関西医科大学看護学部）
企画／司会：北出慶子（立命館大学文学部）
話題提供：小路浩子（神戸女子大学看護学部）
話題提供：小林智之（福島県立医科大学医学部）
話題提供：小林聡子（千葉大学国際学術研究院）
指定討論：能智正博（東京大学大学院教育学研究科）

企画趣旨

本シンポジウムは、2024 年度の質的心理学研究 第 25 号特集「『変化』をとらえる質的研究」のキックオフ企画である。今回は、時の流れや時代，社会情勢の大きな変化に応じて，人々の中で変わりゆくもの／変わらないものを質的にとらえた研究を「個人」、「社会・集団」、「空間」の変化の三層にわけて話題提供する。話題提供者のリサーチクエスチョンにおける「変化」の位置づけや、変化をとらえる質的研究の今後の展望についても議論を深めたい。

話題提供 1：個人の「変化」をとらえる
―保健師のキャリア形成のプロセスで起きていた変化；複線径路・等至性アプローチ（TEA）を用いた研究から（小路浩子）

私は 30 数年行政保健師として勤務した経験から、保健師の職業的アイデンティティの形成、キャリア発達について関心を持ち、研究を進めてきた。保健師の約 7 割は保健所や市町村といった行政機関で働き、複雑多様な地域の課題に対応するべく、保健・福祉・教育等の多岐に渡る部署に分散配置されている。このことは「先輩の背中を見て育つ」という次世代への専門性の継承を困難にし、加えて、組織の中で保健師の専門性が適正に認知されがたい環境も存在する中で、保健師は自身の専門性についての迷いや葛藤を抱えていることが指摘されている。そのような背景を踏まえ、保健師がどのように経験を積み重ね、困難や変化に立ち向かい、キャリアを形成してきたのかを複線径路・等至性アプローチの手法を用いて検討してきた。今回は、中堅期の保健師を対象とした研究から、「環境」「役割」「生活」といった 3 つの側面における中堅期特有の「変化」について、より深く掘り下げて考察する。

話題提供 2：社会・集団の「変化」をとらえる
―原発災害に伴う被災地自治体の変化：行政職員における健康に働き続ける要因のインタビュー調査から（小林智之）

2011 年の東日本大震災および福島第一原発事故の後、被災地の自治体では職員の早期退職が相次いだ。その後、継続的に新たな職員が配属されたものの、震災時からの職員だけでなく、新たに入職した職員に

おいても休職者や早期退職者が多く見られ、早期退職者の数はいまだ収まる様子を見せていない。そこで本研究では、被災地自治体において震災前から働き続けている職員 4 名と震災後に入職して働いている職員 4 名を対象に半構造化インタビューを実施し、被災地自治体の職員が健康的に働き続けるための要因について検討した。本話題提供では、オープンコーディングを用いた分析結果に基づき、震災がもたらした被災地自治体の変化にともない、職員たちがどのような問題に直面し、あるいは何を得てきたのかについて議論する。

話題提供 3：空間の「変化」をとらえる
―移動する子どもと居場所：声・場所・時間の変化から捉える（小林聡子）

国際移動とは一過的な身体の移動でありながらも、象徴的に人々に影響を与え続ける。それは、「あの時・あの場所」と「今・ここ」における自分の「在るべき姿」を想像させ、実際の「在り様」との間に葛藤をも生じさせる。本報告では、米国ロサンゼルスにあるパール高校（仮名）での 2 年間のエスノグラフィとその後の 13 年間の追跡調査をもとに、トランスナショナルな「日本人」生徒らが言語や空間を媒介にして社会文化的な位置取りをする様相を描き出す。生徒らは、日常的に「ジャプ」や「FOB (Fresh-Off-the-Boat)」というラベルを用い、校内に特定の居場所を作ることで互いに「かれらとは違う」と他者化をしていた。しかしながら、一見固定的に見えるラベルやテリトリーを通した位置取りは、時間や場所の変化に応じて、また一つの語りの中でさえ多様に変化する。まさに、我々は環境・もの・人といった周囲の存在と日々作用し合いながら、各々のリアリティを多様に形成しているのである。そのような曖昧なものをどう捉えることができるのか、ここではメンタルマップや語りの相互行為分析を通して多角的にアプローチする方法を検討していく。

Qualitative Research focusing on “Changes and Transformation”

Satoko Okawa (Kansai Medical University), Moderator
Keiko Kitade (Ritsumeikan University), Moderator
Hiroko Shouji (Kobe Women’s University), Presenting Author
Tomoyuki Kobayashi (Fukushima Medical University), Presenting Author
Satoko Kobayashi (Chiba University), Presenting Author
Masahiro Nouchi (Tokyo University), Discussant

Language: Japanese

常任理事会主催国際シンポジウム　　11 月 5 日（日）15：15-17:15　C273

土着心理学の発想とその展開（常任理事会企画）

企　　画：　伊藤 哲司（国際担当常任理事）
司　　会：　伊藤 哲司（茨城大学人文社会科学部）
話題提供：　ロジェリア・ペプア（ニューサウスウェールズ大学芸術デザイン建築学部）
話題提供：　ヴァクラヴ・リンコブ（コメニウス大学社会経済学部）
指定討論：　韓 圭錫（全南大学校社会科学大学心理学科）
指定討論：　村本 邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）

企画趣旨

日本質的心理学会大会で過去数年にわたり、「土地の力」をキーワードに据えたシンポジウムを開き、それぞれのフィールドでの知見をつなぎながら議論を重ねてきた。第 18 回大会・第 19 回大会では、韓国・光州の全南大学校で土着心理学の研究・教育に長年従事してきた韓圭錫（ハン・ギュソク）を迎え、「土地の力」をめぐる議論に彼の視点から加わっていただいた。今回の第 20 回大会では、さらにこれを拡張し、フィリピン出身のロジェリア・ペプア、チェコ出身のヴァクラヴ・リンコヴに加わっていただき、質的研究における土着心理学の発想とその展開についての国際的な議論を深化させる。

人間は誰しも、ある土地に根ざして生きているはずであるが、にもかかわらず心理学においてはその点への注目は従来とても希薄であった。それは近代化された社会に生きる私たちとしても、ともすると無視もしくは軽視してしまっている視点であろう。なお日本での私たちの議論は「土地の力」をキーワードとし、それを土着心理学と結び付けてきているが、英語の indigenous には「land」という概念は必ずしも含まれていないようである（この事実がまた「土着的」である）。土着心理学と「土地の力」に着目した私たちのパースペクティブが、英語のみならず他言語で表現されたときには、異なる様相を見せるのかもしれない。

この国際シンポジウムでは、ハイフレックスで開催し、同時通訳を入れて日本語でも英語でも参加を可能とする。会場に来られる方も、ご自身のデバイスを持参し、Zoom に入っていただき、ご自身で言語を切り替えられるようにしてご参加いただきたい。なお Wi-Fi および電源は、会場で利用が可能である。

話題提供１：ロジェリア・ペプア（Rogelia Pe-Pua）※対面参加

土着研究の方法開発の展望（Prospects for developing indigenous research methods）

土着心理学（Indigenous Psychology: IP）は、世界のさまざまな地域でさまざまなペースで発展してきた。フィリピンは土着心理学の歴史が長い国である。フィリピン土着心理学の 2 つの重要な成果は、土着概念の特定とその後の理論化、および土着研究手法の開発であった。西洋の方法がうまく機能していないことを認識していた土着心理学者は、土着の知識とコミュニケーションの方法がより適切であることを発見した。これらは、会話、グループ交流、観察、フィールドワークなどに関連した方法であった。

これらの手法は文書化され、さらに発展して研究手法としてより洗練された。さらに、これらの方法と関連する問題を管理する原則が明確にされた。フィリピンの経験は、他国で土着民族の研究方法を開発するためのひな形を提供できる可能性がある。
＜プロフィール＞ ロジェリア・ペプアは、ニューサウスウェールズ大学の名誉准教授（Honorary Associate Professor）であり、そこで 18 年間教鞭をとった。 以前はフィリピン大学で 15 年間教鞭をとっていた。 彼女は、フィリピン心理学ハンドブックの編集版 2 巻を含め、土着心理学について広く出版をおこなっている。

話題提供２：ヴァクラヴ・リンコヴ（Vaclav Linkov）※オンライン参加
東アジアの土着心理学:高次の土着心理学の類似性と創造可能性(East Asian indigenous psychologies: similarities and possibility of creation of higher order indigenous psychology)
　台湾の研究者・楊國樞（Yang Kuo-Shu）が示唆しているように、土着心理学はいくつかのレベルで検討される可能性がある。近隣諸国の共同研究者は、すでに開発された土着概念を使用して、地域の土着心理学を組み立てることができる。複数の土着心理が発達している唯一の地域は東アジアである。韓国人・日本人・フィリピン人・中国人の心理学者によって開発されたいくつかの概念は、外部から見ると同様に見える。そして、それらは地域レベルの概念の基礎として機能する可能性がある。そのような概念は「顔」であり、韓国、日本、中国の学者によって研究されている。同様に見える他の概念としては、フィリピンのパキキラムダム（pakikiramdam）と韓国のヌンチ（noonchi）、また中国のレンチン（renqing）とフィリピンのウタンナローブ（utang-na-loob）などがある。これらの概念を各国の学者が比較検討すれば、高次の東アジア地域土着心理学の発展につながる可能性がある。
＜プロフィール＞ ヴァクラヴ・リンコヴは、チェコ・ブラチスラヴァのコメニウス大学の心理学の助教である。彼は、国際異文化心理学会から早期キャリア賞を受賞した。心理学と文化の交差点、心理学における数学の使用、サイエントメトリクスが心理科学に与える影響、交通心理学のさまざまな分野などに興味を抱いている。

Idea of indigenous psychology and its development

Ito Tetsuji (Ibaraki University), Moderator

Rogelia Pe-Pua (the University of New South Wales, Australia), Presenting Author

Vaclav Linkov (Comenius University, Czech), Presenting Author

Han Gyuseog (Chonnam National University, Korea), Presenting Author

Muramoto Kuniko (Ritsumeikan University), Discussant

Language: Japanese & English with simultaneous interpretation

会員企画シンポジウム１　　11 月 4 日（土）10：00-12:00　AS251

ICT 教材とハイブリッドになった教師の志向性を問う

－複数のステークホルダーによるポスト現象学的なアセスメントを経て－

企　　画：呉文慧（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）
司　　会：馬場大樹（千葉経済大学経済学部）
話題提供：呉文慧（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）
話題提供：高村直樹（中学校教員）
話題提供：江草遼平（千葉商科大学基盤教育機構）
指定討論：馬場大樹（千葉経済大学経済学部）

企画趣旨

今日の我が国の学校現場において，例えば「一人一台端末」のように，ICT 教材の導入が加速している。教育現場が一変しかねないこの動向に対して，ICT 教材が子どもに与える影響のみならず，教師と ICT 教材との関係性についても盛んに議論されている。

本企画の特徴は，教師と ICT 教材とのあるべき関係性を考える上で，教師の自律性と ICT 教材の両者をすでに常に不可分に結びつき，互いの部分に還元されないハイブリッドな存在としてとらえるポスト現象学（Verbeek，2015/2011）の立場に立つ点にある。Verbeek（2015/2011）の議論に従えば，両者のあるべき関係性として，教師の意図と ICT 教材のどちらかを主体的もしくは従属的なものとみなすのではなく，教師の意図がある技術によって創発的に媒介されたものであることを自覚した上で，その媒介された自身のあり方が望ましいかどうかを可能な限り配慮する「関係的自由」を構築することが求められる。そしてこうした関係的自由を築くためには，その技術に関わる複数のステークホルダーが集まり，技術による媒介を予見し，かつそのことが望ましいかどうかを問い直す「構成的技術アセスメント」という対話のプロセスが必要とされる。

本企画では，構成的技術アセスメントをおこないながら中学校教員とともに ICT 教材を活用した社会科授業づくりのアクション・リサーチの結果を報告する。さらにそこにおいて実施された構成的技術アセスメントを通じて，ICT 教材が導入されたことで教師にどのような変容が生じたか，また参加したステークホルダーがそのプロセスをどのように経験したかについて語りあう。以上の話題提供を通じて，「ICT 教材とハイブリッドになる」ことがいかなる出来事であったかを総体的に描き出すことを試みる。

話題提供１：教師の志向性の変容の分析（呉文慧）

本報告では，本企画が依って立つポスト現象学について概説した上で，ICT 教材を活用することで生じた教師の変容を報告する。その際に焦点を当てたのは，現象学からポスト現象学を貫く鍵概念である「志向性」（意識・前意識を問わない人間の知覚や行為の地盤）である。具体的には①：校内で ICT 教材推進委員となり，ICT 教材を積極的に使用する中で大きく授業形態を変容させた高村教諭にインタビューを実

施し，高村教諭が ICT 教材と出会いハイブリッドな存在となる中でどのような志向性の変容が生じたのかについての分析，②：①を経て自らの志向性の変容を自覚した高村教諭が，教科教育や ICT 教材開発を専門とする研究者と共に構成的技術アセスメントを実施しながら授業づくりを行ったそのプロセスの分析，以上二つを報告する。

話題提供２：ポスト現象学的なアセスメントを経て（高村直樹）

本報告では，構成的技術アセスメントを含めたアクション・リサーチ全体を通じて生じた教師の変容について，当事者の立場からその経験を詳らかにする。特に，ICT 教材を活用した社会科単元を実施した経験だけではなく，そのプロセスの中で自身の志向性を他者から分析されつつ，そのことを実践へとどう繋げたかに焦点を当てて語りたい。

話題提供３：技術的専門家としての立場から（江草遼平）

本報告では，活用される ICT 教材についての技術的専門家としての立場から構成的技術アセスメントの経験について論じる。ICT 教材の開発・提供・活用において，ICT が教師の意図を媒介することへの反省，また，実践者である教師自身による反省に対する支援は，あまり注視されていない。ここでは，構成的技術アセスメントにおいて，技術的専門家という独自の立場からいかなる参加を試みたのか，その経験が技術的専門性を有する者としての自分自身にとっていかなる意味を有したかについて報告したい。

Rethinking Teacher’s Intention Which Became Hybrid with ICT Teaching Materials:

Through A Multi-stakeholder Assessment Based on Post-phenomenology

Bunkei Kure (Kobe University), Organizer and Presenting Author

Hiroki Baba (Chiba Keizai University), Moderator and Discussant

Naoki Takamura (Junior High School Teacher), Presenting Author

Ryohei Egusa (Chiba University of Commerce), Presenting Author

Language: Japanese (12 point, Arial)

会員企画シンポジウム２　　11 月 4 日（土）10：00-12:00　AS252

土地の力を描き出す

ー映画を使ったビジュアル・エスノグラフィーー

企画・司会：村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）
話題提供：河野暁子（岩手県立大学／立命館大学大学院）
話題提供：呉　宣児（共愛学園前橋国際大学国際社会学部）
話題提供：大城凌子（名桜大学人間健康学部）
話題提供：張　亦瑾　（馨思心身・精神科クリニック）

企画趣旨

企画者は、東日本大震災以後、東北に通うなかで、それぞれの土地に根差した力が復興を支えていることを実感し、「土地の力」と名づけた。近代化に伴い、人類は土着を喪失し、心理学もそれを排除し、人類を抽象化してきたと言える。分離独立した個人でなく、自然・文化・歴史の中に含まれる人々をホリスティックに描き出す質的心理学の可能性に期待し、過去５年にわたり、質的心理学会大会で「土地の力」を鍵概念にしたシンポジウムを開催してきた。併せて、ビジュアル・エスノグラフィーとして、映画を素材に「土地の力」を議論する研究会を 2019 年 9 月より毎月継続し、現在 20 回を数える。今回のシンポジウムでは、研究会メンバーである話題提供者が選んだ映画をもとに、「土地の力」を描き出す。「土地の力」をどのように定義し、どのように研究していけるのか議論できたらと考えている。

話題提供１：土地に根ざして生きること-映画「little forest」より（河野暁子）

映画「little forest」は、東北の小さな集落の夏・秋・冬・春を描いた四部作である。主人公のいち子は都会で居場所を見つけられず、生まれ育った集落で自給自足の生活を始める。育てた野菜や野山から採ってきた食材を毎日調理しては、美味しくいただく。東北の自然はどこまでも美しく、同時にとても厳しい。小さな集落の人間関係は親密であり、時にわずらわしい。土地に根ざして生きるいち子や集落の人々の姿から、「土地の力」とはどのようなものかを探っていきたい。

話題提供２：同じ場所で何も変えず住み続けることの意味ー「国際市場で逢いましょう」より（呉宣児）

本発表では 2014 年韓国で公開された映画「国際市場で逢いましょう」を取り上げる。朝鮮戦争中の 1950 年、北朝鮮側の地域から脱出する最中、父と妹と離れ離れになった長男ドクスは、母親と弟と末子の妹と一緒に南へ南へと移動し、辿りついたのが叔母がいる釜山の「国際市場」だった。長男のドクスは父親の代わり家族を守るために市場で靴磨きの仕事をしながら少年時代を過ごし、青年になるとドイツの炭鉱の労働者になったり、ベトナム戦争にも出兵したりした。家族がいる「国際市場」に戻りずっとそこで暮らす。離れ離れになった父親や妹が戻ってくるかもしれないと思いながら、現代化が進んで変わりゆく国際市場の中で「変わらない・変えることができない場所」を守り続けるドクスの人生が描かれている。

スピーディに変わる社会の中で「変えずに場所を守り続け、そこに住み続けること」の意味と「土地の力」の概念がどうつながるのかについて考えていきたい。

話題提供３：映画「洗骨」に見る看取りの文化と土地の力（大城凌子）

「洗骨」とは、風葬や土葬した数年後に再び死者と対面し、骨を洗い清め、墓に埋葬する葬制である。映画の舞台は火葬場のない沖縄の離島・粟国島。伝統的風習（洗骨）を通して、祖先とのつながりや島の暮らし、そして家族との関係を編みなおしていく姿がユーモアを交えて描かれている。伝統的な島の看取り文化では、死は終わりではなく、自然と一体化して生き続けるつながりを意味する。島の人々が「洗骨」を通して育んできた思いを「土地の力」として問い直してみたい。

話題提供４：映画「父の初七日」における台湾の土地の力（張亦瑾）

子供たちが静かに逝った父親を火葬するまでの 7 日間を描いた作品である。葬儀は伝統的なもので、「泣け」と言われれば号泣しなければならず、「泣かない」と言われれば泣けないなど、風習に翻弄され、戸惑うことが多い。演出がコミカルなので、タブーに触れることができており、ドキュメンタリーを見ているような雰囲気もある。発表者は、この映画を通して「土地の力」に支えられて、どのように人々が喪失を乗り越えていくかを紹介する。

Describing the Power of the Land:

Visual Ethnography with Films

MURAMOTO Kuniko (Ritsumeikan University), Moderator

KONO Akiko (IWATE Prefectural University), Presenting Author

OH Sun Ah (Kyoai Gakuen University), Presenting Author

OSHIRO Ryoko (Meio University), Presenting Author

CHANG Ichin (Soul’s Fragrance Psychiatric Clinic), Presenting Author

Language: Japanese

会員企画シンポジウム３　　11 月 4 日（土）10：00-12:00　AS257

「病棟文化が変わる」

ー「対話の仕方と役割認識」の変化で共支援的なナラティヴ・コミュニティに変容した緩和ケア病棟ー

企　　画：　田代順（ナラティヴアプローチ研究室）
司　　会：　田代順（ナラティヴアプローチ研究室）
話題提供：　大西郁子（東京成徳大学大学院）
話題提供：　田代順（ナラティヴ・アプローチ研究室）

企画趣旨

「病棟」というのは一つの「社会」でもある。医学の専門性／専門知を基盤にしながら医療行為が／専門的な役割に見合う認識と行為が、集約・展開される社会である。そして同時に社会であるゆえ、当然そこにはその社会を秩序立って構成・進行させていくための、病棟社会を構成する患者やその家族も含めた人々の「役割」展開やそこから析出してくる「やり取り」（≒コミュニケーション≒ナラティヴ）も展開する。これらの不断の「やり取り」が病棟社会を構成していると言える。まさに病棟に対する「人々の語り」が、不断にその病棟社会を構成し続けるということである。

今般、緩和ケア病棟のスーパービジョン（以下 SV とする）を通して（ ＝コ・バイザー含めた最もミニマムなリフレクティング・トークの形での多声化 SV である三人 SV)、そのバイジーである緩和ケア病棟のソーシャルワーカー（以下 SW とする）が、SV で受けた「声」をきっちり「病棟社会」に運び込んで展開したことによって、結果として病棟（社会）が大きく、多方向に（患者のみならず、その家族、病棟スタッフ、とりわけ看護職）緩和され、「病棟社会」が共支援的 - 共緩和的に変容したのを目の当たりにすることになった。いわば、これまでの緩和ケア病棟の、それぞれの役割に内閉・固執しながら、専門知の一方的な推測的「配慮」の元、その言説に従って患者を（これまた）一方的に患者役割に押し込めていくこと。あるいは、他のスタッフや患者、その家族と関わり合う中で当然生じてくる「自分の気持ち」という主観的思いや意見。これらの「主観的思い／語り」が「専門知／専門家」の役割の名の下に、これまでは相当に「蔑ろ」にされてきた。それが、今般の SV を通して、これまでの「治療文化／ケア文化」が大きく変容したのを目の当たりにすることになった。

以上の「変容」は、まさに病棟内での対話の仕方、つまり対話の「流通」の仕方と「中身」をこれまでにはない、ナラティヴな仕方に変えていったことが、病棟社会の変容に大きく寄与したと思える。例えば、スタッフ同士の／スタッフグループでの対話の中で、自分の気持ち、すなわち主観的思いを吐露すること、ナラティヴな三人 SV を受ける中で、SW のアイデアとしてナース・ステーションにおかれた「つれづれノート」（＝主観的対話 - 雑談ノート。ツイッターのようにつぶやく形。それに対する他のスタッフの応答)、これがナラティヴ・オンコロジーやパラレルチャートの文書のように機能して、まったく余裕のない状況でケアに当たっていた看護スタッフ等を（文字通り）「緩和」していった。その緩和と役割認

識の大きな変化と様々な対話の多出的＝多声的展開が病棟を大きく共支援的に変容させた「様相」を報告する。以上を通して、日本の緩和ケア医療のあり方に「寄与」するであろう、ナラティヴなアプローチを報告することが企画趣旨となる。

話題提供１：三人 SV のコ・バイザーが思うこと（大西郁子）

コ・バイザーとして関わって、まず言えることは、三人 SV が支援 - 治療チームとしても機能することである。患者やその家族、スタッフの「言説」をベースに、次回は「ここを詳しく聞いてみて」「この語りのここについて質問してみて」等、極めて具体的に SV が展開する。また、バイザー側による「専門的推測」がほとんどないことも特徴的である。重要なことは、患者など「当事者」にしっかり聴くというスタイルを取る（見立てていく上での専門知に基づく「推察」はある）。これは、患者にとって「重要なこと」は患者／当事者抜きで決めないというオープンダイアローグの「原則」につながるものである。それが患者とその家族、それに関わる病棟スタッフの対応に強い影響を与え、双方向に硬直した「役割」や「専門知」の一方的強要が大きく減衰して、専門的推測による、専門知からの「決めつけ」や専門的役割に逃げ込むことなく、患者とその家族の「言説」に基づいて、患者とその家族の言説を対話的にしっかり聞くという対話スタイルの浸透が、病棟全体を大きく変えていったことを実感している。

三人 SV を受けた、一家族への SW の関わりから始まり、つれづれノートで主観的思いを吐露し合う病棟スタッフが、これまでは思いもつかなかった患者やその家族とのやり取りが、病棟全体の治療文化を変容していった様相を話題提供したい。

話題提供２：解題（田代順）

バイジーである SW は、残念ながら予定があるため、参加できない。

代わりに、この SW のバイザーである企画者が、SV 報告をもとに、具体的にどのように病棟社会が変容したかについて、スタッフの「声」をもとに話題提供する。

この一家族への対応から始まった「変化」は、現在、（おそらく）日本で初めてと思われるオープンダイアローグ的+アンティシペーション・ダイアローグ的なリフレクティング展開による、患者と家族、それに関わる医師も含めた病棟スタッフ、他病院の関係者が一同に会して「合同カンファレンス」を行うまでになっており、その支援的インパクトと効果にも言及して、我が国の緩和ケア病棟のあり方について再考・検討したい。

今般の発表に関し、事例に関わる部分については、当該病棟から事例発表に関わる「包括的な合意」を得ている。当然ながら、参加者にも「守秘義務」が生じることを明記しておく。

会員企画シンポジウム４　　11 月 4 日（土）10：00-12:00　AC231

子育て中の母親インプロバイザー(即興演者)の上演参加

ー「ザ・ベビデルテスト」上演をめぐる語りから考えるー

企画・司会：直井玲子（東京学芸大学教育学部）
企画・指定討論：園部友里恵（三重大学大学院教育学研究科）
話題提供：豊田夏実（インプロバイザー）
話題提供：下村理愛（インプロバイザー）
話題提供：中込裕美（インプロバイザー）
話題提供：江戸川カエル（インプロバイザー）

企画趣旨

企画者(直井・園部)は、インプロ(即興演劇)におけるジェンダー・バイアスに問題意識をもち、2021 年 6 月、日本で活動するインプロ演者たちとともに「インプロとジェンダー探究プロジェクト」を結成した。同プロジェクトでは、米国のインプロ劇団「BATS Improv」の Lisa Rowland らによって考案された上演形式「ザ・ベクデルテスト」(The Bechdel Test)を継続的に学び、日本において上演活動を継続している(直井・園部 2021)。

2022 年度、2 人のメンバーが出産した。彼女らは、出産を理由にプロジェクト参加を辞めなかった。しかし、出産前と同様に舞台に立てたかといえば決してそうではない。今回の上演への出演は見送ろう、主人公を担うのはやめよう、などといった意識が自然に働いてしまう。赤ちゃんがいることを理由に舞台に出られないのだとしたら、それ自体が大きなバイアスなのではないか。そうした問題意識のもと開催したのが、スピンオフ公演「ザ・ベビデルテスト」(The Baby-del Test)であった。「ベビーも出るかもしれない」という意味を込め、「ザ・ベクデルテスト」の新たなかたちを探究することを目的とし、Zoom ウェビナーを用いて 2023 年 1 月 5 日(木)午前中に上演した。

本シンポジウムでは、「ザ・ベビデルテスト」で何が起こったのか、そしてそれはどのように受けとめられたのかということを、当日の映像記録を辿りながら、主人公の視点、共演者の視点、発案者の視点から、それぞれ語っていく。そして、子育て中の母親インプロバイザーが抱えてしまう上演参加をめぐる課題を明確にし、その克服にむけた方策を討論していく。

*付記:本シンポジウムは、JSPS 科研費(基盤 C、21K00205)の助成を受けている。

話題提供：話題提供:赤ちゃんのそばで/とともに舞台に立つということ（豊田夏実・下村理愛・中込裕美・江戸川カエル）

「ザ・ベビデルテスト」では、主人公を「子どもと生活する 3 人の女性」とし、0 歳の子どもをもつ豊田と下村、そして 3 歳の子どもをもつ園部が担った。メンバー間で事前に共有したのは、「子どもの安全

を優先する」ということであった。子どもを抱っこしながら出演するシーンもあるかもしれないし、ミルクを与えるために席を外しているかもしれない。そうした状況を全て起こり得るものとして受容することを前提に、上演は進められた。

0 歳の子どものそばで/とともに主人公を担った演者たち(豊田・下村)は、上演中、自身のなかに、そして自身と我が子とのあいだで何が起こっていたのか。また、そこに共演者としてかかわった演者たち(中込・江戸川)の場合はどうか。当時の映像記録を参照しながら、語っていく。

指定討論：舞台上でも、「母親であること」から逃れられないのか(園部友里恵)

「ザ・ベビデルテスト」を通して最も感じたのは、たとえ、舞台上であったとしても、そばに我が子がいる状態で舞台に立つと、「私はこの子の母親である」という「現実」に引き戻されてしまうということであった。そしてそれは、「現実」と距離をとろうと、自分以外の誰かを演じようとすればするほど、強まっていく。

今回の試みは、近年見聞きするようになった「職場に我が子を連れていく」と同じなのか、異なるのか。母親インプロバイザーが「母親である」という役割から降り表現できる場をつくるには何が必要なのか。彼女らの「話題提供」でなされた語りに、そして 3 歳の子どものそばで/とともに主人公を担った体験を重ねながら検討していく。

Participation in the Performance of Mother Improvisers Who Are Raising Children

Thinking from the Narrative Surrounding the Performance of “The Baby-del Test”

Reiko Naoi (Faculty of Education, Tokyo Gakugei University), Moderator

Yurie Sonobe (Graduate School of Education, Mie University), Discussant

Natsumi Toyoda (Improviser), Presenting Author

Rina Shimomura (Improviser), Presenting Author

Hiromi Nakagome (Improviser), Presenting Author

Frog Edogawa (Improviser), Presenting Author

Language: Japanese

会員企画シンポジウム５　　11 月 4 日（土）13：30-15:30　AS251

AI が質的研究をどう変えていくか

企画・話題提供：薛海升（東京大学大学院教育学研究科）
企画・話題提供・司会：中田友貴（立命館大学立命館グローバルイノベーション研究機構）
企画・話題提供：大橋英永（東京大学大学院教育学研究科）
指定討論：能智正博（東京大学大学院教育学研究科）
指定討論：尾見康博（山梨大学大学院総合研究部）

企画趣旨

本企画は，急速に進歩する AI が質的研究にどのように影響を与え，そしてこれからの可能性をどう掴むかに焦点を当てる。対話型 AI の ChatGPT は，2022 年 11 月 30 日の公開からわずか 5 日で 100 万人，2 ヶ月で 1 億人のユーザーに到達した。その影響は，教育，芸術，金融，メディアなど，多岐にわたる分野に波及している。特に，言葉と深く関わるほどその影響を受けやすいと言える。その意味で，質的研究も大きな影響を受けると予想される。この企画では，現在質的研究に従事している研究者がこの変革期に直面している好機と危機をどう捉えるかについて探求する。

話題提供１：生成系 AI と心理学研究への影響（中田友貴）

2022 年に ChatGPT が公開され，情報系産業だけでなく，教育，産業，学術など様々な領域で議論が巻き起こっている．本話題提供ではまず ChatGPT などの生成系 AI の基盤となる深層学習とその波及について紹介を行う．その上で ChatGPT などの大規模言語モデルについての基本的な原理の解説を行う。次に，社会的な展開とその影響，特に大学や産業における ChatGPT の活用動向の概観を報告する．そして生成系 AI を心理学研究に用いる際の利点や限界点,倫理的な問題について問題提議を行い,議論を行いたい。

話題提供２：AI のある研究生活（薛海升）

本発表では，AI の専門家でもなく，プログラミングすらできない質的研究者が，　AI の進化に心を動かされ，新たな視点を持つようになった一方で，将来自分の仕事が取って代わられる恐怖を感じながら，自身の研究に役立てる方法を探る冒険という一種のエスノグラフィーを共有したい。具体的に，今まで，分析に AI を組み込んでみた結果，経験及び感想など，具体例を挙げながら紹介したい。そして，AI と質的研究の未来について，私なりの見通しを述べたい。これは，この変革期にどう立ち向かうべきかを模索している質的研究者たち――特に新技術に対して苦手な方――にとっての一助となることを願っている。

話題提供３：AI チャット相談から考える AI のインパクト（大橋英永）

本発表では，現在利用可能な AI チャット相談のうちいくつかを，発表者が実際に利用した事例とともに紹介しつつ，その影響を考察する。ここでの AI チャット相談とは，スマートフォンや PC 上でテキス

トで入力した内容に対して，カウンセリング AI が自動で応答するサービスを指す。こうしたサービスの提供が技術的に可能になってきていることは，臨床実践，ひいては質的研究に対して，どのような影響をもたらすのだろうか。駆け出しの臨床心理士である発表者の目線を起点として，AI チャット相談の可能性と課題，そして質的研究に与える影響について考えてみたい。

Title of symposium:

How AI will change qualitative research.

Haisheng Xue (Graduate School of Education, The University of Tokyo), Moderator/Presenting Author

Yuki Inoue Nakata (Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan University), Presenting Author

Hidenaga Ohashi (Graduate School of Education, The University of Tokyo), Presenting Author

Masahiro Nochi (Graduate School of Education, The University of Tokyo), Discussant

Yasuhiro Omi (Graduate Faculty of Interdisciplinary Research), Discussant

Language: Japanese

会員企画シンポジウム６　　11 月 4 日（土）13：30-15:30　AS252

TEA にジルベール・シモンドンの個体化・展結を取り入れる試み

－右上がり TEM に対しての分析例を用いて－

企　　画：　福山未智・サトウタツヤ（立命館大学）
話題提供：　福山未智（立命館大学人間科学研究科）
話題提供：　木戸彩恵（関西大学文学部）
話題提供：　小澤伊久美（国際基督教大学教養学部）
話題提供：　阪下ちづる（東京大学教育学研究科）
指定討論：　田垣正晋（大阪公立大学大学院現代システム科学研究科）

企画趣旨

フランスの哲学者ジルベール･シモンドン（Gilbert Simondon）の提唱する「個体化(individuation）」と「展結(transduction）」を複線径路等至性アプローチ（TrajectoryEquifinality Approach: TEA）に採り入れる為、個体化や展結を用いた研究発表を通じて、TEA の発展の可能性を追求する。著書である『個体化の哲学』においてシモンドンは、個体の実在から個体化を認識するのではなく個体化の操作を第一義とみなし、その発生の原理を記述した。本企画では 4 名がそれぞれ異なるフィールドで行った研究を、個体化、展結の理論を TEA に採り入れ分析した結果、またその際に用いた理論について発表を行う。議論を通じて、個体化について理解を深め、また、個体化が質的研究、特に TEA に採り入れた際にどのような有用性があるのか、という点について検討し、更なる TEA の発展に繋げていく。

話題提供１：TEM における個体化プロセス-三名の自作派コスプレイヤーへのインタビューから-（福山未智）

マンガ等に登場するキャラクター達に扮して遊ぶ「コスプレ」という行為がある。コスプレは 21 世紀から一般に発展し、現代では多くの若者が楽しむ遊戯となっている。本研究では、コスプレという遊戯の多様な楽しみ方を解明し、その遊戯の方法によって異なる個体化のプロセスと共通的な要因を導き出し、遊びの発達のプロセスを明らかにする事を目指す。

研究方法は、自作派コスプレイヤー3 名に対して半構造化インタビューを 3 回行い、TEM を作成した。分析に際してはシモンドンの個体化論を援用し、コスプレに対する目的・目標が変化した時点に注目して行った。その結果、コスプレ活動を続ける中で転換期（コスプレに対する目的･考え方が変化した期間）が 3 名に共通して現れた。これにより、遊びの発達プロセスでは、転換期が遊びを続けるかやめるかの分岐点であると考えられ、遊びを発達させる中で転換期が訪れることは必須通過点でもあるといえる。

話題提供２：大学生の自分磨きの動機と行為維持（木戸彩恵）

若者の間で，自分自身を「垢抜け」させたいという思いから，SNS を利用して「自分磨き」を行うことが流行している。本研究では「自分磨き」を現在の自分自身よりもさらに素敵で魅力が向上した自分にな

ることを目指しさまざまな（外見的・内面的）努力をすることと定義した。その上で，自分磨きの種類や対象，自分磨きへの動機やモチベーションとなっている理由に関する共通点や相違点を検討することを目的としたインタビュー調査を行った。

インタビューは，大学生 10 名（男性 5 名・女性 5 名）を対象として実施し，TEA による分析から TEM 図を作成した。発表では，この研究を個体化理論の観点から検討した結果について紹介する。

話題提供３：日本語教師の Auto-TEM に見る展結と個体化（小澤伊久美）

本研究では、よい日本語教師を志す現職日本語教師のライフの分析を目的に、個人別態度構造分析のインタビューデータを基盤として縦断的に Auto-TEM を行っている。TEM 図を描く都度、新たな等至点と両極化した等至点との対を見出しては TEM 的飽和に至る、を繰り返した結果、ほとんど上下の変動がない右肩あがりの TEM 図となっている。発表では、これを展結と個体化が繰り返されたプロセスとして捉えることで、個々の個体化のポテンシャルを明らかにするとともに、目的の領域を未来展望とした Auto-TEM を縦断的に行うこと自体が右肩上がりの TEM 図を描く展結と個体化の連鎖へ協力者を誘う可能性を論じる。

話題提供４：高校教師の生徒認知の変容過程で生じる不均衡と結晶化（阪下ちづる）

本発表では，TEM 図で描く高校教師の生徒認知の変容について，シモンドンの固体化理論を用いて検討する。生徒認知とは，教師の生徒に対する見方や捉え方であり，複数の認知次元で構成されている。認知次元は，多様であるほどより多義的な意味合いをもって生徒を捉えることができるとされている。検討において着目するのは高校教師の学校間異動である。教師は異動により異なる生徒集団と出会うことで，生徒認知の変容が生じ，認知次元を再構築する。このプロセスを，固体化理論における不均衡と結晶化の概念を用いて考察する。

ENGLISH TITLE: An attempt to incorporate Gilbert Simonton's individuation and exhibition in TEA

-Using an example analysis for a right ascending TEM-

SATO, Tatsuya (Ritsumeikan University), Organizer
FUKUYAMA, Misato (Ritsumeikan University), Organizer & Presenting Author
OZAWA, Ikumi (International Christian University, Department of Liberal Arts), Presenting Author
Kido, Ayae (Kansai University,Faculty of Literature), Presenting Author
Chizuru SAKASHITA （Graduate School of Education, The University of Tokyo), Presenting Author
Masakuni Tagaki (Osaka Metropolitan University, Graduate School of Sustainable System Sciences), Discussant

Language: Japanese

会員企画シンポジウム７　　11 月 4 日（土）13：30-15:30　AS257

実践者からみた「こどもの居場所」の課題

―必要不可欠なヒト・モノ・コトについて考える

企画・話題提供・ファシリテーター：松嶋 秀明（滋賀県立大学）
企画・話題提供・ファシリテーター：保坂 裕子（兵庫県立大学）
話題提供：　上野敏子（ごはん処『おかえり』）
話題提供：　川崎敦子（NPO 法人 芹川の河童）
話題提供・指定討論：　鈴木晶子（NPO 法人パノラマ）

企画趣旨

内閣府によれば「こどもの居場所」とは「家でも学校でもなく自分の居場所と思えるような場所」である。こどもの居場所のひとつである「こども食堂」の数は 2022 年時点で全国で 7 千を超える（むすびえ,2023）。その背景には、困窮対策をはじめ、地域とのつながりづくりなどさまざまな意図や課題がある。このように多くのこどもの居場所がつくられるようになってきたことは喜ばしい反面、こどもたちの求める場になっているかどうかは、常に反省的に考え続けていく必要があるだろう。

ここで「居場所」とは、広辞苑によれば、人がいるところという物理的な空間を意味しているが、近年では「安心とか安らぎとかくつろぎ、あるいは他者の受容とか承認という意味合いが付与されて、自分のありのままを受け入れてくれるところ、居心地のよいところ、心が落ち着けるところ、そこに居るとホッと安心して居られるところというような意味に用いられるようになってきた」（住田,2003）。単に物理的な空間があるだけではなく、そこでどのような活動がなされるのか、人と人との関係がつむがれるのかも重要になる。

本シンポジウムでは、まずは、こども支援の実践をされている方々（上野さん、川﨑さん）の視点で、現状や想いを語っていただくことからはじめたい。これらの場に参与している研究者（松嶋、保坂）もまた、自らの見えを語ることで、場を多層的に描きだしたい。さらに、こどもの「居場所」について長年の経験をおもちの鈴木さんからのコメントを含めて、「こどもの居場所」を考える際に必要不可欠なヒト・モノ・コトについてうかびあがらせ、議論してみたい。

大阪豊中のごはん処『おかえり』の実践から（上野敏子・保坂裕子）

上野さんが運営するごはん処「おかえり」は、個人運営の飲食店として 2019 年に開業した。公的な助成金などは受けず、個人などからの寄付や地域での助け合い、支えあいによって実現している支援実践である。コロナ禍を経て、地域に根差したすべての困窮する人を対象とした実践を展開し、信用を得ている。本発表で上野さんには日々の活動のなかから見えてきた課題についておはなしいただく。なかでもとくに、こどもたちへの支援に関して、学校や地域行政とのかかわりで意識してこられた、「つながるための媒体」としての居場所実践についてお話しいただき、こどもたちにとっての「居場所」に何が求めら

れているのかについて、お話しいただく。

子どもの第三の居場所・みんなの食堂の実践から（川﨑 敦子・松嶋 秀明）

川﨑敦子さんが運営する「子どもの第三の居場所」は、2022 年に日本財団の助成をうけて誕生した。2020 年に川﨑さんがたちあげた「みんなの食堂」が、その基盤となっている。これは「地域循環型未来食堂」といわれ、代金を支払うことのできない人が無料で食事をとることができる一方で、誰でも食事券を後に利用するものに残していくことができる。そのため一方的な支援―被支援の関係をつくらないところが特徴である。第三の居場所では、大学生が中心的役割をになってプログラムを作成しているが、かつて被支援者であった人たちも、運営スタッフとしてなくてはならない存在感をもっている。これらは誰でも（支援されるだけでなく）何かの役にたてると感じたいと思っているという川﨑さんの信念を具現化したものといえる。今回は、みんなの食堂・第三の居場所がどんな人とのつながりをうみだすのかに注目してお話しいただく。

地域でつくるこどもの居場所に必要なこと（鈴木 晶子）

現在、「こどもの居場所」と考えられている場所の中には、児童館や青少年活動拠点のようなユニバーサルな居場所、あるいは障害を持つ児童向け放課後デイサービスのような制度に基づく利用申請が必要なターゲットが明確な居場所、そして今回話題提供として提起されるユニバーサルに誰もがアクセス可能でありながら困窮、孤立対策としての意図を多分に含んだこども食堂、校内居場所カフェのような居場所もある。こどもの居場所として、どんな居場所にも共通すること、そして、居場所ごとに集うこどもの状況に合わせて生み出されることを、実践者と研究者の目線を通じて議論したい。

Practitoners’ narratives about the future challenges for “kodomo no Ibasho”?

- Discussing about person, things, and activities that indispensable.

Matsushima Hideaki (University of Shiga prefecture) Moderator, Presenting Author

Hosaka Yuko (University of Hyogo) Moderator, Presenting Author

Ueno Toshiko (Gohan-dokoro “Okaeri “) Presenting Author

Kawasaki Atsuko (NPO Serikawa no kappa)　Presenting Author

Suzuki Akiko (NPO Panorama) Presenting Author/ Commentor

Language: Japanese

会員企画シンポジウム８　　11 月 4 日（土）13：30-15:30　AC231

不思議な経験に遭遇したらどうしたらよいか？

ー例外的事象から事例研究へー

企画・司会：渡辺恒夫（東邦大学名誉教授）
話題提供：　岩崎美香（明治大学意識情報学研究所）
話題提供：　大門正幸（中部大学人間力創成教育院）
話題提供：　渡辺恒夫（東邦大学名誉教授）
指定討論：　森岡正芳（立命館大学総合心理学部）

企画趣旨

私たちは一生の間に、自然科学を土台とした「標準的」な世界観では即座に説明のつかない不思議な経験をしたり他者の経験談に深い印象を受けたりすることは稀ではない。たとえば過去生の記憶、夢予知、臨死体験や体外離脱体験等。このような例外事象の遭遇経験がある場合、人間科学の研究者としてどんな態度が望ましいだろうか。多くは①興味を封印して正統的研究に励むが、②不思議現象専門の研究団体に所属して現象の真偽を科学的に探究する少数派もいる。企画者が提案するのは③現象の真偽を括弧に入れ（epochè）事例を収集して体験構造を分析する現象学的事例研究という第三の道である。企画者は自我体験・独我論的体験の事例研究に携って学位も取る一方、標準的世界観からの例外性という共通項から不思議体験にも関心を寄せてきた。本シンポジウムでは、臨死体験と過去世記憶事例の代表的研究者を招聘して、事例研究への展開による本学会の研究テーマへの定着可能性を探りたい。指定討論には本学会の牽引者の一人で不思議現象へも関心を寄せて来た森岡正芳が当たることになり、さらなる議論の深まりが期待される。

話題提供１：日本人の臨死体験の質的研究（岩崎美香）

臨死体験は、死後存続研究の一分野として注目されてきた一方で、脳生理学的なメカニズムに基づく体験ではないかという議論も盛んである。発表者は、死後存続なのか、それとも脳生理学的なメカニズムに基づくものかという点は、ひとまず括弧に入れて、臨死体験者自身がどのようなことを体験したのか、また臨死体験後にどのような変化があったのかなどについて、本人の体験した世界に肉薄することを念頭に調査・研究を行ってきた。質的研究方法では、収集した事例データから体験要素のバリエーションが出尽くしたとされる「理論的飽和」が目指され、そこから新たな仮説生成が可能になるとされる。共時的なサンプル数の限られる特異的な体験に関する、質的研究方法からのアプローチの可能性について改めて考えていく。

話題提供２：過去世記憶を主張する子どもの事例研究（大門正幸）

記憶は成熟した脳を有してはじめて蓄積されるもの、という脳還元主義的前提に立てば、肉体の消失に

伴い記憶も消失するはずであり、過去生記憶は本来成立し得ないものである。しかしながら、そのような記憶を保有する者の数は膨大であり、真偽についての判断を保留し、重要な心理現象のひとつとして探求する価値は十分にある。さらに言えば、保有された「記憶」の一部については事実との照合という観点から検証可能なものもあり、脳還元主義を揺るがしうる現象としての探求も可能である。本発表では、企画趣旨の③の観点から、世界各国から収集された過去生記憶を持つ子どもの事例の分析から得られた当該の現象の全体像を提示すると同時に、②の観点から見て有力な事例についても紹介したい。

話題提供３：当事者研究としての自我体験・独我論的体験研究（渡辺恒夫）

「私はなぜWであって他の誰かではないのか？」「世界中で私であるのはWひとりなのでWは唯一で特別だ!?」等という児童期の自我体験・独我論的体験は臨床心理と発達心理の一部で研究されているが、時に指摘されるように隠れ当事者研究である。発表者は幼時よりこの体験に伴う例外者意識を抱いてきたが、学生の間から体験例が自発的に寄せられるようになったのを機として調査に基づく事例研究を企て、『質的心理学研究』等に発表を重ねてきた。その後現象学的方法に拠ることで、この体験には臨床・発達上の問題には還元できない形而上学的な核があることを自覚し、これも早くからの構想である体験からの死生観的展開である輪廻転生観に領域横断的に取り組み始めたので当事者視点で紹介したい。

What to do when you encounter a strange experience?

From exceptional events to case studies

Tsuneo Watanabe (Toho University, Emeritus Professor), Moderator

Mika Iwasaki (Consciousness Informatics Laboratory, Meiji University), Presenting Author

Masayuki Ohkado (Chubu University, School of General Education), Presenting Author

Tsuneo Watanabe (Toho University, Emeritus Professor), Presenting Author

Masayoshi Morioka (Ritsumeikan University,Faculty of Psychology), Discussant

Language: Japanese (12 point, Arial)

会員企画シンポジウム９　　11 月 4 日（土）16：00-18:00　AS252

質的研究法を学びほぐす

― 障害児・者教育の視座から ―

企画/司会/話題提供：　生田邦紘（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）
企画/話題提供　：　呉文慧（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）
話題提供　：　楠見友輔（信州大学教育学部）
指定討論　：　横山草介（東京都市大学人間科学部）

企画趣旨

2022 年 9 月、国連障害者権利委員会は、日本に対して特別支援教育制度の改善を目的とした教育政策を進めるよう勧告した。日本の特別支援教育がどうあるべきかを議論することは、今日の重要なテーマであるといえる。なかでも、障害児・者にとっての学びとは何か、どのように学んでいるのかを議論することは不可欠である。しかし、障害児・者の学びを捉える質的研究に取り組むとき、従来の方法論にはいくつかの点で困難がある。たとえば、発話のない重度の障害児・者の学びをどのように捉えるのか十分に検討されていない。従来のインタビュー方法や分析方法は、障害のない人を対象として設計されているという問題がある。そのため、障害児・者の学びを検討するためには、従来の質的研究法をそのまま適用するのではなく、質的研究法の枠組みを柔軟に更新していくこと、すなわち「学びほぐす (Unlearning)」ことが必要となる。本シンポジウムでは、3 名の研究者が障害児・者の学びを捉えることを試みた質的研究法の可能性と限界について報告する。そのうえで、どのように質的研究法を学びほぐしていくのかを議論したい。

話題提供１：軽度知的障害のある学生の学びをナラティブで捉える（生田邦紘）

軽度知的障害のある学生の「学びほぐし (Unlearning)」について報告する。福祉事業型「専攻科」の学生は、入学当初「普通」に強くこだわっていたが、次第に「普通」の意味が変容し、2 年間をかけて「普通」へのこだわりが低減した。この長期的な「学びほぐし」の過程を検討するため、学生 1 名と先生（職員）3 名に 1 対 1 の半構造化面接を行った。分析は、ナラティブ論を用いて、学生と先生の語りを重ね合わせて分析した。学生が上手く言葉にできなかったエピソードについて、先生の語りを重ねることで、学生の学びを一つの物語として分析できた。その反面、物語が複雑になりすぎないよう、いくつかの点を捨象したことが課題となった。この課題を踏まえて、学びのプロセスの複雑さを捉える方法論の一つとして、仮定法で語られる可能世界の物語に着目し、その可能性について議論したい。

話題提供２：特別支援学校の授業はいかなる主体によって進められるのか？（呉文慧）

特別支援学校の教師が ASD のある生徒との社会的相互作用をどのように成立させているのかを検討した。まず特別支援学校高等部に 5 回のフィールドワークを行い、2 人の教師と ASD のある生徒の社会的相

互作用場面を撮影した。そして円滑な社会的相互作用が妨げられる「不調」場面を抽出し、10 分のビデオクリップを作成した。最後に対象教師と映像を見ながら対話的にインタビューを行った。インタビューデータはベナーの解釈学的現象学を用いて分析した。結果として、教師は、教師や生徒、そして「物」というさまざまな主体の意図や特性を満たす「枠」を生成することで学生との社会的相互作用を円滑に行っていることが明らかになった。本発表を通じて、「物」の主体性がより程度の重い ASD のある生徒の学びや教育を捉える新たな視座をもたらす可能性を議論したい。

話題提供３：自身の研究法を振り返る（楠見友輔）

筆者のこれまでの研究で用いた方法を省察的に分析する。対象とする研究は、楠見・髙津・佐藤（2021）「知的障害生徒が教室談話に参加する過程」『発達心理学研究』（授業のビデオ記録と反-個人主義に立つ教室談話分析）、楠見（2022）「健常児との交流の語りで生起する軽度知的障害児のアイデンティティ」『質的心理学研究』（活動のビデオ記録、再生刺激法インタビュー、記述的現象学的アプローチ）、Kusumi（2022）「Actualizing concept without language」『International Journal of Qualitative Studies in Education』（教師へのインタビューの物のエージェンシーに注目した回折的分析）である。筆者が、どのような問題関心から方法を選択したか、研究の結果から、それぞれの方法にどのような課題を見出したのかを説明する。

Unlearning Qualitative Research:

From the perspective of the education of children and persons with disabilities

Kunihiro Ikuta (Kobe University), Organizer, Moderator and Presenting Author

Bunkei Kure (Kobe University), Organizer, Presenting Author

Yusuke Kusumi (Shinshu University), Presenting Author

Sosuke Yokoyama (Tokyo City University), Discussant

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 10　　11 月 4 日（土）16：00-18:00　AS257

質的研究、またはインタビューが研究協力者に与える、正／負の影響

企画／司会：　伊東美智子（神戸常盤大学　保健科学部）
話題提供　：　宮下　太陽（株式会社日本総合研究所未来社会価値研究所）
話題提供　：　渡邉　卓也（京都大学医学部附属病院　倫理支援部）
話題提供　：　市川　章子（一橋大学大学院　言語社会研究科）
指定討論　：　八ツ塚一郎（熊本大学大学院　教育学研究科）

企画趣旨

本シンポジュムは、以下のようなエピソードに端を発する。それは、私がある方に対して、転機に関するインタビュー協力を申し出たところ「実はまだ話したくないことがあって、仮に引き受けたとしても肝心なところは隠すと思います。といって、(私には)話さなくても、隠していることへの苦しさも胸に抱えると思います。そうやって作り上げた研究に、どこまで意味があるのかという疑問も生じます」との回答を得た。私はこれまで、質的研究、インタビューにおいて協力者に語っていただくことで産まれる力を何度も実感してきた。その延長線でこの度も依頼したが、相手への申し訳なさと自己嫌悪に苛まれた。

以上より、インタビューを巡る研究者と協力者の関係、インタビュー自体が協力者に及ぼす様々な影響について、私は今一度再考したいと考えた。当日は、この問題意識も踏まえて多様な立場や経験からの話題が提供される。指定討論者には I.Parker 著「ラディカル質的心理学－アクションリサーチ入門」を翻訳され、「物語りと共約幻想」を執筆されている　　八ツ塚一郎先生をお迎えする。フロアーの皆様とも意見交換をしつつ、議論を深めたい。

話題提供１：キャリアの転機に影響を及ぼす可能性（宮下太陽）

報告者は、実践者として、人と組織に関わる人材開発コンサルティングを行うとともに、研究者としては、複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いキャリアの転機に焦点を当てた研究を行っている。TEA では 3 回インタビューを行う中で、TEM 図を介して語り手と聴き手の視点の融合（トランスビュー）が行われることを重視している。結果としてトランスビュー的飽和が実現された TEM 図を見た研究協力者にとても喜ばれたり、研究協力者がすとんと腹落ちして得心しているのを見て、よかったと思った経験がある研究者も少なからずいるのではないだろうか。一方で、報告者がそうであったように、3 回のインタビューを通じて、研究協力者の中に生まれた新たな意味づけが、今後の研究協力者の人生に影響を及ぼしてしまうのではないかと躊躇した経験もあるのではないだろうか。本報告では、実際に行った TEA を用いた縦断的研究を事例に、報告者が抱いた葛藤を題材として質的研究／インタビューが協力者に与える

正／負の影響について考えたい。

話題提供２：倫理審査における質的研究の困難（渡邉卓也）

質的研究の倫理審査は、研究者の側からみれば審査の受審に一筋縄ではいかない難しさを感じることが多々あるであろう。しかしその一方で、実際には倫理委員会の側も同じように、質的研究（のような医学系研究の倫理審査の型に収まらない形式の研究）の取扱いに苦慮しているというケースもある。報告者はこれまで、いくつかの倫理委員会の委員／事務局の構成員として、医学系研究と非医学系研究の倫理審査に関与してきているが、とりわけ質的研究の倫理審査には、その研究手法の特質による審査の難しさ（倫理的妥当性の判断の難しさ）が伴うと考える。そこで本報告では、現行の倫理審査の仕組みに照らしながら、特に取扱いに難渋することが多い質的研究の特質について審査の視点等を踏まえながら述べる。

話題提供３：質的研究が人に与える影響：研究者・研究協力者の視点からの一考察（市川章子）

報告者は、修士論文と博士論文でインタビューと複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いて研究を進めてきた。事前に質的研究の本を読み、大学院の授業に出て準備を万全にして臨んだつもりでも、いざとなるとインタビューに失敗することがあった。例えば、研究者がうまくいったと思うインタビューでも、研究協力者にとっては後味の悪いインタビューになることもあった。逆に研究協力者になった場合は、研究者を信頼して話し過ぎてしまい、後から自己嫌悪に陥ったり、聞き手の負担を考えながら話してしまう自分自身もあった。

質的研究では、研究協力者に対して研究者の視点を一方的に押し付けてしまうようなやり取りをしてしまう場合もあると考える。本発表では、質的研究が研究協力者に与える影響について、研究者としての経験、研究協力者としての経験の両面から考えたい。

また、質的研究は研究活動だけでなく、人が社会で生きていくなかで現象や経験を丁寧に見ていくスキルの獲得に役立つとも考える。研究者をめざさない大学生や大学院生に対する質的研究の教育の在り方についても考えたい。

会員企画シンポジウム 11　　11 月 4 日（土）16：00-18:00　AC231

身体を用いた社会的行為の組み立てられ方の考察

－介護・超音波検査・掻破行為と身体－

企画・司会：飯田奈美子（立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員）
話題提供：松浦智恵美（立命館大学大学院先端総合学術研究科）
話題提供：大和田裕美（静岡県立大学看護学部助教）
話題提供：加戸友佳子（摂南大学現代社会学部特任助教）
指定討論：樫田美雄（摂南大学現代社会学部教授）
岡田光弘（成城大学非常勤講師）

企画趣旨

本シンポジウムは、実際のビデオデータに基づいて、3 人の話題提供者から「身体に関わる相互行為現象」について報告して頂き、私たちの身体がある活動を達成するためにどのような働きをしているかということを考えていく企画である。

相互行為の参与者は、互いの身体を注意深く観察し、自らの振る舞いを調整し，相互行為としての連鎖を組織化している。そのため身体は、何らかの情報を他者に表現する視覚的媒体として機能する。しかし、その過程は意識されていないがために、身体の相互行為への貢献に気づけていないのである。そこで、本シンポジウムでは、いかに身体を用いることに志向した行為が、理解可能な行為として組み立てられるかについて、様々な身体行為を取り上げることにより議論していく。

例えば、話題提供１では、家族介護者と訪問看護師が協同して身体介助を行う際の、協同がどのように達成されているかを明らかにする。これは、必ずしも毎回同じ訪問看護師がやってくるとは限らない状況下で、看護師と介護者はお互いの身体を用い、観察することで、その場で達成すべき目標を確認しあい、それを志向して行為を行うことができているのである。

また、話題提供２では、妊婦健診で超音波診断装置を用いて胎児の状態を確認していく場面を扱い、助産師が妊婦にモニター画面に映し出された画像の見方を示しているように見える相互行為が、実は身体を用いながら、互いが見ているものをどのように理解すべきかをともに作り上げていくものであることを示す。

さらに、話題提供３では、アトピー性皮膚炎の当事者が、皮膚を傷つける「掻き」が、どのようなときに、どのような形で行われているかをみることにより、「掻き」が、単に痒みに対処するだけではなく、いかにして社会的に忌避される行為をその場の状況に埋め込まれた形で提示し、社会的に理解可能な行為として成り立たせていくかを見ていく。

話題提供１：在宅療養場面における介護者と看護師の協働達成（松浦智恵美）

ALS 患者の在宅療養場面において、訪問看護によって行われる医療的ケアの達成に向けて協同作業とい

う相互行為を織りなしている。その中で、介護者は立ち位置で待機している、すなわちスタンバイしていることを表現し、看護師は発話だけではなくジェスチャーによる表現も加えて離れた位置にいる介護者に持ってきてもらいたい物を伝えている。身体を用いた「認識用指示表現」とみられる行為を巧みに発話と併用することによって時間が限られた中で２者間が目標達成している場面を分析していきたい。

話題提供２：超音波検査で胎児の状態を見ること（大和田裕美）

助産師外来での妊婦健診で、超音波診断装置のモニター画面に映し出された胎児の状態を助産師が妊婦に告げ、笑い合う。それは、一見すると助産師が妊婦に画像の見え方を教え、妊婦がそれを受け止める相互行為に見える。しかし、胎児の状態に言及するのは、助産師だけではない。妊婦は助産師が告げた胎児の見え方に応答するだけでなく、自らが知覚した胎児の状態に言及することで、モニター画面に映る胎児をどのように見るべきかを助産師とともに作り上げていた。それは、妊婦がその内部に胎児を宿す身体であるからこそ可能であったといえる。超音波診断装置によって胎児の状態を見るという相互行為に、身体がいかに関わっているのかについて検討したい。

話題提供３：相互行為において「掻き」はどのように位置付けられるか（加戸友佳子）

アトピー性皮膚炎等にみられる「掻き」には様々な様相・程度があるが、これまではその詳細が検討されることが殆どなく、あったとしても、医学的な「原因→結果」図式によるものであった。「掻き」がかゆみへの対処であっても、無意識の癖であっても、他者といる時にそれを表出させる方法やタイミングについては、選択の余地を含んでいる。今回は相互行為における「掻き」の表出の様相と、いかなるカテゴリーが「掻き」を説明しうるかについて考えたい。

A study on the composition of social actions using the body

－Nursing Care/Echo Examination/Scratching Acts and the Body－

Namiko IIDA (Ritsumeikan University), Moderator

Chiemi　MATSUURA （Ritsumeikan University), Presenting Author

Hiromi OWADA (University of Shizuoka), Presenting Author

Yukako KADO (Setsunan University), Presenting Author

Yoshio KASHIDA (Setsunan University), Discussant

Mitsuhiro OKADA（Seijo University）,Discussant

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 12　　11 月 4 日（土）16：00-18:00　AC232

子育てという活動に再び挑む

ー社会文化的視点からー

企画・話題提供：　土倉 英志（法政大学社会学部）
話題提供：　太田 礼穂（青山学院大学社会情報学部）
話題提供：　渡辺 涼子（常葉大学健康プロデュース学部）

企画趣旨

本企画では、子どもをもつことや子育てをするといういとなみに社会文化的な視点から迫りたい。社会文化的な理論（たとえば、状況論、状況的学習論、社会文化的アプローチ、活動理論など）は、認知や学習・発達といった現象を個人に閉じたものととらえるのではなく、それがいかに周囲の他者や資源、制度とのかかわりのもと成し遂げられているかに注目する。こうした視点をとれば、子育てといういとなみにも別の側面をみてとることができるだろう。子どもをもつといろいろなことが変わる。仕事との向きあい方や家事のやり方、大切にしていた趣味とのかかわり方も変わったりする。つまり、子どもが生まれ、子育てをするということは、自分が、あるいは、自分たちがそれまで馴染んだ生き方とは異なる生き方をすることでもある。こうした変化のうち、あるものは急激にあるものは緩やかに起こる。子どもをもつことや子育てにともなう変化を、自身も当事者のひとりである研究者の経験や視点を活かして考えることはできないだろうか。

子育ての具体的なあり方は、それが展開される場、利用可能な資源、かかわる人の関係性に強く依存する。本企画では、社会文化的な視点から子育てという経験・活動に迫ることで、子育てといういとなみについて、新しい見えを獲得することを目指す。これは同時に、子育てという題材に社会文化的な視点を大胆に適用してみることで、その視点の意義を再確認する試みでもある。

先に子育てについて記したことは、子育てにかぎられるものではないだろう。たとえば介護にも類似性をみることができる。ケアのいとなみに広く関心をもつ方にもぜひ参加していただきたい。話題提供をきっかけにみなさんの経験も聞かせていただけるとうれしい。（本シンポジウムは、日本認知科学会 教育環境のデザイン分科会が企画する。）

話題提供１：親に成る過程と説明活動の関係ー私的経験を振り返りながらの検討ー（太田礼穂）

筆者は保育園や小学校をフィールドに子どもの共同学習研究に従事してきたが、子どもが生まれるまで、子育てをどこか遠いものだと感じていた。子どもが生まれた今、親に成る過程も含めた子ども観が形成されている。ホルツマンはマルクスに依拠しながら、社会が人を形づくると同時に、人もまた「活動する者」として自分自身と環境を転換させると論じている。この議論に則れば、親に成ることは劇的な変化に影響を受けながら、新しい環境を他者と生成していく営みだと理解できる。本発表ではこの生成過程

における「説明」活動に焦点を当てる。妊娠期から現在まで、身体や生活の変化、子どもに対する理解など多くの説明場面を経験し、またその説明し難さを経験している。保育園の連絡帳や私的経験を回顧的に振り返ることで、子どもや生活に対する意味づけを能動的に探索するプロセスを検討する。

話題提供２：育児における対話的な三項関係の形成と養育者の学び（渡辺涼子）

子どもとの生活を通して、養育者は様々なコミュニティや活動へ参入する。社会文化的視点では、活動の参加は他者や人工物の媒介により達成されるが、その過程は必ずしも容易ではない。たとえば離乳食の導入では、養育者は離乳食について予め学び実践すると同時に、「子どもは今どのように味わっているか？」「子どもにとって美味しい食事とは何か？」等と問いながら、子どもの視点や体験に基づいて適切な離乳食を提供できるよう働きかける。離乳食を子どもがよく食べた場合は、「子どもの好きな食材だったからか」と考え、食が進まなかった場合は「おいしくないのは食材あるいは調理法が不適切だったか」と問い直す。すなわち活動の参入では、養育者が対象となる活動について知見を深めると同時に、子どもの思いや声を問いとして聴き、更に実践を通して新しい問いを発見し探求する、「子ども―対象（の活動）―私」という対話的な三項関係（Miyazaki, 2019）による学びが想定されるのではないだろうか。本企画では、発表者の育児と療育施設の相談支援の事例から、対話的な三項関係を通した学びについて検討を試みる。

話題提供３：乳幼児の育児における秩序をめぐる攻防―利用する道具の変化の視点から（土倉英志）

乳幼児の発達にともない世話の仕方はすこしずつ変わっていく。たとえば食事。それにともなって世話にもちいられる道具も変わっていく。たとえば食器。ところが道具が変わる理由が、おもに養育者側の都合の場合もあるようだ。たとえば食事用エプロン。道具をみれば、どんなことが「課題」となっているのかがわかる。乳幼児の発達を支え、うながすことを志向する子育てのいとなみは、時に／往々にして、養育者が守りたい家庭の秩序とのあいだで摩擦を起こす。子育て／子育ちは秩序を共にしない他者同士による秩序をめぐる攻防でもある。ただし秩序をめぐる自由と制約は反するものとも言えない。「過秩序」と「可秩序」をキーに、秩序をめぐる攻防における自由をうみだすための制約について考えてみたい。

Approaching the experience and activity of childcare:

From a socio-cultural perspective

Eiji, Tsuchikura (Hosei University), Moderator & Presenting Author

Ayaho, Ota (Aoyama Gakuin University), Presenting Author

Ryoko, Watanabe (Tokoha University), Presenting Author

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 13　　11 月 5 日（日）9：30-11:30　C373

孤立からつながりへ

ーエージェンシーをめぐる対話ー

企画・話題提供：青山征彦　（成城大学社会イノベーション学部）
企画・話題提供：保坂裕子　（兵庫県立大学環境人間学部）
話　題　提　供：浜田寿美男（奈良女子大学名誉教授）
企画・指定討論：木下寛子　（九州大学大学院人間環境学研究院）

企画趣旨

近年、エージェンシー（行為主体性）をめぐる議論が活発になっている。本シンポジウムでは、ラトゥールらによるアクターネットワーク理論とエンゲストロムらによる活動理論に現れるエージェンシーをめぐる議論を踏まえ、心理学において個人をどのように捉えたらよいかを議論したい。エージェンシーをめぐる問題は、社会生活の様々な局面で際立ってくる。例えば、貧困家庭はけっして好き好んで貧困に陥ったわけではないが、貧困状態にあることはおうおうにして自己に帰属され、その責任を求められることになる（保坂話題提供）。また浜田による虚偽自白に関する一連の研究は、取調室においてひとりの人が自白に落ち、「自白した（自ら犯行を認めた）主体」として社会的に作りあげられていく「渦中」に注目し、鋭い分析で明らかにした。そこで本シンポジウムでは、保坂、浜田の話題提供を導きの糸として、個人を孤立した存在としてではなく、つながりのなかにある存在として捉えることの意義を、けっして理論的な問題に留めることなく、社会的実践と社会変革という現実的な課題にかかわるものとして議論していきたい。

話題提供１：個人を超えるためにアクターネットワーク理論が考えたこととその問題点（青山征彦）

個人と社会という二分法は、心理学ではなじみのある見方だ。しかし、このように個人や社会というカテゴリーを所与のものとして措定してしまうことに異議を申し立て、個人や社会がどのように「実践」されているかを問うたのが、ラトゥールをはじめとするアクターネットワーク理論の仕事であった。さらに彼らは人間も非人間も同じ土俵にのせることで、人間だけにエージェンシーがあるという見方をとらない方法を主張してきた。こうした議論の意義は決して小さくないが、質的心理学の観点からは議論が不十分と思われる点も少なくない。本発表では、いまにわかにブームとなっているアクターネットワーク理論について、その可能性と限界を論じることを通して、来るべき心理学におけるエージェンシーの扱いについて考えたい。

話題提供２：子どもの貧困問題において顕在化する変革エージェンシーについて考える——文化—歴史的活動理論の観点から（保坂裕子）

貧困が必ずしも自己責任によるものではない、という議論がある一方で、子どもの貧困の課題となる

と、親の責任とされることが多い。子どものことは親の責任、食べさせられないのも親の責任であり、子どもはその被害者ではある、と考えるのはわかりやすいのかもしれない。しかし、こういった社会的課題は、それを個人に還元したところで解決されるわけではない。それは結局のところ、個人か社会かの二元論に陥るしかないからだ。本話題提供では、心理学における主客二元論を超えようとする試みを具体的実践の中で検討してみたい。登壇者がフィールドワークを続けている困窮支援の現場において、「困りごと」がいかにつくられているのかに着目して実践から学ぶことで、個と社会を分断することでは見えてこない課題について議論できるのではないだろうか。それは、実践現場に根差し、そこに関わる人々が生きている文脈をとらえ、そのなかからいかにエージェンシーがはく奪され、またあらたな活動を生み出す変革のためのエージェンシーがうみ出されるのかについての考察となるだろう。

話題提供３：主体であることを奪われるとき（浜田寿美男）

人はみな「脈絡」のなかを生きる。この脈絡を言い直せば「関係の網の目」である。その関係のなかには「人との関係」「自然との関係」があって、人はこの世に生まれ出たところから、さまざまな「関係の網の目」を拡げ、その「関係の網の目」に支えられるかたちで生きている。しかし、その自分が周囲に張り巡らせた「関係の網の目」から、あるとき突然引き抜かれて、まったく別の脈絡、別の関係の網の目に投げ込まれたとき、それまでの「自分」を支えられなくなって、やがて崩れていく。私は刑事裁判の仕事のなかで、そうした場面にしばしば出くわしてきた。自分がやってはいない犯罪事件の被疑者として逮捕され、取調べの場で見ず知らずの取調官たちに取り囲まれて、「自分の過去」を語ることを求められる。しかし、口にした言葉の一つ一つが取調官たちから拒まれ、歪められて、やがて「虚偽の自白」を語り、その「虚偽を演じる」かたちでようやく新たな「関係の網の目」のなかで自分を維持することができる。こうした虚偽自白を例に「人が自分の主体を保って生きる」ことの意味を考えてみたい。

From Solitude to Connected

Discussion on the Agency

Masahiko AOYAMA (Seijo University), Moderator and Presenting Author

Yuko HOSAKA (University of Hyogo), Presenting Author

Sumio HAMADA (Nara Women's University), Presenting Author

Hiroko KINOSHITA (Kyushu University), Discussant

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 14　　11 月 5 日（日）9：30-11:30　AC338

歌、コラージュ、ジャーナリングを媒介とした主体回復への ナラティヴ・アプローチの検討

企　　画：　松本佳久子（武庫川女子大学音楽学部）
司　　会：　谷本拓郎　（京都光華女子大学健康科学部）
話題提供：　松本佳久子（武庫川女子大学音楽学部）
話題提供：　宮本悠起子（名古屋少年鑑別所）
話題提供：　鍋島宏之　（奈良少年鑑別所）
話題提供：　谷本拓郎　（京都光華女子大学健康科学部）

企画趣旨

ナラティブ・インクワイアリー(Breten 2020)は、「一人称で」経験されたことの語りを重視し、「生きられた現実(Varela & Shear 1999)」の経験を理解しようとする点に特徴がある。「一人称」の事象とは、認知的・精神的な事象に関連した生活体験を指し、研究対象のプロセス（見るもの、痛み、記憶、想像など）が「自己(self)」または「主体(subject)」に関連し、顕在化することを意味する(Breten 2020)。そして、これまでの人生の出来事をいくつかのカテゴリーにおいて継時的に並べて記述し、語るというそれぞれの行為の段階を経て、ライフストーリーを次第に精緻化していく。ナラティヴ・アプローチにおいて、これら微視的現象学的手法とその過程を活かすことは、非常に重要であると考える。

しかしながら、加害者（非行）臨床の場で出会う非行少年や受刑者の中には、「一人称で」語ることが難しい者も多く含まれる。彼らは人格形成の途上にあるだけでなく、生育環境において不安定な家庭環境にあるなど原始的かつ基本的な信頼関係を築くことが難しい状況に置かれてきた中で、自我及びアイデンティティの形成が難しく、このことが、「一人称」で語ることの難しさにつながっているのではないかと考える。他方、矯正施設内の処遇困難受刑者においては、長期にわたる在所中に精神的・身体的機能が次第に低下し、形式的な応答に終始するなどいわば”モノトーン”な語りとなり、主体的な語りが難しくなる者なども含まれる。

そこで、本シンポジウムでは、ナラティヴ・アプローチにおいて、主体の回復につながる語りの新たな意味生成を目指し、音楽、コラージュ、ジャーナリングなど多様な媒介を導入したナラティヴ・アプローチの実践とそれに関わる調査について紹介し、検討する。

加害者臨床の場から、宮本氏は、処遇困難者へのアート体験導入当初に観察された変化とその意味について、また鍋島氏は、薬物事犯者へのコラージュと音楽それぞれを媒介とした語りや表現の経過と、その特徴について報告する。企画者からは非行少年の音楽を媒介とした大切な音楽の語りにおける記憶の想起と時間的展望における語りの変化を検討する。また谷本氏は青年期前期の大学生を対象にしたジャーナリングの調査研究を報告する。これら語りや記述における意味生成と変容のプロセスから、語った内

容のみならず、いかに語る（表現する）かに着目し、主体の回復のためのナラティヴ・アプローチを促進する媒介とその意味について味わい、検討する。

文献

・Breton, H. (2020). L'enquête narrative, entre détails et durée. Education Permanente, 1, 222, 173-180

・Varela, F. J. and Shear, J. (1999). First-personn methodologies: Why, What & How? The View from Within: First Person Approaches to the Study of Consciousness, Journal of Consciousness Studies, 6(2-3), 1-14.

Narrative approach to the recovery of the self use songs, collages and journals as catalysts

Kakuko Matsumoto (Fuculty of Music,Mukogawa Women's University),

Presenting Author, Organizer

Yukiko Miyamoto (Nagoya Juvenile Classification Home), Presenting Author

Hiroyuki Nabeshima (Nara Juvenile Classification Home), Presenting Author

Takuro Tanimoto (Faculty of Health Science, Kyoto Koka Women's University), Presenting Author, Moderator

会員企画シンポジウム 15　　11 月 5 日（日）9：30-11:30　AC348

動いている世界とともにどのように研究するか

ードゥルーズの生成変化の哲学をもとにー

企　　画：　楠見友輔（信州大学教育学部）
司　　会：　楠見友輔（信州大学教育学部）
話題提供：　楠見友輔（信州大学教育学部）
話題提供：　辰己一輝（大阪大学人間科学研究科）
話題提供：　得能想平（奈良先端科学技術大学院大学デジタルグリーンイノベーションセンター）
指定討論：　石黒広昭（立教大学文学部）

企画趣旨

多くの質的研究では、データのコーディングやカテゴリー化を通して、概念や理論を生成するという方法が用いられてきた。このような方法の背景には、人間が表象によって世界を写し取ることができるという信念がある。（ポスト）実証主義であれば、表象は構造や法則のある世界をより良く説明する前提となっている。社会構成主義であれば、表象は世界を解釈する人間の認識を図やストーリーとして示す際に用いられている。しかし、両パラダイムでは、研究者の主観と研究対象が区別されており、その客観性が表象を支えている。これに対して、人新世という問題系や、科学哲学における近年の存在-認識論的転回は、客観的な観察という科学の原理の限界を科学者に突き付けた。本シンポジウムでは、表象の限界を考慮し、世界の一部である研究者がどのようにして、対象化し得ない世界から新しい方法で知識を創造できるかについて、主にポスト構築主義の理論を参照しながら議論する。

話題提供１：表象の危機からポスト質的研究へ（楠見友輔）

2010 年以降、質的研究の方法や文体をラディカルに転換する、質的研究のポストを模索する動きがみられる。この動きは、何か特定の方法論や方法を持つものではなく、質的研究を体系化しようとする動きへの抵抗である。本話題提供では、ポスト質的研究を支えるポストヒューマニズム、ニューマテリアリズム、ドゥルーズの哲学の理論をもとに、質的研究を常に差異化する運動へと変えるというポスト質的研究のアイディアを紹介する。また、1980 年代の表象の危機から現在のラディカルな転換までの、質的研究の動向を整理する。

話題提供２：障害学はいかにして「方法」を練り上げてきたか（辰己一輝）

これまで障害学は、自らが採用する「方法」それ自体が、特定の身体的経験を排除するものとなっていないか、そして、そのような排除を再生産する健常者中心主義的な権力諸関係を追認するものとなっていないかに絶えず注意を払ってきた。本話題提供では、こうした「方法」をめぐる政治的要請に応える仕方で近年現れてきた、ドゥルーズ＝ガタリの哲学や「新しい唯物論」などを取り入れた障害学の新たな理

論的諸動向を紹介しつつ、それらに共通する方法上の諸特徴について解説を加える。

話題提供３：社会科学で機能するドゥルーズ哲学の理論構成（得能想平）

本話題提供では、なぜドゥルーズ哲学は表象を逃れ、動いているものの世界を明らかにできるのかという問いを考える。たとえどのような枠組みを用いても、現象を言語によって記述するという点に関しては、社会科学の必然的制約である。そのため、「写し取る」とは異なる仕方で機能するドゥルーズ哲学の姿をより具体化する必要がある。本話題提供は、ドゥルーズを社会科学に応用した L,M. Olsson の Movement and Experimentation in Young Children’s Learning(2009)を参照し、このことを考える。

指定討論：この「ポスト」理論は誰が、なぜ必要とするのか？（石黒広昭）

社会科学研究は通常「説明」を求める。解釈学的アプローチをとることで自立的な存在になった質的研究であるが、解釈者である研究者の特権性や、その特権化された表象とそれを支える物質・言説が批判されるようになって既に久しい。表象を生み出す「位置づけ主義」に対し、ここで提起される「ポスト」理論は研究や研究者の在り方の捉え直しを必然とするパラダイム変換ではないのか。両者の関係と実践への批判性、変革力を問いたい。

Doing research in Motion

From Deleuze's Philosophy of Becoming

Yusuke Kusumi (Faculty of Education, Shinshu University), Moderator

Yusuke Kusumi (Faculty of Education, Shinshu University), Presenting Author

Ikki Tatsumi (Graduate School of Human Sciences, Osaka University), Presenting Author

Sohei Tokuno (Center for Digital Green-innovation, Nara Institute of Science and Technology), Presenting Author

Hiroaki Ishiguro (Graduate School of Arts, Rikkyo University), Discussant

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 16　　11 月 5 日（日）13：00-15:00　AC338

ヤーン・ヴァルシナーの記号論的文化心理学と質的研究法

－未来へ向けた可能性を考える－

企画・指定討論：　サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）
企画・司会：　滑田明暢（静岡大学大学教育センター）
話題提供：　宮下太陽（株式会社日本総合研究所／
株式会社ユーケット）
話題提供：　上川多恵子（立命館大学大学院人間科学研究科）
話題提供：　土元哲平（中京大学心理学部）
指定討論：　木戸彩恵（関西大学文学部）
指定討論：　小松孝至（大阪教育大学総合教育系）

企画趣旨

本企画は，ヤーン・ヴァルシナー（Jaan Valsiner）の記号論的文化心理学と質的研究法との関わりをあらためて議論する試みである。記号論的文化心理学は，人間が記号を介して社会環境を意味づけ，生活をしていくあり様を読み解く理論であり，それらを理解するための方法でもある。個々にユニークなものとしての人間の意味づけ過程に注目をしていることから，記号論的心理学の考え方は，必然的に現象の質的な側面を捉えることと密接に関わっている。本企画では，記号論的文化心理学の理論と質的研究法との関わりをあらためて検討し，その未来へ向けた可能性について議論したい。

なお本企画は，『An Invitation to Cultural Psychology(文化心理学への招待)』(Valsiner, 2014, SAGE 社)の訳書の刊行記念シンポジウムでもある。本企画の話題提供者や企画者は翻訳・監訳に関わったメンバーでもあり，訳書をつくりあげるなかで得られた成果を議論する場としても位置付けたい。

話題提供１：記号圏と TEM の理論的展開
ー　記号との相互調整過程における経験づけ（宮下太陽）

記号圏は，ロシアの文学・文化研究者であるユーリー・ロトマンにより提唱され，ヤーン・ヴァルシナーによって文化心理学に取り入れられた概念である。記号圏とは記号が記号として働く前提条件であり，ある記号圏において，記号が記号として完全な効果を発揮し人に影響を与えている状況が，TEM における必須通過点である。逆に記号圏において記号が記号として機能せず，人の行動にゆらぎが生じるポイントが分岐点になるといえる。本話題提供では，記号圏と TEM の関係に焦点をあて，既存の記号圏の中でのゆらぎや，異なる記号圏との衝突などの経験を，人がどのように経験づけうるのかについて，ヴァルシナーの内化／外化の層モデルを基点に検討を行う。

話題提供２：個人に属する文化を読み解く
――コトとしての食を通じて（上川多恵子）

本研究ではヴァルシナーの「相互依存的な構築プロセスとしての内化と外化」を TEA に援用し，ゼミ仲間とのランチミーティングという自明的な場面で「たまごサンドを食べる」に至ったプロセスについて分析した。本事例では「その場にふさわしいものを選びたい」という個人の価値観を中心とした食物選択が行われており，大きく分けて個人的な嗜好を伴う促進的記号とマナーや他者との関わりを意識する促進的記号が捉えられた。このような促進的記号は個人に属する文化に関わるものであると考えられる。本発表では自明的な場面で見え隠れしている個人に属する文化について考えていきたい。

話題提供３：更一般化された記号領域を描き，理解する：
オートエスノグラフィーの視座から（土元哲平）

ヴァルシナーは，物理学者ニールス・ボーアに由来する相補性の概念や，ヴィゴーツキーが探究してきた美的総合の概念などに通底する「緊張関係からの飛躍」ともいうべき経験を未来志向的な記号発生過程として再解釈し，更一般化された記号領域という革新的な概念を提案した。本発表では，近年，社会科学において注目されているオートエスノグラフィー（研究者自身や，研究者を取り巻く人びとに対するエスノグラフィー）の議論をもとに，更一般化された記号領域を描いたり，理解するという行為はどのようにして可能になるのかについて議論したい。

Qualitative methods and Jaan Valsiner's semiotic dynamic cultural psychology:

Discussions towards the future possibilities

Sato, Tatsuya (Ritsumeikan University), Discussant
Nameda, Akinobu (Shizuoka University), Moderator
Miyashita, Taiyo (The Japan Research Institute, Limited. / U-ket, Limited.), Presenting Author
Kamikawa, Taeko (Ritsumeikan University), Presenting Author
Tsuchimoto, Teppei (Chukyo University), Presenting Author
Kido, Ayae (Kansai University), Discussant
Komatsu, Koji (Osaka Kyoiku University), Discussant

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 17　　11 月 5 日（日）13：00-15:00　AC348

詩的リアリティとビジュアル・ナラティヴ

企　　画：　横山草介・家島明彦・やまだようこ
司　　会：　横山草介（東京都市大学 人間科学部）
　　家島明彦（大阪大学）
話題提供：　やまだようこ（立命館大学 OIC 総合研究機構）
話題提供：　ふくだぺろ（立命館大学 先端総合学術研究科）
指定討論：　南博文（筑紫女学園大学）
指定討論：　高田明（京都大学）

企画趣旨

学問においても芸術においても、新しい発想や表現を生み出すときは、通常のことばによって記述される概念や定型的な見方から脱出する必要がある。そのとき、自由にイメージを遊ばせ飛躍させ、新しい意味のむすびつきをつくる上で、ビジュアル・イメージは重要な働きをする。私たちは、そのような観点から、ビジュアル・ナラティヴのシンポを長年にわたって企画してきた。

今回は、ビジュアル・ナラティヴと詩の共通の基盤としての「ポエティック・リアリティ（詩的現実）」という新しい概念を提出してみたい。ビジュアル・ナラティヴは、詩作のプロセス、生き生きした新たなイメージや新鮮なことばのむすびつきが生成されるプロセスと似ている。また、ビジュアルも詩も、ことばにならない「イメージ」や「メタファー」が重要な役割をもつ。そして、ビジュアルも詩も、わずかな形や色彩やことばによって、相手の身体感覚や感性に生き生きと伝わり、相手を深く揺り動かす大きな力をもつ。

では、ビジュアル・ナラティヴと詩に共通すると考えられる「詩的リアリティ」とは何だろうか、なぜ心理学において、「詩的リアリティ」を問う必要があるのだろうか？ 今回はその基本的なものの見方を提示するところから考えていきたい。

話題提供１：なぜポエティック・リアリティか？　（やまだ ようこ）

「歴史は現実にあったことを記述するだけだが、詩は有りうるであろう可能性を記述する」（アリストテレス）。詩は、できあがった作品よりも、ことばにならないイメージをことばにする詩作の生成プロセスが重要であり、それによって新しい現実を生み出す。

リアリティには、次の３次元があると考えられる。①イマージナル・リアリティ（想像現実）。仮想現実（ヴァーチャル・リアリティ）を含む。②アクチュアル・リアリティ（実働現実）。行為や体験の現在進行プロセス。③ファクチュアル・リアリティ（事実現実）出来事の跡、出来事のモノ化、言語、概念、知識、ミーニング（言語的意味）。

多くの学問は３現実のうち、アクトとファクトのみを重視してきたのではないか？ ポエティック・リ

アリティの研究は､次のような問題にアプローチする。１）詩的現実の生成。イマジネーションの生成力によって生み出される想像現実。２）文脈を超える「うつし(移し)」と「むすび」、メタファーの生成プロセス。３）センス（感性的意味）と「うたう」身体リズムの共同生成。４）詩の「はなれ」（余白と切れ、距離化と脱文脈化)。

詩とビジュアルに共通する詩的リアリティの生成は、言語による知的概念化、情報伝達、対話とは異なる特徴をもつと考えられる。

話題提供２：カンバセイション・ポエティック　（ふくだ ぺろ）

概念や因果律と並んで「詩的イメージ」(バシュラール）と関わることで、ヒトは他者と交差し「現実」を制作してきた。それは会話も例外ではなく、意味や概念が前景化するコミュニケーションもあれば、詩的イメージが前景化するものもある。後者の最も先鋭的な例が贈答歌、連歌、連句といったカンバセイション・ポエティックだろう。

他方、デジタル革命によりメディア状況が多様化した現在、コミュニケーションのあり方も変わった。〈いまここ〉を超越するメディアは文字に限定されず、ビジュアル、なかんずく映像はその最たるものである。

こうした状況下で、私ふくだぺろとファン・カストゥリジョン博士（ペンシルベニア大学）という２人のマルチモーダル人類学者は、ルワンダのトゥワ人と、コロンビアのクベオ人と、という互いのフィールド経験について、映像によるカンバセイション・ポエティックを行った。それが映像往復書簡 *Read Letters and Asynchronous Perspectives*（10 分）である。

映像によるカンバセイション・ポエティックはどのような詩的リアリティを生むのか？それは言葉によるものとはどう違うのか？そもそも映像のポエティック・リアリティと言葉のそれとは根本的に異なるのか？同じなのか？映像と共に考えていきたい。

Poetic Reality and Visual Narrative

Sosuke Yokoyama (Tokyo City University), Moderator

Akihiko Ieshima（Osaka University）, Moderator

Yoko Yamada (Ritsumeikan University), Presenting Author

Pero Fukuda (Ritsumeikan University), Presenting Author

Hirofumi Minami (Chikushi Jogakuen University), Discussant

Akira Takada (Kyoto University), Discussant

会員企画シンポジウム 18　　11 月 5 日（日）15：15-17:15　C373

行動の時間的特徴とその表現技法

ー静止画による動作の表現可能性をめぐってー

企　　画：　阿部 廣二（東京都立大学 人文社会科学部）
話題提供：　細馬 宏通（早稲田大学 文学学術院）
話題提供：　高梨 克也（滋賀県立大学 人間文化学部）
話題提供：　阿部 廣二（東京都立大学 人文社会科学部）

企画趣旨

本シンポジウムでは、動作の認識と表現の問題に焦点を当てる。動作を紙面上に表現しようとする場合、必然的に静止画を用いることになり、時間的特徴が抜け落ちやすい。他方、マンガやアニメなどのさまざまな表現媒体においてはこうした動作の表現は滞りなく達成されている。例えば、キャプテン翼や巨人の星、スラムダンクなどのスポーツ漫画では、ボールや選手たちの躍動を、静止画上において巧みに表現している。また、多くのバトル漫画における戦闘シーンでは、戦いの動作を、その緊迫感を伝える形で表現することに成功している。こうした静止画による動作表現にはどのような工夫が見られるのであろうか。

動作の表現の問題は、質的心理学にも無関係ではない。質的研究において動作を分析対象とする場合、例えば会話分析における Mondada 氏の開発した動作の表記法のように、その時間的特徴やアドレスなどを表記する技法が開発されている（Mondada, 2012）。しかし、この表記法には、描き起こされる情報が増えるほど重要な情報が見えにくくなることや、現場で行われている動作の質感を表現することが難しいといった問題がある。そのため、重要な動作については、その質感を表現するため、映像から画像を切り出してトランスクリプト内に貼り付ける方法がしばしば用いられる。ただし、どのような画像を、どのような形で切り出し、そこにどのような補足的な記号を付加するべきかについては、関連分野内にも明確に定められた基準が存在しているとは言えず、各研究者のその都度の創意工夫に委ねられているというのが現状である。

以上の点を踏まえ、本シンポジウムでは、フィールドでの動作の静止画による表現可能性の問題を，さまざまな表現媒体で用いられている静止画上の動作表現の工夫と関連づける 3 件の話題提供と総合討論を通じて、動作の表現可能性についての議論を深化させていくことを試みる。

話題提供１：マンガにおける発話の時間と絵の時間（細馬宏通）

現代のマンガは、発話を表すフキダシと静止画を組み合わせるメディアである。フキダシはコマに描かれた／描かれない話者の発話を表し、そこに発話の時間が流れていることを表す。フキダシを含むコマに描かれた絵は、一見すると相互行為の瞬間を表した静止図像のように見えるが、じっさいのマンガを検討すると、描かれているのはひとつの瞬間ではなく、異なる時刻に起こった動作や表情をパッチワー

クのように組み合わせたものであることが多い。では読者は、異なる時刻の埋め込まれた絵を、発話を手がかりにどのように読み解いていくのか。複数のフキダシによって複数の発話が表現されるとき、こうした読み解きはどのように変化していくのか。本発表では、簡単な事例を手がかりに、この問題について考える。

話題提供２：他者行動の理解における動作の時間的特徴の重要性（高梨克也）

他者の行動をわれわれはどのように理解しているのであろうか。そこで重要になるポイントの一つが動作のスピードや順序などの時間的構造である。そのため、定量的な行動観察においても、観察対象となるそれぞれの行動のもつ時間的特徴を踏まえた上で適切な観察手法の選択やサンプリング間隔の設定を行う必要がある。同時に、動作は空間内において、また空間的状況を考慮しながら展開するものであるため、時間的特徴は空間的特徴から切り離しえない。さらに、行動や動作の時間的構造にはさまざまなタイムスパンのものが並存しているはずである。本話題提供では、スポーツのプレーや身体的作業を対象として、これらの問題について考えてみたい。具体的には、相互行為のマルチモーダル分析において、分析者が捉えた参与者の志向の時空間的変化を静止画などの媒体によってどのように表現するかという課題について、マンガやアニメに見られる動作の表象方法の工夫とも関連づけながら議論したい。

話題提供３：漫画における「飲むこと」の表現可能性：飲み物を噴き出すことでなにが表現されるのか（阿部廣二）

漫画において、しばしば飲み物を噴き出すといった場面が記述されることがある。周知のように、現実においては、飲み物を噴き出すことは滅多に起きない。それにも関わらず、なぜ漫画において飲み物は吹き出されるのだろうか。こうした場面は、「飲み物（液体）」という物質が持つ特性や、それを飲むことに関する表現と深く結びついているように思われる。そこで本報告では、「飲み物を噴き出すこと」がどのような理解を生むのか、いくつかの漫画から事例を抜粋し、議論を行いたい。また、現実場面における会話しながら飲むことを行う事例と比較することで、現実場面における会話の周辺に配置される物質と、その相互行為上の役割について、漫画の表現を参照しながら議論を行いたい。

文献

Lorenza Mondada, (2012). Garden lessons: embodied action and joint attention in extended sequences. In Interaction and Everyday Life: Phenomenological and Ethnomethodological Essays in Honor of George Psathas (Hisashi Nasu, Frances Chaput Waksler, eds.), Plymouth, Lexington Books, pp. 279-296.

会員企画シンポジウム 19　　11 月 5 日（日）15：15-17:15　AC338

観察と介入の二分法を超えて

－文脈的行動科学と質的心理学の対話－

企　　画：　瀬平劉アントン（九州大学基幹教育院）
司　　会：　同上
話題提供：　同上
話題提供：　瀬平劉キャサリン（九州大学人間環境学府）
話題提供：　本田陽彦（九州大学人間環境学府）
指定討論：　植田嘉好子（川崎医療福祉大学医療福祉学部）

企画趣旨

「その研究は観察なのか、介入なのか？」その問いに戸惑ったことはありませんか。しばしば質的心理学は「観察研究」「経験の記述と解釈」として区分され、他方で行動科学の実践と研究は「介入研究」「行動の予測と影響」として区分されます。しかし質的研究者は、質的研究における記述が行動に影響を与えることを、研究プロセスの直中で感じていることでしょう。また、B.F.スキナーの影響を受けた文脈的行動科学（CBS）の実践（アクセプタンス＆コミットメント・セラピーなど）では、質的研究のような経験に対する詳細な気づきに基づく記述と解釈を要請します。このシンポジウムでは、質的心理学（特にナラティヴ心理学）と CBS、またその二つの立場の科学哲学と認識論（文脈主義における記述主義と機能主義、批判的実在論）を確認し、研究事例も確認しながら両者の対話の可能性を探究します。

話題提供１：機能的かつ記述的なナラティヴ・アプローチ（瀬平劉アントン）

質的心理学者サービン、また彼に影響を与えた G.H.ミードの立場では、質的心理学は文脈主義に根差しています。にもかかわらず、同じく文脈主義に立つ CBS はどうしてサービンと質的心理学を「記述的」文脈主義として批判したのでしょうか。質的研究は本当に言葉の内面的な一貫性に留まり、行動の方向づけに貢献できないでしょうか。認識論、存在論、科学論の葛藤を確認し、最近の質的研究（例、批判的ナラティヴ分析）がどのようにその批判に応答しようと試みているかを検討します。そこで、記述的な研究は機能性（行動の予想と影響）を含み込み、質的研究が行動科学から学ぶ道（逆も然り）も開かれます。その結果、観察と介入の二分法を超克し、質的研究はより実践へスムーズに接近できます。

話題提供２：スキナーに関する誤謬の言説の脱/再構築と質的研究（本田陽彦）

行動主義―質的研究に心を尽くす私たちにとって、時としてこれは拒絶の引き金を引く刺激となるでしょう。しかしこれは、スキナーを誤解した言説空間―彼の見解は表面的で粗雑で機械的なものだ―での経験である可能性があります。今回は、スキナーの言語行動の検討によって、言説の脱/再構築を試みます。客観的に観察可能な事象を扱う方法論的行動主義とは異なり、環境との相互作用として行動を定

義し（文脈主義）、意識などの内的事象も「行動」として研究可能なスキナーの徹底的行動主義を説明し、質的な記述への道を拓きます。さらに、そこから進化したCBSの知見に基づいて、文脈において行為する主体としての研究者のreflexivityとreactivityの議論から、観察と介入の二分法を超え出てゆきます。

話題提供３：「人生の木」から見た大学生の価値観形成プロセス（瀬平劉キャサリン）

「人生の木」は、共同的ナラティヴ・プラクティスの一つの方法で、困難に直面している人が、自分がすでに持っている資源（パーソナルな価値、希望、その支え）に気づいてゆき、自身の希望の物語を構築することを支えるために開発されたものです。本発表では、この実践を経験した大学生が、この呼びかけにどのように応答したのかに注目します。調査の対象は「自己省察と学びの主体性」をテーマとした大学の必修科目の履修生であり、授業で実施された「人生の木」のエクササイズの諸側面をとおして、「自分が大学で取り組もうと考えていること」に関する学生の気づきや主体性がどのように発展したかを考察します。それを通じて、大学生が自分の価値をいかに形成するのか、その多様な道を描写し、解明します。

Beyond the Dualism of Observation vs. Intervention

Dialogues between Contextual Behavioral Science and Qualitative Psychology

Anton Sevilla-Liu (Faculty of Arts and Science), Moderator, Presenting Author

Catherine Sevilla-Liu (Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University), Presenting Author

Honda Teruhiko (Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University), Presenting Author

Ueda Kayoko (Faculty of Health and Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare), Discussant

Language: Japanese

会員企画シンポジウム 20　　11 月 5 日（日）15：15-17:15　AC348

言説分析と社会的課題―三人連句読みつなぎ（２）

企画・分析者１：川野健治（立命館大学）
企画・分析者２：八ッ塚一郎（熊本大学）
企画・分析者３：岡部大祐（順天堂大学）

企画趣旨

本企画は、昨年度（2022 年度）開催した「言説分析と社会的課題―三人連句読みつなぎ」の第２回、続編にあたるシンポジウムである。

本企画の源流・原型は、2019 年度から 2021 年度までの３回にわたって開催した「言説分析と社会的課題―三人三様よみ比べ」である。「句会」になぞらえ共通の分析材料を「お題」として設定、専門も背景も異なる３人が、それぞれの関心と方法に基づいて分析を行う。当日お互いが分析を披露し合うとともに、フロアも加わって意見を出し合い、その「俳味」を批評しつつ、方法としての洗練を目指す。過去３回の「お題」は以下の通りである。

・2019 年度　薬物乱用に対する啓発資材「ダメ。ゼッタイ。」下敷き
・2020 年度　文科大臣「新型コロナ感染症に関する差別・偏見の防止に向けて」メッセージ
・2021 年度　がんサバイバー・クラブの紹介動画「一緒に」

正直なところ分析者は毎回苦吟を強いられ負担も大きい。しかし、異なる専門からの分析アプローチを身近に体験できることは得がたい機会であり、社会的課題に対する言説を通した接近と貢献の可能性にも毎回視野を開かれてきた。何より当初の予想を遙かに超える関心を寄せていただき、少なからぬ継続のご要望もあって、３回で終わるつもりだったところ、昨年度から装いを変えて新たな「句会」を始めた次第である。

新たなイメージは「連句」である。昨年度抄録から引用すると、「連句とは、詠者が読んだ最初の句に対して、その情景から次の句を連ねていく文芸である。最初の句を発句、第二句以下を付句、付句をつけることを付合などと呼ぶ。たとえば、①初しぐれ猿も小蓑をほしげなり（芭蕉）を発句として、②くしゃみひとつを落とす杉谷→③ピクニックおべんとひろげる人もいて、④ファーストキッスきょうはあげよう→④麻の葉の赤い帯しめちとおきやん→（後略）（https://japanknowledge.com/articles/koten/shoutai_61.html,22.7.15）、というように現代の読み手が付句を連ねていくとき、この付合の手法の多様さと連なる句の響き合いに俳諧を感じる」

世に流通するテクストも、決して単体ではなく、先行する別テクストの影響を受け、触発され、あるいは反抗しながら産出される。そこには詠み手の意図や狙い、また当事者も気付かないテクスト間の連なりや共鳴も作用しているであろう。このような間テクスト性を連句になぞらえ、連鎖するテクスト群を分析材料とし、テクスト間の予期せぬ連なりや相互の引用参照関係、波及する響き合いの作用を検討することが、新たな企画の趣旨である。

もっとも、たとえば SNS 上で流通するテクストなどは、連句というより、ネットの場で強烈に影響し合い肥大化して流動する巨大な生命体のようでさえある。ときに個人に甚大な苦痛を与え、政策や社会意

識さえ左右する言説群は、むしろ計算機科学の対象かもしれない。

しかし、当事者も意図しないテクストの連鎖や影響関係を見出すことは言説分析の独壇場でもある。特に社会的課題については、マクロな言説を解きほぐし、そこに響き合う微細で多声的なメッセージを聞き取ることがいっそう求められる。そこにはまた、よりよい「付句」を創出して言説空間を豊かにする、人間にしかできない社会的実践の余地も残されているはずである。少なくともこうした企図をもって言説分析の探索を進めていきたい。

前回 2022 年度のシンポでは、鎌倉市図書館の「学校が始まるのが死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館にいらっしゃい」ツイート（2015）に始まるネット記事の連鎖を分析材料とし、自殺予防という社会的課題に対する言説分析からのアプローチを試みた。

今回も、具体的な分析のテクストはシンポジウム当日にご披露する予定である。セッションでは、３名の登壇者が見出した間テクスト連鎖を披露し、これまでの企画と同様に、フロアと共にテクストの読みの可能性を探索する。分析にあたり、分析者の立場性を明らかにしておくことは、質的研究の方法論上も意味があると思われるため、これまでと同様に３人の分析者の基本的なスタンスを簡単に紹介しておく。

分析者１の川野は、近年はメンタルヘルス、特に自殺にかかる研究に従事してきた。必要に応じて、言説分析を選択してきたのであり、特定のスタンスがあるわけではない。2022 年度はマルチモーダルな分析視点をとり、最大フォントのタイトルで、直接引用形式でありながら表現を変え、発句からの時間経過、（発句の発信者ではない）図書館長の写真、権威者（内閣府の自殺総合対策）のリンクなどを、画面スクロールの前半に集めることで集合的な主体性を生成し、同時に発句のアドレスであった「死ぬほどつらい子」を希薄化して論争を収束させていることを指摘した。

分析者２の八ッ塚は、集団力学を専攻し、広義の社会構成主義を理論的基盤としている。パーカーの「ラディカル質的心理学」を糸口に、アクションリサーチとしての言説分析を模索、「いじめ」等教育言説の構造解明と代替言説の提案を試みてきた。2022 年度は、日本的集団の閉塞を嘆くそれ自体日本的な言説パターンを一連の記事に見出すとともに、図書館もまた弱者であることを指摘、それを逆手に取ったメッセージ発信の可能性を提案した。

分析者３の岡部は、社会言語学や社会心理学のディスコース研究の影響下で、主にがんにまつわるディスコース分析を行なってきた。2022 年度は、「発話出来事」と「語られた出来事」の区分に依拠し、発句での 2 つの出来事それぞれにおいて観察された図書館や学校に纏わる既存の見方との齟齬（disorder）を分析した。主体のポジション、特定表現の曖昧化、メタコミュニケーションによる解釈の統制などにより、「正常化」する連句とさらに齟齬を強化していく「病気化」の連句のディスコースの様相を考察した。

Discourse analysis and social problems:

Three types of intertextuality inspired by "Renku" (Japanese poetic dialogue) 2.

Kenji Kawano (Ritsumeikan University), Presenting Author
Ichiro Yatsuzuka (Kumamoto University), Moderator, Presenting Author
Daisuke Okabe (Juntendo University), Presenting Author

Language: Japanese

口頭発表

口頭発表スケジュール（各発表においては第 1 著者のみ記載）

1 日目（11 月 4 日）

口頭発表 1（優秀賞選考セッション 1）AS361・AS362(13:30-15:30)

No.	氏名	タイトル
O-1	梶原佐保	重度障害児・者をコミュニケーション主体として構築する過程　―援助者のライフストーリーに基づく検討―
O-2	竹田琢	大学生のリフレクション活動はどのように達成されるのか――相互行為上の課題に着目して
O-3	本岡美保子	乳児保育においてわらべうたによって生じる身体的同調ー保育者であった筆者の経験をもとにー
O-4	加藤誠也	変容への抵抗感や拒否感はどのように縮減しうるのか？― 変容的学習過程進捗の制動・停滞情態から脱する足場架け（scaffoldings）
O-5	小山多三代	複線径路等至性アプローチ（TEA）における分岐点概念の再考

口頭発表 2（優秀賞選考セッション 2）AS361・AS362(16:00-18:00)

No.	氏名	タイトル
O-6	五十嵐篤	グローバル人材へのキャリア発達プロセス ―日本人９名の統合ＴＥＭ（複線径路等至性モデリング）による分析と考察―
O-7	杉浦彰子	「川の記憶」の語りを伝承する（３）―災害・地域レジリエンス向上とまちづくりを目指した「語りマップ」の活用展開―
O-8	沖津奈緒	〈わが子の不登校〉を経験した母親のパーソナルリカバリー体験
O-9	谷晴加	死別を経験した人を対象としたセルフコンパッション(自己に対する思いやり)に焦点を当てたオンライン心理療法(COMPACT試験)の経験に関する質的調査―テーマティックアナリシス法による分析―
O-10	吉田弘美	日本文化を生きる中高年女性の語り　―解釈的現象学的分析における主体的人生の探索がもたらすもの―

2 日目（11 月 5 日）

口頭発表 3（優秀賞選考セッション 3）AS361・AS362(9:30-11:30)

No.	氏名	タイトル
O-11	田崎みどり	臨床ナラティヴアプローチから捉えた「適度な差異」の意義 ―認知症を有するAさんとの会話の実践からの検討―
O-12	駒澤真由美	ライフストーリーからフィールドワークへ、そしてオートエスノグラフィーへ
O-13	森永桃子	聴き手に話して伝える行為としての〈朗読〉―話し手との表現過程の振り返りを通して―
O-14	渡会由貴	聴覚障害者は心理療法をどのように捉え，何を求めているのか ――心理療法を受けたくても受けられない状況に焦点を当てて――
O-15	町田奈緒士	発達障害傾向を有するトランスジェンダーの人々の体験世界ー自己のあり方と他者関係の築き方に着目して

口頭発表 4（優秀賞選考セッション 4）AS363・AS364(9:30-11:30)

No.	氏名	タイトル
O-16	澤田雅斗	ナルコレプシーを生きること
O-17	清田顕子	第二言語での討論におけるトピック展開能力の発達とゼミコミュニティ：二年間にわたる縦断的事例研究
O-18	早﨑綾	外国語教育研究における研究者の感情と再帰性の役割の考察: Auto-TEMを用いて
O-19	新田莉生	ワクワクする人生を生き、自分らしく未来をつくる生き方をつかむまでのプロセス
O-20	大江輪	場の秩序の状態遷移の契機としての「ゆらぎ」の実証的研究 ―ストリートダンスの即興活動に着目して―
O-21	津田容子	地域若者サポートステーションに集う「若者」が抱える困難とニーズ――利用者を対象とした対話型ワークショップの試みから――

口頭発表 5（一般セッション 1）AS361・AS362(13:00-15:00)

No.	氏名	タイトル
O-22	石盛真徳	ニュージーランド在住の日本人移住者のライフストーリー研究（1） ―9名のライフストーリーに関する複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model）による分析―
O-23	園部友里恵	インタビュー調査にみる教員養成大学１年生の「教職不安」の様相
O-24	土倉英志	場にたいする信頼とは何か―その醸成過程に焦点をあてて
O-25	村井尚子	子どもが戦争文学とむきあう授業の現象学的記述

口頭発表 6（一般セッション 2）AS363・AS364(13:00-15:00)

No.	氏名	タイトル
O-26	金澤佑	Ipseityへの接近：外国語ライティング指導におけるディープ・アクティブラーニング教育実践としてのミニ・オートエスノグラフィー活動の可能性
O-27	嶋津百代	ビジュアル・ナラティヴから迫る日本語教師のキャリア観―経験の組織化と語りの共同性の観点から―
O-28	小沼律子	「伏線回収的リフレクション」で生み出される物語 ―小学校低学年の図画工作の記録行為から―
O-29	中井好男	公共的な私と物語的真実を追求するオートエスノグラフィー
O-30	鴨澤小織	海外で人格形成期を過ごした女性の心理的再編成に関する研究：静かなる流出の視点から

口頭発表１（優秀賞選考セッション１）

O-1 重度障害児・者をコミュニケーション主体として構築する過程　―援助者のライフストーリーに基づく検討―

梶原佐保(東京大学大学院教育学研究科)

重度障害児・者は、その障害により他者とのコミュニケーションが妨げられることが多い。しかし、重度障害児・者に関わる援助者はしばしば、重度障害児・者の言語的・非言語的な表出などから重度障害児・者のコミュニケーション能力を認識し、彼らをコミュニケーション主体として構築している（梶原・能智、2022)。筆者はこれまで、援助者が重度障害児・者と直接関わるミクロな関わりの場面においてコミュニケーション主体が構築される過程を検討してきたが、援助者の語りによれば、この構築の過程は重度障害児・者と援助者が関わりを持つようになってから、現在に至るまでの長期にわたり継続する営みであるという。そこで本研究では、援助者が重度障害児・者に関わった体験に着目してライフストーリー・インタビューを実施し、援助者が重度障害児・者をコミュニケーション主体として構築する過程を長期的な視点から検討する。

O-2 大学生のリフレクション活動はどのように達成されるのか――相互行為上の課題に着目して

竹田琢(青山学院大学国際マネジメント研究科)

リフレクションを支援するには、他者との対話や協同が重要であり、教育工学の領域を中心にグループワークを用いた支援の方法が多数蓄積されている。しかし、グループワーク形式のリフレクション活動において、学習者がどのように活動を行っているか、相互行為的な視点から検討した研究はこれまでに行われていない。本来、授業でグループワークを用いたリフレクション活動を導入する場合には、その活動がいかなる相互行為によって達成されているか、特に発生しうる学習者の相互行為上の課題とその方法を踏まえた授業設計が重要であると考えられる。そこで本研究では、大学内授業で実施されるグループワーク形式のリフレクション活動において、学習者はいかにリフレクション活動を達成しているのかを検討する。またどのような相互行為上の課題に直面するのか、その課題をどのような方法で解決しているのかについても検討する。分析は会話分析の方法を用いる。

O-3 乳児保育においてわらべうたによって生じる身体的同調ー保育者であった筆者の経験をもとにー

本岡美保子(比治山大学現代文化学部子ども発達教育学科)

身体的同調とは，呼吸が合うといった非言語的応答関係のことであり，気分や雰囲気などが合うことも含まれる。幼児の保育研究においては，わらべうたなど音楽性のあるやりとりによって生じる身体的同調が集団のまとまりに寄与するとされる。しかし乳児の場合は，共振や模倣といった身体の動きへの着目にとどまり，集団の関係性に関する言及はない。そこで本研究では，乳児保育者であった筆者の経験の記述から，複数人のわらべうたによる身体的同調場面を抜き出し，TAE による質的分析を行った。TAE とは，経験的現象学を理論的背景として，うまく言葉にできない身体感覚を言語感覚との相互作用によって言語化する方法である。結果から，乳児保育においてわらべうたによって生じる身体的同調とは，一人一人のうたへの同調によって身体や気持ちが動くことで濃淡のある雰囲気が生じてその場を基底し，その中でそれぞれが身を任せて自由に振る舞うことであった。

O-4 変容への抵抗感や拒否感はどのように縮減しうるのか？― 変容的学習過程進捗の制動・停滞情態から脱する足場架け（scaffoldings）

加藤誠也(東京工業大学環境・社会理工学院社会・人間科学系)

激動する事業環境の下、多くの企業で新たなパフォーマンスを創り出すため、成員一人ひとりに自己変容を求める変容的学習（Mezirow;2000）としてのリスキリングが推進されている。しかしこれは逡巡や葛藤・ジレンマと向き合う内省を伴うものであることから、変化より不変、未知より既知、不慣れなことより慣れ親しんだことに拠りがちな人と組織におけるその取組の実際には停滞・混迷状態がうかがえる。未知・未経験の事象に直面したとき人は誰しも抵抗感や拒否感を抱く。本研究は、変容的学習に取り組む企業等従業者のインタビュー調査の結果から、TEA と MAXQDA を用いて回答者毎の抵抗感や拒否感の内容とその現れを析出し、それぞれの語りに立ち戻ってその対処や解決方略を読み解く考察を行った。これにより変容的学習を推進する組織マネジメントに有用な参照項となりうる抵抗感や拒否感を縮減し、変容過程進捗を促す足場架け（scaffolding）の類型導出を試みた。

O-5 複線径路等至性アプローチ（TEA）における分岐点概念の再考

小山多三代(立命館大学大学院人間科学研究科博士課程後期課程)・土元哲平(中京大学心理学部)・安田裕子(立命館大学総合心理学部)

複線径路等至性アプローチ(TEA)の主要概念の一つに分岐点があるが、その描き方はあまり議論されておらず、研究者により様々である。分岐点は複数の径路が発生・分岐する点として概念化されているが、研究への概念適用においていくつかのパターンが見出される。元来的な定義通りに、選択肢が発生するきっかけとなった出来事(径路が分岐する前)に位置付けられることが多い一方、発生した選択肢そのものや、分岐していない点を分岐点と位置付けている研究もある。ある出来事がどのような観点で分岐点と位置付けられているかを理解することは、TEA のみならず、意味づけの行為を探究する質的心理学の重要課題の一つである。そこで本研究では、分岐点の適用範囲やパターンを整理し、どのような描き方をすれば人の経験を精緻に分析できるか検討する。これにより、分岐点概念の内実に迫り、従来は個々の研究者が手探りで位置付けていた分岐点を見出すガイドを提供する。

口頭発表２（優秀賞選考セッション２）

O-6 グローバル人材へのキャリア発達プロセス ―日本人９名の統合ＴＥＭ（複線径路等至性モデリング）による分析と考察―

五十嵐篤(慶應大学大学院政策・メディア研究科)

進展するグローバル化と技術進歩の加速で更に世界と繋がりやすくなった社会において、言語・文化・価値観などの違いを乗り越えて、異なる他者と協力し、共に働きキャリア形成をする人材を増やすことは、ますます重要になっている。外国語非ネイティブでありながら、外国人と共に働きキャリア形成してきた研究対象者のキャリア発達プロセスを、言語化・図式化し統合したＴＥＭ（複線径路等至性モデリング）図で分析した。タイプ別（意図型・偶発型・中間型)、キャリア理論のクランボルツの社会学習理論（Krumboltz,1979)、サビカスのキャリア構築理論（Savickas,1997,2005）の３つの視点で考察する。タイプ別の共通点相違点、キャリア理論に基づく重要な要因や次元から、キャリア発達プロセスの特徴と傾向を明らかにし、グローバル人材の概念に含まれる３要素(グローバル人材育成推進会議,2012)の問題点と課題、本研究の考察を踏まえた筆者の提案を述べる。

O-7 「川の記憶」の語りを伝承する（３）―災害・地域レジリエンス向上とまちづくりを目指した「語りマップ」の活用展開―

杉浦彰子(一般社団法人 JA 共済総合研究所調査研究部)・馬場紗矢香(茨城大学人文社会科学部)・伊藤哲司(茨城大学人文社会科学部)

本研究は、水害に遭った地域をフィールドに、住民の対話をとおした災害・地域レジリエンス向上とまちづくりを目指す取り組みである。本研究では、住民の土地や水害体験にまつわる記憶を収集するライフストーリーインタビューに始まり、語りに位置情報をつけて可視化することで住民の川の記憶や心象風景を共有するためデジタルの「語りマップ」 を創出した。この「語りマップ」を住民ワークショップに活用したところ、個人の経験知である「川の記憶」を地域知に昇華する仕組みを構築することができた。さらに、記憶の伝承の仕掛けとしてのマップというビジュアルの活用により、直接経験がなくとも語りの内容を想像しやすく、参加者は年齢や居住の有無にかかわらず、また遠隔地にいてネット上でも参加できることが明らかになった。「語りマップ」が災害・地域レジリエンス向上とまちづくりにどのように寄与できるかをさらに検討していく予定である。

O-8 〈わが子の不登校〉を経験した母親のパーソナルリカバリー体験

沖津奈緒(杏林大学保健学部健康福祉学科・東京学芸大学大学院連合博士課程)

【目的】本研究の目的は、〈わが子の不登校〉を経験した母親のパーソナルリカバリー体験を明らかにし、母親が安心してわが子を受容し、主体性を回復する支援に向けた示唆を得ることである。【方法】不登校経験のある子どもをもつ母親 14 名を対象とし、2021 年 5 月から 2023 年 4 月にかけて半構造化インタビュー調査を実施した。音声データから逐語録を作成し、テーマ分析法で分析をした。【倫理的配慮】対象者に、研究の趣旨とデータの匿名性の保持等を文書及び口頭で説明し、本人の同意を得た。なお、東京学芸大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。【結果】分析の結果、＜つながり＞＜希望＞＜アイデンティティ＞＜人生の意味づけ＞＜エンパワメント＞＜問題認識＞の 6 つのテーマが生成された。【考察】＜問題認識＞は、先行理論にはない不登校生の母親に特有のテーマと考えられた。今後は、影響要因や母子が共にリカバリーするメカニズムの解明が求められる。

O-9 死別を経験した人を対象としたセルフコンパッション(自己に対する思いやり)に焦点を当てたオンライン心理療法(COMPACT 試験)の経験に関する質的調査―テーマティックアナリシス法による分析―

谷晴加(大阪大学人間科学研究科)・山田美沙子(国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理部)・菅生聖子(大阪大学人間科学研究科)・小寺康博(ノッティンガム大学 (英国) 医療健康学部)・釆野優(京都大学大学院 医学研究科)

【背景】死別経験者でセルフコンパッションのスコアが高い人は、悲嘆が少ないことが知られている(Lenferinka & Eisma , 2017)。そこで我々は死別経験のある集団を対象としたセルフコンパッションに焦点を当てたオンライン心理療法を遂行した(UMIN000048554)。【目的】効果や課題を検討するために、研究参加者と介入担当者の経験を明らかにすること。【方法】研究参加者 21 名に半構造化インタビューを、介入担当者 9 名にフォーカスグループインタビューを実施した。その後テーマティックアナリシス法を用いて分析を行った。

【結果】研究参加者からは「気づき」について最も多く語られ、介入担当者からは「本プログラムについてさらに検討できそうな点」が多く語られた。【考察】研究参加者は自身の気づきが促され、他者との繋がりを感じることができた一方で、参加者のアセスメントや介入担当者の訓練等において改善の余地があることが示唆された。

O-10 日本文化を生きる中高年女性の語り　―解釈的現象学的分析における主体的人生の探索がもたらすもの―

吉田弘美(甲子園大学大学院心理学研究科　博士後期課程)

現在 60 才の研究協力者は、好景気の最盛期であった 1980 年代に成人・就職しており、「女性の社会進出」が謳われる社会を背景に、「専業主婦から働く女性」としての生き方を選び、その立場を確立した女性である。輝かしい時代を担う一方、そこには依然、日本文化に根づく「女性像」が横たわっており、相反する世界に葛藤を抱えながら生きてきた女性でもある。本研究では、ハイデガーの存在論を基盤とした解釈的現象学的分析を用いて、研究協力者の語りを多元的に分析した。「生きられた経験」を表現する「言語」をもひとつの理論形成の源泉として捉え、言語が織りなす世界に存在する人間の「主体的人生の探索」に立ち返る。

本発表では、「主体的人生の探索」の分析過程に顕われうるものから、哲学的視座による研究が心理学領域に貢献することを示したい。

口頭発表 3（優秀賞選考セッション 3）

O-11 臨床ナラティヴアプローチから捉えた「適度な差異」の意義 ―認知症を有する A さんとの会話の実践からの検討―

田崎みどり（長崎純心大学人文学部）

田崎（2022）は、デイケアにおいて実践した認知症を有する A さんとの全 21 回の会話における A さん発話を臨床ナラティヴアプローチの観点から分析し、文脈作りを工夫することで適度な差異（Andersen,1992）が生じる可能性を示した。また田崎（印刷中）では、野村（2010）の時間研究を根拠とし、会話を続けていくことが A さんの主観的な時間の回復に貢献し得ることを示した。主観的な時間が動き始めた 12 回目の会話では、現実見当識障害を有する A さん自身から、なぜ自分が「今」「ここ」にいるのか、という一人称の問いが生じ、会話を続けるなかで「ここ」のとらえ方が、A さんにとってより居心地の良いものへと変化した。本発表では、この場面の A さんと発表者の会話における発話連鎖を分析し、適度な差異が生じることの意義について検討する。なお、本研究は日本質的心理学会の「投稿に際してのチェックリスト」を参照し、適切な倫理的配慮を行っている。

O-12 ライフストーリーからフィールドワークへ、そしてオートエスノグラフィーへ

駒澤真由美（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

本発表は、10 年にわたる研究実践を通して、臨床心理学分野におけるナラティヴ研究から手法を拡大し、精神障害者の就労現場におけるフィールドワークをふまえた研究協力者との対話によるライフストーリー・インタビューが、自己を探索するオートエスノグラフィカルな研究でもあったことを、質的調査研究の知見としてあらたに提供するものである。

ライフストーリーは、人生における個人的な経験をもとにした語りから「自己の生活そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法」の 1 つであると同時に、語り手と聞き手の相互行為を通して「過去の自分の人生や自己経験の意味を伝える語り」でもある。しかし、語り手だけでなく聞き手の発言にも個人の人生における行為の意味が潜み、発表者自身もまたその場で自己を探索していたのである。なお本研究は研究倫理審査委員会の承認（衣笠-人-2017-89）を得て実施した。

O-13 聴き手に話して伝える行為としての〈朗読〉―話し手との表現過程の振り返りを通して―

森永桃子（九州大学大学院人間環境学府）・佐々木玲二（九州大学大学院人間環境学研究院）

本研究では「話し手が聴き手に向けて文章を読み上げて伝える行為」を〈朗読〉と呼ぶ。この〈朗読〉における話し手の表現過程を明らかにし、〈朗読〉が話し手にとってどのような意味を持つか検討することが本研究の目的である。調査では 12 名の研究協力者に〈朗読〉をしてもらい、その体験についてインタビューを行った。インタビューデータについて質的分析を行った結果「表現のしやすさ（読みにくさ―読みやすさ）」と「表現の階層（テキストを話す体験―物語に入る体験）」という 2 軸が見出された。さらに、一人の表現過程の中でも読みやすさが変化しており、読みにくい時と読みやすい時とで話し手の取り組む作業が異なることが示唆された。これらのことから、話し手は単に文章を読み上げるという行為を続けているかのように見えるが、その内界では様々な動きが生じており、話し手がその瞬間に行っている作業やその意味は刻々と変化し続けていると考えられた。

O-14 聴覚障害者は心理療法をどのように捉え，何を求めているのか ――心理療法を受けたくても受けられない状況に焦点を当てて――

渡会由貴(東京学芸大学教育支援協働実践開発専攻(修士課程)臨床心理学プログラム)・山田哲子(立教大学現代心理学部)

現在，日本の心理療法は基本的に音声言語でのやり取りが前提とされているため，生きていく中で様々な困難を抱えやすい聴覚障害者に十分な心理臨床の機会が提供されていない（田中，2012)。そこで，心理療法における聴覚障害者のニーズやハードルを明らかにすることを目的に，成人聴覚障害者 10 人を対象に半構造化面接を行い，GTA による分析を行った。その結果①心理療法を受けるハードル②求める心理療法の在り方③心理療法を受けた心理的体験が明らかになった。心理療法を最後の砦として捉えていることも明らかになり，心理療法自体のニーズとその重要性が再確認された。ニーズや使いやすいコミュニケーション方法は，同じ聴覚障害でも個人の聴力やアイデンティティに左右されるため，[なんでも話せる場]として心理療法を実現するためには，予約までのハードルの解消と共に，個人が気持ちを一番豊かに表現できる環境を整えることが必要不可欠であると示された。

O-15 発達障害傾向を有するトランスジェンダーの人々の体験世界ー自己のあり方と他者関係の築き方に着目して

町田奈緒士(名古屋大学ジェンダーダイバーシティセンター)

近年、トランスジェンダー (TG) をめぐる国際的研究の文脈の中で、TG の人々は非 TG (シスジェンダー) と比べ、発達障害を有する割合がおよそ 10 倍であるなど、発達障害との関連性が指摘され始めている。TG であり発達障害を有することによって、それぞれ単一の属性を有する場合とは異なる質感の体験をしていることが推察されるが、両者の絡み合いを考慮に入れた研究は、発達障害領域・TG 領域のいずれの学術領域においても僅少である。しかしながら、TG の人々が、コミュニケーションの困難や衝動性などによって特徴付けられる発達障害を有する場合、複合的な生きづらさを抱えることが推察される。そうした背景から、2 名の発達障害傾向を有する TG 当事者の人々を対象として、語り合い法を用いたインタビュー調査を実施した。本発表では、予備的考察を報告し、参加者との議論を通じて、彼らの自己のあり方や他者関係の築き方の特徴についての了解を深めたい。

口頭発表 4（優秀賞選考セッション 4）

O-16 ナルコレプシーを生きること

澤田雅斗(一橋大学大学院社会学研究科)

ナルコレプシーは日中の過度な眠気・情動脱力発作を主症状とする過眠症のひとつである。発症から診断までに平均 10 年以上要すること、雇用の不安定、対人関係への影響などが報告されてきた。ナルコレプシーが長期に影響することを踏まえると、人生においてどのように影響したか焦点をあてる必要がある。しかし、そのような視点の研究は乏しい。そこで本研究では、ナルコレプシーを患うことが人生においてどのように影響するのかを通じて、ナルコレプシーがその人の生における意味づけを検討する。ナルコレプシーと診断された 5 名へのインタビュー・NPO 法人日本ナルコレプシー協会の会誌を対象とし、ライフストーリー法および病いの語り研究をてがかりに分析した。結果、症状ごとに異なる対処をしていることによって、そこに異なる意味づけがあることなどが明らかになった。本研究は、一橋大学研究倫理審査委員会による承認を経て実施している(承認番号:2023C002)

O-17 第二言語での討論におけるトピック展開能力の発達とゼミコミュニティ：二年間にわたる縦断的事例研究

清田顕子(早稲田大学教育学研究科)

専門内容を第二言語である英語で討論することは、日本国内で習熟度が高いと見なされる TOEFL ITP 550 点前後の大学生にとっても、難度が高い（太原ほか, 2021）。しかし、困難の要因、方略、討論能力の発達の過程と成果はどのようなものかについての縦断的データは乏しい。そこで本研究は、英語で討論できるようになると定評がある専門科目ゼミの授業に着目し、第二言語相互行為能力の一つであるトピック展開（Galaczi & Taylor, 2018）の観点から、焦点者の事例研究を行った。毎週、母語と英語で 3 時間の討論を行う学生達に 2 年間密着し、相互行為データ、研究参加者による毎週のログ、インタビューデータ、フィールドノーツを収集した。本発表では、他教室では速い発話と順番交替などで討論への参加を困難に感じていた焦点者が、当該ゼミコミュニティでトピック展開が出来るようになっていく様子を、上級生の相互行為能力による包摂的な足場架けと共に示す。

O-18 外国語教育研究における研究者の感情と再帰性の役割の考察: Auto-TEM を用いて

早﨑綾(早稲田大学文学研究科)

近年、外国語教育研究における社会的平等のあり方が注目されている。私（発表者）自身、地方高校出身女性の人生径路における英語学習の役割とエンパワメントの可能性を探索してきた。しかし、このような社会正義を扱う研究において、研究者自身の内省を通して生じる複雑な感情やその変化の過程、そしてこれらが研究結果に与える影響についてはほとんど着目されていない。そこで本研究では、Auto-TEM(Tsuchimoto & Sato, 2022)を用い、研究過程における研究者自身の感情と再帰性の役割について考察する。主な研究参加者は、私（発表者）自身である。研究者の感情と再帰性の役割を詳細な文脈の中で詳らかにし、同時にその倫理的面の課題についても議論する。これにより、社会的格差の拡大が懸念されるこれからの日本において、外国語教育教育研究の「何を」「どのように」、そして「誰が」「誰のために」行うべきかといった問いへの答えを再考することをめざす。

O-19 ワクワクする人生を生き、自分らしく未来をつくる生き方をつかむまでのプロセス

新田莉生(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科)・伊庭崇(慶應義塾大学総合政策学部)

本研究は、これからの時代の新たな生き方のロールモデルとして、ワクワクする人生を生き、自分らしく未来をつくる人たちの人生径路を明らかにする。本研究における「ワクワクする人生」とは、単に楽で楽しい人生を指すのではない。むしろ、時に自ら過酷な道を選び、苦しむこともある。本研究の対象者たちに共通することは、自分が「こうしたい」と思う意思にしかと向き合い、自分の心が向く方に愚直に突き進んでいる点である。そして、それらは大抵、異端で先例がない（または少ない）生き方に向かっていく。しかしそこで彼らは、どのようにすれば自分が「こうしたい」と思う生き方を実現できるかを考え、その方法を見つけ出し、なければつくる。そこで本研究では、「なぜそのような選択ができたのか」とその決断力や行動力に感心する、分野領域・世代が異なる 4 名の人生径路を TEM の手法を用いて描き、「ワクワクする人生」に等至するまでの複線径路を描出する。

O-20 場の秩序の状態遷移の契機としての「ゆらぎ」の実証的研究 ―ストリートダンスの即興活動に着目して―

大江輪(九州大学人間環境学府)・佐々木玲二(九州大学大学院人間環境学研究院)

「ゆらぎ」とは瞬間的に生じる、物事の予測できない空間的、時間的変化のことである。複数の人間で構成され相互に関係し合っているひとまとまりの体系としての“システム”にもこのような「ゆらぎ」は生じる。そこでは、システムの有する秩序からの逸脱が「ゆらぎ」となる。「ゆらぎ」は秩序からの逸脱でありながらも、時にシステムを別様の構造へと変容させることがある。本研究は「場」というシステムに生じる「ゆらぎ」とその影響を明らかにすることを目的として、ストリートダンスにおける即興活動“セッション”を対象に参与観察、映像分析、インタビューを用いて実証的に検討した。本調査の結果セッションは緩やかに秩序を変化させていたが、６場面で観察された「ゆらぎ」は特に秩序の大きな変化を生み出していたことが明らかになった。「ゆらぎ」が無視されずに積極的に活用されていたその背景には、セッションの一回性と対等性という性質が想定された。

O-21 地域若者サポートステーションに集う「若者」が抱える困難とニーズ――利用者を対象とした対話型ワークショップの試みから――

津田容子(東京大学大学院教育学研究科)

公的な就労支援機関である地域若者サポートステーションを利用する人がどのような困難を抱え，どういった支援，社会のあり方を求めているかの検討を目的に，著者所属大学の倫理委員会の承認の下，利用者 17 名と企業経営者 2 名，団体職員 2 名が参加する対話型ワークショップ（計 3 回）を実施した。逐語記録をグラウンデッド・セオリー・アプローチにて分析した。その結果明らかとなった困難は，生き方を見失った，何から始めればよいかわからない，「普通」の人への負い目，仕事を続けられるか，自立していけるか等であった。一方ニーズとしては，柔軟な働き方，お金や社会保障の知識，様々な企業と知り合う機会，利用者同士で話をする場，多様な生き方を認める社会等が見られた。利用者にとって就労における困難と自己に関する悩みは不可分であり，他者と対話する機会，他者との重なりや違いへの気付きから困難やニーズの明確化が促進されることが示唆された。

口頭発表 5（一般セッション 1）

O-22 ニュージーランド在住の日本人移住者のライフストーリー研究（1） ―9 名のライフストーリーに関する複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model）による分析―

石盛真徳(追手門学院大学経営学部)・Igor de Almeida(京都大学人と社会の未来研究院)・中尾元(追手門学院大学経営学部)

本研究は、ニュージーランド在住の日本人移住者 9 名（男性 3 名、女性 6 名）を対象に、ライフストーリーの半構造化面接、自叙写真法、食事の撮影という方法で、2022 年 6 月から 2023 年 2 月に行った。予め用意した質問は、1．基本的な事項（年齢、性別、家族構成、ニュージーランドでの居住年数・滞在資格)、2．日本での生活（学校生活、海外留学等の経験、職業生活)、3．ニュージーランドでの生活（初訪問時の印象、移住のきっかけ、学校生活、職業生活、楽しいこと・困ったこと、日本人コミュニティとの関わり、長期的な生活プラン）であった。各ライフストーリーに関する複線径路・等至性モデルによる分析の結果、移住者にとっては、移住が共通な必須通過点となっているが、その後の生活には大きな多様性がみられることが明らかとなった。本研究は JSPS 科研費 JP21K02990 の助成を受け、追手門学院大学研究倫理委員会の承認（受付番号：2012-22）を得て実施した。

O-23 インタビュー調査にみる教員養成大学 1 年生の「教職不安」の様相

園部友里恵(三重大学大学院教育学研究科)

「教員のなり手不足」は深刻な状況にある。発表者は、一昨年度より教育学部の 1 年次必修科目「教職入門」を担当することになった。初回授業で履修学生に尋ねたところ、多くの学生は「教職に魅力は感じるけれど、不安も大きい」と回答した。本研究では、こうした教職課程の学生が抱く、教職に就くことをめぐる不安を「教職不安」と呼ぶ。本発表の目的は、教員養成大学 1 年生の「教職不安」の様相を、個別インタビュー調査から明らかにすることである。対象は、2023 年 7 月の「教職不安」質問紙調査への回答協力者のうち本調査への協力同意も得られた 34 名である。インタビューでは、質問紙調査で尋ねた「教職不安」の項目を提示し、各項目に対し抱く不安の度合いとその内実を、60～90 分程度聞き取った。なお、本研究は（公財）日本教育公務員弘済会の令和 5 年度日教弘本部奨励金の助成を受け、三重大学教育学部研究倫理審査委員会の承認を得た上で遂行している。

O-24 場にたいする信頼とは何か―その醸成過程に焦点をあてて

土倉英志(法政大学社会学部)

孤立や孤独が課題として焦点化されている。また、居場所の重要性も指摘されている。筆者はコミュニティカフェと呼ばれる、居場所となりうるカフェのフィールド研究を行なっている。コミュニティカフェはコロナ禍においても足を運びやすい場所として人びとの生活を支えていた。筆者は、利用者に、カフェや訪れる人にたいする信頼のようなものがあることを見いだし、それを「場にたいする信頼」と名づけた（土倉，2023)。それでは「場にたいする信頼」とはいったい何なのだろうか。それは、自分がオーナーを慕い、信頼しているように、他の利用者もまたそのオーナーを慕い、信頼している、というオーナーを媒介とするものと言える。それでは「場にたいする信頼」はいかにしてうまれるのだろうか。オーナーの思い、それに触発された利用者の思い、展開していく利用者とカフェのかかわり、こうしたものが絡まりあいながら、はぐくまれていることを示したい。

O-25 子どもが戦争文学とむきあう授業の現象学的記述

村井尚子(京都女子大学発達教育学部)・吉永かおり(立命館小学校)

現在の小学4年生は2013年から2014年にかけて生まれた世代である。子どもたちの両親の世代や多くの祖父母の世代には戦争体験がない。そして授業を行う教師たちもまた、戦争体験をもたない。それであれば、戦争を描いた文学を読むことで、戦争のリアリティに触れること、平和の意味を感得することが次善の策として考えられるだろう。本発表では、子どもたちが授業の中でどのように戦争文学にむきあい、何を得ているのかを分析することをめざす。具体的には、授業の現象学的記述を行うことを通して、このテーマにどの程度迫ることができるのかを検討していきたい。

口頭発表 6（一般セッション 2）

O-26　Ipseity への接近：外国語ライティング指導におけるディープ・アクティブラーニング教育実践としてのミニ・オートエスノグラフィー活動の可能性

金澤佑（大阪大学大学院人文学研究科）

外国語ライティング指導では形式や正確さに着目した指導が主流である。一方で、学習者エンゲージメントを伴った主体的で深い 21 世紀型の学びのためには、創造的作文のような、意味に着目した模範解答の無い活動も重要である。本論では、さらに進んで、学習者各々の重要な経験の内省をトピックとすることで真正性に着目した、自己理解の深化を伴う全人教育的なライティング活動の重要性や可能性について、以下の観点から論じる：（1）深い学習における情動関与の重要性、(2）ポジティブ情動とその限界、(3）自己認識や自己表現における自己の多義性（特に、auto-idem と auto-ipse の違い）、(4）外国語効果による、自我同一性に縛られた auto-idem の小休止と真正な auto-ipse への接近の可能性、(5）方法論としてのミニ・オートエスノグラフィーとその類型に応じた活動可能性（喚起的、熟慮的、相互行為的、分析的）、(6）哲学対話実践（P4C; P4ELT）との連携可能性。

O-27 ビジュアル・ナラティヴから迫る日本語教師のキャリア観―経験の組織化と語りの共同性の観点から―

嶋津百代（関西大学外国語学部）・土元哲平（中京大学心理学部）・中谷潤子（大阪産業大学国際学部）

本発表は、日本語教師のキャリア形成に関する縦断的研究の一環として、ビジュアル・ナラティヴ（やまだ, 2021）を用いて、日本語教師のキャリア観を考察するものである。日本語教師のキャリアに関する研究では、キャリア選択に影響を与える要因の検討（佐藤・片野・髙木, 2022）やキャリア形成過程の理論的・実践的考察（舘岡, 2023）が行われてきた。しかしながら、日本語教師として就職した後に、キャリアを持続的なものにしている人々がどのようにキャリアを意味づけているかについては、十分に検討されてこなかった。本発表では、初任日本語教師 9 名に対するインタビュー、そのうち 5 名に対するワークショップ形式の調査を行い、「自己（教師）と学生の関係性」に関するビジュアル・ナラティヴと、各自の絵を介した共同的な語りを分析する。これらの分析によって、キャリアを主体的に進めている日本語教師の意味づけと、かれらのキャリア観を浮き彫りにする。

O-28 「伏線回収的リフレクション」で生み出される物語　―小学校低学年の図画工作の記録行為からー

小沼律子（お茶の水女子大学附属小学校）

刑部（2018）は開発したビデオ・ツール「CAVScene」を利用した保育カンファレンスにおけるリフレクション事例から、「逆進向進探索（Back-Forth Tracing)」という「辿り直し」による新たな実践の物語が創発される可能性を論じている。筆者は実践者として授業中に「CAVScene」で記録を撮り、過去の記録を見返す際、物語となりうる伏線を暗黙のうちに回収しながら場面（Scene）を探索し、動画には可視化されていない出来事（Event）を繋ぎ合わせ、物語（Narrative)として見えてくることに気がついた。これが、子ども、教師、環境など周辺の多様な他者がどのように関わり合って物語が編み出されていたのかを読み解く「伏線回収的リフレクション」である。このような伏線を実践者が見い出し、価値づける事が、次の新たな展開と実践を生み出すことにつながると考える。

O-29 公共的な私と物語的真実を追求するオートエスノグラフィー

中井好男(大阪大学大学院人間科学研究科)・中山亜紀子(広島大学大学院人間社会科学研究科)

本発表は、オートエスノグラフィー（以下、AE）が生み出す私の公共性とそれを記述する意義について、2つのケースを用いて検討するものである。発表者はそれぞれ、障害者家族が抱える生きづらさと言語学習者及び言語教師としての私についてAEを作成している。これらのAEは、作成過程に対話者を据えていることから、対話者との共同構築による自身の経験に関する間主観的なプロットを有する。また、AEは消費されながら変容していくストーリーであり、他者の視点を通して更新を重ねることで「物語的真実」へと昇華していく。言語化された事実や情緒は他者との共有によって客観化されるとともに内在化されることで、自身の経験として記憶を塗り替えていくということである。経験を語り直すAEを継続することは、自己を社会関係に分散させ、私の公共性を高めるとともに、社会正義の追求を可能にする意味を社会の中で共同構築する過程であると言える。

O-30 海外で人格形成期を過ごした女性の心理的再編成に関する研究：静かなる流出の視点から

鴨澤小織(日本大学文理学部)

日本人の両親を持つ女児が海外で人格形成期を送ることは，その地でつくりあげた価値観や意味づけの枠組みをもって 日本へ帰国することである。日本での生活は母国であっても，また両親が日本人であっても 自分の内側にある価値観や意味づけの枠組みが日本社会と噛み合わないことからくる生きづらさに直面する事がわかっている。

特に，人格形成期に欧米で教育を受けて，帰国後ジェンダー平等に関する意識が低いといわれている日本に帰国し，就職・結婚などに直面し多くの生きづらさを抱え，メンタルヘルスの問題を抱えることが多い。そこで再度海外に出て，就職，結婚をすることで自分らしさを取り戻している女性の女性のメンタルヘルスに注目して，複線経路・等至性アプローチ（ＴＥＡ）を用いて質的分析をし，彼女たちを取り巻く日本社会の多様性と差別の課題を考察したい。

ポスター発表

ポスター発表スケジュール（各発表においては筆頭発表者のみ記載）

1 日目（11 月 4 日）

（優秀賞選考セッション）AS358

No.	氏名	タイトル
P-1	勝谷紀子	障害の不在から共有へ：書くことによる障害の外在化への過程のオートエスノグラフィ
P-2	梅本知子	自己修復に着目した会話力の解明：会話分析を通して看護教育への応用に向けた手がかりを探る
P-3	新井素子	レトリックから見た自傷行為－自己切創または皮膚むしりの経験者の語りの分析から
P-4	小木貢	持続可能なまちづくりを意識した「共同作業」による向社会的感情（メンバリズム）に関する研究
P-5	杉山陽香	メディアを介した自殺情報への接触経験の実態調査
P-6	尾石智美	働く母親たちはなぜインターネット・コミュニティにいるのか
P-7	大豆生田芽吹	保育園4歳児クラスにおける保育者の共同注視としての「見守る」行為
P-8	建部智美	地域在住高齢者のAdvance Care Planningに関わる要因の検討
P-9	門倉拓郎	東京レインボープライドに継続的に参与した青年達の経験－性的マイノリティのイベントに展望を持つまでの過程
P-10	廣瀬太介	ひきこもり者の対話的自己の検討 —社会と再接続する分岐点に焦点を当てて—
P-11	濱名潔	オートエスノグラフィーを用いた博士論文の作成と指導に関する対話的オートエスノグラフィー
P-12	曽佳荷	中国の「儺（ノウ）」を例として郷土芸能の後継者についての検討
P-13	堀江貴久子	体育会アスリートがキャリア決定に至るプロセスの検討 ——複線径路等至性モデリングを用いて——
P-14	岩下夏岐	タイ中部における高齢者リハビリテーションの人類学的研究
P-15	瀬々彩香	各アタッチメントスタイルの対象者が築いた重要他者との関係性と関係性を経て形作られる幸福感の様相

（優秀賞選考セッション）AS368

No.	氏名	タイトル
P-16	緒方亜文	知的障害を伴うASD児の「エコラリア」に教師はどのように対処するか：支援場面の相互行為分析
P-17	中山優美	ひとり親家庭の父親が支援に繋がるプロセス -父親の援助要請に注目して-
P-18	笠原千秋	自己の可変性信念に関する自由記述のペンタド分析
P-19	齋藤優希	性格の変容を促す要因の検討
P-20	石渡美穂子	身体的（不）協応関係における、人々と場の生成性の検討—浦河べてるの家でのオートエスノグラフィを通して—
P-21	鈴木美枝子	東日本大震災時、放射能による制限と保育者の葛藤のプロセス

(一般セッション)AS368

No.	氏名	タイトル
P-22	村山陽	高齢未婚女性における自己解決の背景要因：テーマティック・アナリシスによる分析
P-23	李フシン	住民主体の震災復興とは何か？茨城県大洗町を事例に
P-24	河本尋子	災害という文脈における地域への愛着に関する一考察
P-25	市川章子	子どもの育ちを伝えるための翻訳ー日本語母語話者教師と日本語非母語話者保護者を「むすぶ」もの語りー
P-26	松浦李恵	イラストレーターの制作場面からみるSNSにおける評判獲得とオリジナリティに関する考察
P-27	仲本美央	地域の図書館以外の公共施設における絵本環境の社会的役割とは何か ー公民館および児童館などの職員へのインタビュー調査から考える一
P-28	鈴木聡志	職業に呼ばれる経験のバリエーション
P-29	石井俊行	看護系大学3年生の「患者に寄り添う看護」の概念化に関する考察
P-30	木下寛子	表現されたものが生き延びる場――小学校の日々への参与から問う学校・校区理解と表現

2 日目（11 月 5 日）

(一般セッション)AS358

No.	氏名	タイトル
P-31	森川佳恵	被災した女性が語るコミュニティとレジリエンスからの考察
P-32	荒木奈美	空気を読みすぎる「生きづらさ」とビジュアル・オートエスノグラフィー
P-33	香曽我部琢	視覚素材を用いた仮想実験によるIn-Depth Interviewー山脈的自己モデルによる分析
P-34	岡田美笛	インクルーシブ保育における集団性とは
P-35	竹内一真	和菓子の復活から捉えるものの物語的自己同一性： 失われた味を巡る記憶と記録を通じた修復的実践
P-36	松原未季	幼稚園のある5歳児の「つまずき」場面における対処とそれに対する保育者の援助：5クラスのクラス替えが実施される園での調査から
P-37	岸野麻衣	「話す」「聞く」はどのように構成されるのか：幼小接続期の話し合い場面の分析
P-38	稲嶺美祈	―人職場の対人援助職をエンパワーする力――産業保健師と養護教諭へのインタビューから――
P-39	松熊亮	WEBアンケートによる成人期発達障害者の親ときょうだいのやりとりの実態把握の試み
P-40	大橋靖史	将来の時間的展望と主体的選択が生成されるプロセスに関する研究　－占い師と相談者のやり取りの分析－
P-41	稲垣綾子	夫婦のアタッチメントニーズに関する共同生成ナラティブと社会文化的ディスコース
P-42	藤井真樹	語り合いから探る子育て中の母親の「変わり目」：「変わる」ことをめぐる体験とは
P-43	福岡寿美子	社会共創プログラムの活動における国際共修による学習者の心理
P-44	岸磨貴子	アートベース・リサーチによるゼミ教育の可能性： 演劇手法を用いた異文化体験の探究を通して
P-45	上村晶	子どもとの関係構築プロセスの可視化による保育者の意識変容とは(4) ー3歳児との関係構築の実相に着目してー

(一般セッション)AS368

No.	氏名	タイトル
P-46	鯵坂誠之	発達障害の親の会に対するペアレント・トレーニングの効果
P-47	田中寿夫	初任者スクールカウンセラーのリアリティショックを通じた職業的アイデンティティの発達：QUAMを援用した１事例の分析
P-48	小池星多	超小型人工衛星開発におけるコミュニティの質的研究（1）
P-49	福山未智	Auto-TEMの表現に写真を用いる提案-コスプレをフィールドに-
P-50	長内優樹	Digital Transformation（DX）へのとある旅行業者管理部門従業員の認識－ストレス予防の観点からの半構造化面接による研究－
P-51	中澤真理恵	里親子関係の構築と家族アイデンティティ形成プロセス――真実告知を経験した里母の語りに着目して――
P-52	沖潮満里子	障害者のきょうだいによる新たな親理解 ―成人期きょうだいの語り合いから
P-53	乾明紀	複線径路等至性アプローチ（TEA）と関係学との理論的接合に関する研究
P-54	黒住早紀子	支援者と支援対象児の相互理解である関係的理解をたよりにした支援のプロセス―小学校通常学級で複数の支援者が関わる支援事例から
P-55	曽山いづみ	離婚を経験する父が必要とするサポートとは
P-56	朝比奈茉穂	保育園の0歳児クラスにおける歌やリズムの果たす機能
P-57	勝見吉彰	ピアッシング行為をめぐる体験内容に関する探索的研究
P-58	安達仁美	ESDに取り組む教師のワークとライフ
P-59	司城紀代美	子どもの「こだわり」が緩むとき―幼稚園での観察事例から―
P-60	中田友貴	大規模言語モデルによる経産婦インタビューデータの文字起こし精度の検討
P-61	三品拓人	子育て環境としての日本・アジアのイメージーー育児期女性の語りから
P-62	安達仁美	ESDに取り組む教師のワークとライフ

ポスター発表１日目（優秀賞選考セッション）AS358

P-1 障害の不在から共有へ：書くことによる障害の外在化への過程のオートエスノグラフィ

勝谷紀子(東京大学先端科学技術研究センター)

外から観察できない心身の機能制約のために社会的障壁に直面し、生きづらさを感じる「障害」という経験は、他者に語ることによって初めてその経験が表に現れる。本研究は、報告者自身の経験である希少疾患による聴覚障害に焦点を当て、語ることによる障害の外在化の過程を明らかにする。具体的には、オートエスノグラフィの手法を用いて、報告者が大学院入学以来インターネット上のブログやSNS等に25年間書いてきた体験の記述を対象に検討した。本研究は日本福祉大学大学院倫理審査委員会の承認を受けた（承認番号22-008)。報告者が過去に綴った体験の記述を報告者自身が振り返って内容を再帰的に考察した。当初は難聴に関する記述がほとんど見られず「なかったこと」となっていた「障害」は、次第に記述が現れては消え、希少疾患の発見とともに記述が急増して「外在化」を果たし、他者と共有されていく過程がみられた。考察に基づき障害のモデルを考える。

P-2 自己修復に着目した会話力の解明：会話分析を通して看護教育への応用に向けた手がかりを探る

梅本知子(滋賀医科大学大学院医学系研究科修士課程)・坂本真優(滋賀医科大学医学部看護学科)・藤村祐大(滋賀医科大学大学院医学系研究科修士課程)・橋本周子(訪問看護ステーションふれみる)・町田佳世子(札幌市立大学)・河村奈美子(滋賀医科大学医学系看護学科)

発表者らの専門分野である看護学の実践においてコミュニケーションは必須の看護技術である。しかしながら、看護教育において、コミュニケーションの分析によるエビデンスを得る方法は、教育の中では扱われないことも多く、看護のコミュニケーション教育の課題である。本研究の目的は、異国で片言の言語を活用しミッションを遂行する人気TV番組の会話分析により、看護教育への応用可能な効果的な会話構築の手がかりを得ることである。串田ら（2017）の会話分析方法を参考にし、番組の一コーナーの会話を吹きおこし、会話の隣接ペアと自己修復に焦点を当てて特徴を分析した。主人公の相手を会話に巻き込む（誘う）会話の特徴が、相手から会話の積極的参加を促す様子について捉えられた。この特徴は患者の参加を促そうとする看護計画の実施の際に、コミュニケーション技術として応用可能であると考えられた。

P-3 レトリックから見た自傷行為－自己切創または皮膚むしりの経験者の語りの分析から

新井素子(東京大学大学院教育学研究科)

本研究は，自傷行為者が語りで用いたレトリックの分析から行為者の内面を探索するものである。所属大学による倫理審査を経て，大学生に質問紙調査(岡田，2010)と半構造化面接を実施し，得られた自己切創５名(男性１名，女性４名)，皮膚むしり５名(全員女性)の語りを分析した。Lakoff & Johnson(1980)を参考に比喩の所記と能記のペアを抽出，得られたペアはSontag(1978)を参考にカテゴリ化した。全部で16種のペアが同定された。これらは２つの観点(行為主体性，目的)に基づく解釈レパートリーに分けられ，行為主体性の強さには３個(受身，方便，職人技)，目的には５個(見世物，日常の超越，儀式，「薬」，「生」や成長の可視化)のサブテゴリがあると考えられた。比喩により，強い主体性からは職人技の対象，受身的には救済性という自傷行為のイメージが構築され，行為者はゲーム的な比喩で非日常的な世界を創出して主体性のギャップを調和させると思われた。

P-4 持続可能なまちづくりを意識した「共同作業」による向社会的感情（メンバリズム）に関する研究

小木貢(東京都市大学大学院環境情報学研究科博士前期課程)・西山敏樹(東京都市大学大学院環境情報学研究科)

本研究は、持続可能なまちづくりに必要なメカニズムのうち、相互協力的な市民感情の醸成に着目する。とりわけ、まだ地域活動等に積極的に参加していない層（他人事層）が動き出す、端緒となるメカニズムの構築に焦点をあてる。先行研究と事前調査から、戦前の日本の農村で行われていた「共同作業」が向社会的感情を醸成してきた要素を、新たな地域活動として取り入れることで、そのようなメカニズムが構築できるという仮説を立てた。今回の調査では、既に地域貢献活動を行っている方（地域貢献層）を対象とし、半構造化インタビューを実施した。他人事層から地域貢献層に移行した端緒となった事例を、TEM（複線径路等至性モデリング）を使い分析し、仮説の適合性を明らかにした。また、補助的検討として、元々のパーソナリティ特性による影響を検討するため、Big Five 尺度（パーソナリティ特性の 5 因子モデル尺度）を用いた。

P-5 メディアを介した自殺情報への接触経験の実態調査

杉山陽香(中京大学大学院心理学研究科)・国広歌音(中京大学心理学部)・川島大輔(中京大学心理学部)

近年の若年者の自殺の傾向から，自殺予防の一つであるメディア対策は急務である。しかし，若者にとって身近な SNS 等のメディアによってどのようなる自殺関連情報に触れているのかは明らかにされていない。そこで，本研究では，様々なメディアを通じた自殺暴露経験の実態を探索的に明らかにすることを目的とした。調査は，質問紙を用いてデモグラフィック変数(年齢，性別，使用メディア，使用時間)，メディアを通じた自殺関連情報暴露体験の有無を聞いた後，自由記述にて詳しい内容ついて回答を得た。得られた結果をコード化し，内容分析した結果，14 の項目に分類された。結果より，メディアを通じて自発的に自殺関連情報を得ようとする行動が見られた。さらに，テレビや漫画といった従来のメディアからの暴露だけでなく，若者にとって身近な SNS，特に Twitter からの暴露が多く，その大半が意図的でない暴露であった。

P-6 働く母親たちはなぜインターネット・コミュニティにいるのか

尾石智美(九州大学大学院　統合新領域学府)・杉山高志(九州大学大学院　人間環境学府)

働く母親たちが集まるインターネット・コミュニティ(以下、IC とする)が存在する。近年、共働き家庭が増える一方で、女性側が家事や育児に費やす時間と男性側との差も指摘されており、仕事と家庭の両立に悩む女性が多いという報告もある。現代ではインターネット空間と対面空間が交錯し、人々の生活は両空間で営まれるようになってきている。働く母親たちは、すでに家庭、職場などの複数の対面の居場所を持っている。それにも関わらず、彼女たちは IC に集い、何をしているのであろうか。本調査は、日常的に IC に参加している成人 155 名を対象にした調査の中から、特に IC への訪問頻度の高い、働く母親たち数名の語りを用いる。IC だからこそ体験できることや感じること、対面と比較して IC だからこそ経験できたこと、対面にはないが IC にはあると思うことなどについて尋ね、特徴を分析した。

P-7 保育園 4 歳児クラスにおける保育者の共同注視としての「見守る」行為
大豆生田芽吹(玉川大学大学院脳科学研究科)

「見守る」は日本の保育者の特徴的なかかわりとして国内外で研究がなされてきたが、従来の研究では子どもの社会的能力の発達を促すこと等、その機能的側面のみが注目されがちであった。しかし、当の保育者たちはその教育的効果のみを意図して「見守る」かかわりをしてきたのだろうか。むしろ保育者は、子どもとのかかわりの中での共感や驚き、育ちへの喜びの中で「見守る」かかわりをしているのではないだろうか。本発表では、先行研究ではあまり注目されてこなかった「見守る」の共感的側面に注目し、私立保育園 4 歳児クラスとその担任保育者を対象としたフィールドワークを始めて数週間の間に見えてきたことの中間報告を行う。その中で、担任保育者のかかわりの特徴として、身をかがませたりして子どもと同じ目線で同じものや出来事を見る共同注視的な「見守る」行為が見られた。本発表では、この共同注視的な「見守る」行為に注目してその特徴を探った。

P-8 地域在住高齢者の Advance Care Planning に関わる要因の検討
建部智美(中京大学大学院)・川島大輔(中京大学心理学部)

超高齢多死社会の到来を目前に控えた日本では、人生の終焉（EOL：End-of-Life）をめぐる議論が活発化しており、家族や医療チームと話し合う Advance Care Planning（ACP）が推進されている。しかし自立的な生活を営む地域在住高齢者が、自身の EOL について家族や身近な人と話し合いたい、話し合いたくないと考える理由や関連要因は明らかでない。本研究では、地域高齢者の EOL への態度を活性化するための実践的ツール「ライフエンディング・ワーク（LEW)」の効果検証で収集した、EOL について身近な人と話し合いたい、話し合いたくないと考える理由についての自由記述回答を用いて内容分析を行った。その結果「遺された人を困らせないため」「話せる状況でないから」など 12 個のカテゴリが得られ、得られたカテゴリを用いてデモグラフィック変数や死生観、EOL への態度尺度などとの関連を検討した。結果を基に、地域在住高齢者の ACP に関連する要因について考察する。

P-9 東京レインボープライドに継続的に参与した青年達の経験－性的マイノリティのイベントに展望を持つまでの過程
門倉拓郎(帝京平成大学大学院臨床心理学研究科)・荘島幸子(帝京平成大学健康メディカル学部)

本研究では、国内最大級の性的マイノリティ関連イベントである東京レインボープライド 2022 において、ユーススタッフとして継続的に関わった青年たち（研究者を含む）の経験を明らかにすることが目的である。研究者自身もイベントにスタッフとして関わり、他のメンバーとともに 1 年にわたって経験を共有し、関係を構築した。研究者自身を含む 6 名の語りについて複線径路・等至性モデルによる分析を行い、青年たちが、東京レインボープライド 2022 に参加して良かったと思うまでの過程を描出した。青年の経験は「問題意識を持つ時期」、「団体で活動する時期」、「これからの活動に志を持つ時期」の 3 つの時期に区分された。青年が活動を始める要因には教育や人との関わりが関係しており、東京レインボープライドへ参加することで性的マイノリティへの問題意識を強める可能性、青年期にレインボープライドに参加することの意味について考察した。

P-10 ひきこもり者の対話的自己の検討 ―社会と再接続する分岐点に焦点を当てて―
廣瀬太介(立命館大学人間科学研究科)

2023 年 3 月 31 日に公表された「こども・若者の意識と生活に関する調査」では、ひきこもり者は推定 146 万人いると報告されている。労働人口のうちの 50 人に 1 人が社会的にひきこもっているということは、個人の問題として考えるのではなく、社会・文化の問題を個人が代表していると考える必要があると思われる。そこで、本研究では、20 代男性が社会から離脱してひきこもり生活を送った後に社会に再接続するまでの心理面接の事例を文化心理学に基づく複線径路等至性モデルによって分析した結果を提示する。そして、分析によって抽出された 4 つの分岐点での対話的自己に焦点を当てることで、社会に再接続する時にどのように選択したかを検討する。

P-11 オートエスノグラフィーを用いた博士論文の作成と指導に関する対話的オートエスノグラフィー
濱名潔(学校法人あけぼの学院認定こども園武庫愛の園幼稚園)・中坪史典(広島大学大学院人間社会科学研究科)・加藤望(名古屋学芸大学ヒューマンケア学部)

本研究の目的は，発表者らがオートエスノグラフィーを用いた博士論文の作成と指導に関する経験において，どのような社会や文化を有していたのかを院生と指導教員のそれぞれの立場から明らかにすることである。発表者らは博士論文の執筆終了後に対話的オートエスノグラフィーを行い，院生と指導教員の立場から語られた社会や文化を記述し考察した。結果，博士論文の作成と指導の過程において，院生と指導教員は副指導教員の質的研究に対する理解，所属講座の学位論文に対する慣例，オートエスノグラフィーだからこそ求められるクオリティと拘り，未知の指導などの点において困難さと葛藤が生じていることが明らかになった。本研究は保育学会研究倫理ガイドブックを基に倫理的配慮を行った。

P-12 中国の「儺（ノウ)」を例として郷土芸能の後継者についての検討
曽佳荷(立命館大学大学院人間科学研究科)・川野健治(立命館大学総合心理学部)

「儺」とは、疫病や邪気を払う儀式である。そのため、人々は平安を求め、神々や伝説上の生き物等をかたどった儺面という仮面を被り、大儺の儀式を行っていた。人々は「儺面は神の化身であり、災厄を祓う力を宿している」と信じている。現在中国南豊県の山間僻地の村里は旧暦の新年から半月ほど舞い踊っているが、実際には人びとの目に触れることはほとんどない。学歴社会だと言われている中国の若い世代は学業を通じて都市にいく一方で、誰が引き継けるのか。田舎に残った若い世代は経済的な理由でざるを得なくて外地勤務するのも稀ではないが、なぜ毎年彼らは「儺」のために欠勤し、帰ってくるだろう。これらの疑問を持ちながら、現地に行き、「儺」と共に生きてきた 60 代の夫婦にインタビュウーを実施した。「儺」は人々にとってどんなものであるか。長年にわたり、「儺」を続けられる理由を明らかにすることで、「儺」と若い世代の関係について考察した。

P-13 体育会アスリートがキャリア決定に至るプロセスの検討 ――複線径路等至性モデリングを用いて――

堀江貴久子(京都産業大学)

一般的に、体育会に所属している学生は、「体育会所属の学生は就職に有利だ」というイメージを持たれがちである。ところが、彼らは練習や大会出場など、多くの時間をスポーツに注いでいるため、一般の学生と同様の時間十分な時間を、就職活動にさけるわけではない。大学生アスリートが、どのようにキャリアの選択をしていくのか、複線径路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA)を理論的基盤とする複線径路等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling: TEM)を用いる。非可逆的な時間の流れの中で、大学入学および体育会所属決定から就職活動終結まで、アスリートとして生きる学生の進路の多様性と複線性を描く。中でも、シモンドンの提唱する概念である展結（Transduction）を用い、大学生アスリートが就職活動を経験する中で、どのように価値観を展結してきたのかを、インタビューデータの分析を通して紐解く。

P-14 タイ中部における高齢者リハビリテーションの人類学的研究

岩下夏岐(総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻)

本研究の目的は、タイ中部にある通所型の高齢者リハビリテーションセンター（以下、デイケア）において、利用者である高齢者やケアスタッフ等、デイケアに集う人々によって作られるコミュニティが、リハビリテーションの効果にどのような影響をもたらしているのか、文化人類学的手法を用いて明らかにすることである。報告者は 2022 年 4 月から約 1 年間、デイケアで助手として働きながら参与観察と半構造化面接を行った。結果、以下の点が明らかになった。第一に、高齢者はデイケアを私たちの学校、家と呼び、彼らにとってデイケアが健康増進と共に社会交流の場であることが明らかになった。第二に、デイケアに集う人々の関係性は状況に応じて擬似的な家族のようにみえた。第三に、そうした特性を有する場で人々が望む健康とは、従来の健康と病気といった二項対立的な要素をもつ概念とは異なるように思われた。本発表ではこれら結果と今後の課題について発表する。

P-15 各アタッチメントスタイルの対象者が築いた重要他者との関係性と関係性を経て形作られる幸福感の様相

瀬々彩香(別府大学大学院文学研究科臨床心理学専攻)・川崎隆(別府大学)

本研究では，母親，父親，友人，恋人など生涯出会う重要他者とのアタッチメントスタイル(以下 AS)が主観的幸福感に及ぼす影響について探索的に検討することとする。ECR-RS（古村ら，2016）を使用して AS の連続性を全安定型，1 人のみ安定型，全拒絶型，全恐れ型に分類し，各群において主観的幸福感がその群の平均より高い対象者 5 名(大学生 4 名，社会人 1 名)を選出し，インタビュー調査を行った。本研究では，インタビューガイドにアダルトアタッチメントインタビュー(上野，2010)を援用し，幼少期からの重要他者との関係性を辿ることで彼ら彼女らが高い幸福感を得ることに繋がった過程や，その関わりを経て形作られた幸福感の様相について，タイプ別に検討することを目的とした。分析としては，インタビューで得られた逐語から，重要他者との関係性や幸福感に関する語りを抜粋し，AS と幸福感が相互に影響する様相について考察する。

ポスター発表１日目（優秀賞選考セッション）AS368

P-16 知的障害を伴う ASD 児の「エコラリア」に教師はどのように対処するか：支援場面の相互行為分析

緒方亜文(東京大学大学院教育学研究科)

本発表では、知的障害を伴う ASD 児の、一見して単なるおうむ返しに見える「エコラリア」に対して教師がどのように対処しているのかを明らかにする。発表者の所属する大学院の倫理審査委員会の承認を受け、全ての参加者から書面にて同意を得て調査を実施した。中学校特別支援学級の職業・家庭科の授業を 10 時間にわたり録画し、知的障害を伴う ASD 児と 1 名の教師のかかわりに焦点を当て、指示の次の順番がおうむ返しである事例を抽出して相互行為分析を行った。その結果、教師はおうむ返しを身体や道具と関連づけて理解し、言語形式に問題があっても修復を開始するとは限らなかった。特に、未だ応答が生じていないものと見なしてそのまま待つこと、対象を認識したことを肯定的に評価した上で限定的に修復を開始するといった実践上の特徴が見られた。つまり教師は、おうむ返しそのものではなく生徒の活動への理解をその都度見出すことでかかわり方を選択していた。

P-17 ひとり親家庭の父親が支援に繋がるプロセス -父親の援助要請に注目して-

中山優美(立教大学学生相談所)・山田哲子(立教大学現代心理学部)

父子家庭は「男らしさ」のジェンダー観から，援助に繋がりにくいことが指摘されている（尾形，2011)。そこで本研究では，ひとり親家庭の父親が当事者支援団体に繋がるプロセスを明らかにするため，配偶者と死別した父親 4 名にインタビュー調査を行った。分析は複線径路等至性アプローチを用いた。その結果，父親は【死別】後,【子育てや家事の困難さを感じる】が， 母子家庭が前提の制度設定によって【公的な支援制度を利用できない】体験をする。そこで，ネットや人づてに【ひとり親家庭に関する団体と出会】い,【ひとり親家庭に関する団体と繋がる】ことで同じ立場の父親・母親と話すことで「救われた」と感じていた。「援助要請する， される」という関係性の認識ではなく,「支援しあう関係を作り上げていく」という支援団体との関わりが, 困っていても援助要請を行うことが難しいひとり親の父親の支援への繋がりやすさに影響する可能性が示唆された。

P-18 自己の可変性信念に関する自由記述のペンタド分析

笠原千秋(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻)・綾城初穂(駒沢女子大学心理学類)・平野真理(お茶の水女子大学生活科学部心理学科)

自己が変容するか否かにかかわる認識のことを、自己の可変性信念という（笠原・平野，2018)。本研究では、大学生 457 名を対象にこの信念について自由記述式で回答を求め、その結果を検討した。回答を自己の変容に関する動機の説明と捉え、ペンタド（Burke, 1969）の枠組みを利用して、行為・行為者・媒体・場面・意図の 5 つの要素に分けてカテゴリー化を行った結果、記述は大きく 4 つの行為に分類できることが見出された。諸要素間の結びつき（比率）を検討するために、KH Coder（樋口, 2020）の共起ネットワークの手法を用いて分析した結果、「自分は変えられる」という行為は個人の主体性・関係性を、「自分は変わらない」という行為は個人の普遍性を、「自分は変わる」という行為はそれらの中間を、「自分は変えられない」という行為は個人の属性を、それぞれ伴って説明されやすいことが示唆された。本研究は研究倫理委員会の審査を経て実施された。

P-19 性格の変容を促す要因の検討

齋藤優希(立命館大学人間科学研究科)・サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)

本研究では、人が非可逆的な時間の中でどのように性格の変容を捉え、また他者評価がどのように自己認知に影響を及ぼし性格の変容に影響を与えるかについて質的方法を用いて検討する。性格には「1人称性格」「2人称性格」「3 人称性格」という3つの異なる視点があるとし、多様性をすくいとるモデルであるモード性格論(サトウ・渡邊,2011)に沿って考察し、それぞれの人称的性格がどのように関わりあうかを明らかにする。また、渡邊(2010)は質的方法を通じて、自分や自分と関係のある他者の性格に関するナラティブを丁寧に追うことで、一人称的・二人称的視点から見える性格、そして性格概念に内包された豊富なメタファーなど、本来の意味での性格を理解することが可能になると述べている。本研究では、個人と性格についての語りを TEM を用いて明らかにし、個人の経験や他者評価と性格との関りを考察し複線性を見ることを目指す。

P-20 身体的(不)協応関係における、人々と場の生成性の検討―浦河べてるの家でのオートエスノグラフィを通して―

石渡美穂子(立教大学文学研究科)

2000 年代後半以降、人文社会科学の様々な分野において「情動論的転回 the affective turn」という学的潮流が生まれつつある。人間の身体を、「他の身体とのたえまない“アフェクト”の関係－相互的に作用・影響し合う関係－の中にある(西井・箭内, 2020, p. 1)」ものとして捉える世界観は、人間の身体的な協応・不協応関係(高木, 2020)が、いかに彼らの生きる世界および人々のあり方を再生産・生産するのかについて示唆を与えてくれる。本発表は、精神障がいのある人々を中心とするコミュニティ「浦河べてるの家」に対するオートエスノグラフィックな記述を通して、実践に関わる人々の身体的な(不)協応関係がいかにその場および人々のあり方を再生産あるいは生成変化させるのかについて検討する。

P-21 東日本大震災時、放射能による制限と保育者の葛藤のプロセス

鈴木美枝子(名古屋女子大学短期大学部/立命館大学人間科学研究科)

東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故は、生活環境や保育現場に多大な影響を及ぼした。これまで誰も経験したことがない地域や保育環境の急激な変容や子どもや保護者への対応、その中で、日々の保育を継続していくという状況が生じた。更に、先の見えなさや保護者の意向や不安への対応なども、大きく保育者にかかってきた(大宮, 2011)。保育者は、「保育者としての私」と「被災者としての私」の『二重性』の役割を持たざるを得なかった。本研究では、このような急激な生活の変化の中で、保育者自身が「保育者としての私」と「被災者としての私」とが、葛藤しながら選択していくプロセスと、選択する場面における価値観について発生の三層モデル(Three Layers Model of Gensesis:TLMG)を手がかりに明らかにしていく。なお、倫理的配慮については、いわき短期大学研究倫理審査委員会の承認の元、研究協力者から同意を得た上で研究を実施した。

ポスター発表１日目（一般セッション）AS368

P-22 高齢未婚女性における自己解決の背景要因：テーマティック・アナリシスによる分析

村山陽(東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加とヘルシーエイジング研究チーム)・山崎幸子(文京学院大学人間学部)・長谷部雅美(聖学院大学心理福祉学部)・山口淳(東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加とヘルシーエイジング研究チーム)・小林江里香(東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加とヘルシーエイジング研究チーム)

単身中高年者を対象にした郵送調査(Murayama et al,2022)において,女性は自分一人で問題に取組む意識「自己解決」が援助要請を抑制する傾向が認められた。本研究では高齢未婚女性の語りから,自己解決の意識の背景要因を検証する。2019 年 8-10 月に千葉県 A 市内の未婚女性 5 人(平均年齢 80.0±4.5 歳)に半構造化面接を行い,援助要請経験や考え等を尋ねた。分析にはテーマティック・アナリシスを用いた。その結果,対象者全員に自己解決の語りが認められた。語りの類似性と相違性を比較したところ 4 つのテーマ（家族の面倒を見る責任,人に迷惑をかけてはいけないという価値観,身近な家族との死別による孤立,希薄な地縁のつながり,被援助の失敗経験)が抽出された。成人期から中年期にかけて親の世話と自身の経済的自立が求められる中で職場や地域との十分なつながりが築けず、さらに親の死や兄弟との疎遠により自己解決せざるを得ない状況に陥っている可能性が示された。

P-23 住民主体の震災復興とは何か？茨城県大洗町を事例に

李フシン(日本学術振興会・茨城大学地球・地域環境共創機構)

災害復興においては、地域住民が行政依存から脱却し、主体的に震災復興、防災、地域振興を向上させるような取り組みが提唱されてきた。しかし、少子高齢化、人口流出、産業の衰退、そしてコロナ禍によって、被災地は山積みの課題を抱えている。住民主体の復興を達成することがますます困難となっている。発表者は 2012 年 10 月から東日本大震災の被災地である茨城県大洗町に通い、震災復興の過程に関するフィールドワークを行ってきた。本発表では、長期間の研究調査を通じて、大洗町の住民の語りを中心に、地域の課題や取り組みの変容を報告する。また、「風評被害」、「津波防災」、「地域振興」、「コロナ禍」といったキーワードを通じて、大洗町の住民が自ら課題の解決を見出す取り組みやそのプロセスを紹介する。最後に、感染症対策を含め、今後の災害に対応できる地域社会の復興の在り方について提言する。

P-24 災害という文脈における地域への愛着に関する一考察

河本尋子(常葉大学社会環境学部)

本研究は、私たちが地域に対して感じている愛着を、テーマとして取り上げるものである。地域への愛着がどのような要素から構成されるのかを明らかにすることを目指す。また、その愛着（の構成要素）と、災害という文脈における地域への愛着とを比較し、両者の共通点・類似点・相違点等を明らかにすることを目的としている。安・青木（2022）によれば、地域への愛着は、個人属性の他、物理的要因、社会的要因、継承意識により高まるとされる。本研究では、被災経験のあるかたを対象としたインタビュー調査をとおして、災害という文脈における地域への愛着が、既往研究成果とどのように関係しているかを検討することとした。

本研究の倫理的配慮として、調査対象者に、研究目的・方法・期待する結果と協力に伴う利益・不利益等について口頭及び文書により事前説明し、同意が得られた方にご協力いただいた。

P-25 子どもの育ちを伝えるための翻訳ー日本語母語話者教師と日本語非母語話者保護者を「むすぶ」もの語りー

市川章子(一橋大学大学院言語社会研究科)・神崎真実(立命館グローバル・イノベーション研究機構)

日本語学習者の増加を受けて、教育現場では保護者あて文書を外国語に翻訳する必要性が増している。教師が保護者に向けて作成する文書は、単なる情報伝達ではなく、児童生徒の成長を伝える「もの語り」、すなわち「経験を組織化し、意味づける行為」(やまだ,2021)であると考えられる。やさしい日本語での情報発信も広まりつつあるが、日本語非母語話者の保護者に対しては、日本語から外国語へ翻訳した情報発信が必要になる。教師から翻訳者へ翻訳者から教師へ、そして教師と翻訳者を行き来したのち、最終的に保護者に渡る文書は、翻訳の過程で対象言語に合わせていくつかの変更をよぎなくされる。本発表では、保護者あての文書で使用頻度の高い動詞や文型(過去形や可能形)を提示し、日本語母語話者教師と日本語非母語話者保護者を「むすぶ」ためのもの語りを生成する翻訳のあり方について検討する。

P-26 イラストレーターの制作場面からみる SNS における評判獲得とオリジナリティに関する考察

松浦李恵(宝塚大学)

近年イラストレーターの活動は多岐に渡り，特に SNS 上での発信が増えつつある．そしてファンからのイラストに対する反応はイラストレーターとしての評価や達成感につながることが多い．また，イラストコミュニティには流行の絵柄や描き方などがあり，イラストレーターは自身のイラストに意識的に反映させることによって多くの反応を得ることにつなげていることもある．このように評判を得ることを意識している一方で，自身のクリエイティビティを意識した制作も行なわれていたりと，イラストを描くことには様々な意識が入り混じる．そこで本研究は，イラスト制作場面のビデオ観察と得られた映像データを用いてリフレクションインタビューを実施し，イラストレーターの具体的な創作や活動プロセスの様子を具体的に観察する．そして，さまざまな意図が複雑に混ざり合う制作過程を明らかにし，イラストの創作プロセスのケーススタディとして考察する．

P-27 地域の図書館以外の公共施設における絵本環境の社会的役割とは何か ―公民館および児童館などの職員へのインタビュー調査から考える―

仲本美央(白梅学園大学子ども学部)・小屋美香(育英短期大学保育学科)・三宅美千代(千葉敬愛短期大学現代子ども学科)

本研究は地域における図書館以外の公共施設である公民館および児童館などの絵本環境に着目し、全国 20 施設の職員へのインタビュー調査からその実態を明らかにするとともに社会的役割を検討していくことを目的とした。白梅学園大学・短期大学倫理審査委員会の承認(申請番号:202239)を得た上で、公民館および児童館などにおいて絵本環境を整備することの目的、サービスの提供方法、利用者の状況、社会的役割、現状の課題などの調査を行った。調査結果の分析方法は M-GTA を採用した。その結果、図書館のように絵本環境を貸し出しや読むことを推進するための場と捉えるのではなく、地域の実情に即して多様な人々がつながる環境づくりを目指し、絵本や児童書を活用した活動を展開するための工夫や配慮をしながら地域の活性化を図っていることを明らかにした。※本研究は、公益財団法人前川財団「2022 年度家庭・地域教育助成」を受けたものである。

P-28 職業に呼ばれる経験のバリエーション
鈴木聡志(東京農業大学教職・学術情報課程)

何かに呼ばれて職業を決める人がいる。この経験を「職業に呼ばれる経験」と呼ぶことにする。この経験を経て就いた職業は天職と呼べる。本研究の目的は職業に呼ばれる経験とはどのようなものかを探ることである。調査参加者は 18 歳以上の 864 人で調査会社によって調査が行われた。職業に呼ばれる経験をしたと判断された参加者のうち，自由記述の質問に回答した 100 人の回答が分析された。カテゴリー分析で生成されたカテゴリー「天職の知り方」と「天職に就いた経緯」の組み合わせで経験のバリエーションを捉えた。調査参加者の経験は，半能動的に天職を知り自覚的に天職に就いた場合（A タイプ）と，受動的に天職を知り偶然に天職に就いた場合（B タイプ）が多かった。中学までに天職を知った人は A タイプが，学業終了以降に天職を知った人は B タイプが多かった。職業に呼ばれる経験はキャリア理論の偶発理論を支持すると考えられる。

P-29 看護系大学 3 年生の「患者に寄り添う看護」の概念化に関する考察
石井俊行(兵庫大学看護学部)

本研究は、各領域実習を終えた看護系大学 3 年生の「患者に寄り添う看護」をどのように考え概念化したのかを明らかにすることを目的とした。A 大学研究倫理委員会の承認を得た後、対象学生 5 名の同意を得て、グループインタビューより分析を行った。結果:「患者とのコミュニケーション場面」、「日常生活への援助場面」、「実践につなげる看護過程の場面」、「患者との相互関係」の 4 カテゴリーが抽出された。考察:学生は患者とのコミュニケーションでは態度と傾聴の重要性を理解することにつながり、健康障害で治療に向き合う患者を理解することも寄り添う看護の要因と捉えていた。また、患者の不安を緩和する、側に居て精神面でも支えていくこと、辛さや苦しみからその人らしさを理解して、相手の身になって考える大切さなどを「患者に寄り添う看護」につながると考えていることが明らかとなった。

P-30 表現されたものが生き延びる場――小学校の日々への参与から問う学校・校区理解と表現
木下寛子(九州大学大学院人間環境学研究院)

本研究では、生活世界における「表現」と「場所の理解」の関係をある小学校への参与から問いたい。学校とその周辺地域（校区等）には、基本情報や教育目標をまとめた「要覧」から根拠の不確かな「評判・噂」まで多種多様な理解があり、それらの内容は誰かの判断・行動の手掛かりになる。また学校の日々には目立たない理解がその都度展開し、その時々の先生や子どもの行為を支えている。これに対して「表現」が学校や地域をめぐって生じる時、そこに明らかになる理解は、特段日々の行為の支えにならず、誰かの判断や行動を導きもしない。本発表では、卒業式前の学校のいたるところで始まる「記念」（南・澤田, 1991）のための「表現」に注目し、時に学校・地域のどのような理解がいかにそこに生起するのか、その成り行きを明らかにする。なおここで注目する「表現」とは、「絵を描き、歌い、踊る」ような、小学校の日々では決して地位が低くない「表現」を指す。

ポスター発表 2 日目（一般セッション）AS358

P-31 被災した女性が語るコミュニティとレジリエンスからの考察

森川佳恵(立命館大学大学院人間科学研究科)・松村美和(立命館大学大学院人間科学研究科)・曽佳荷(立命館大学大学院人間科学研究科)・斎藤優希(立命館大学大学院人間科学研究科)

【目的】本研究の目的は、災害によって家族や知人を亡くしたり、大切なものを失い、つながりが途絶えてしまった被災者の心理的変化・行動変容を明らかにすることである。【方法】関連資料の収集やオンラインでの事前インタビューを行ったのち、2023 年 3 月、大槌町に赴き自らも被災経験を持ちながら復興に尽力されている女性にインタビューを行った。当人の許可を得て録音した。【結果と考察】録音したインタビューをテクストに書き起こし、テーマティック・アナリシス法により分析した。その結果、「生き抜く力」「信じる力」「民謡の力」「自利利他」「次世代への期待」「コミュニティの力」「感謝の気持ち」「見えない力」「他者のためにできること」の 9 つのコードが抽出された。心が回復することにコミュニティでのつながりが大切であることが明らかになったことで、地域住民のレジリエンス力と復興について考察した。

P-32 空気を読みすぎる「生きづらさ」とビジュアル・オートエスノグラフィー

荒木奈美(札幌大学地域共創学群)

私は 24 年間の長い教師生活の中で常に、簡単には言葉にしがたい「生きづらさ」というべき感覚をいつもどこかに引きずったまま生きてきた。この「生きづらさ」の正体を形にすべくこれまでさまざまな方法で形にしようとしてきたが、どれもしっくり来ず研究は暗礁に乗り上げていた。主観の客観化という矛盾に阻まれ自身の無力さを感じるばかりだったが、その中で偶然出会ったのが、今回の発表の中心となる「ビジュアル・オートエスノグラフィー」である。私が自身の思考上に抱え込んだ「生きづらさ」はそもそも言葉にしがたいものであり、だからこそ芸術的な方法が有効であるということを、私は自分自身の創作実践の中で実感した。ポスター発表では、その理論的根拠をリクール(1985)、クランディニン(2000)の概念に言葉を借りて説明した上で、何よりも作品を見て感じていただき、同じような「生きづらさ」を感じている先生や研究者の方々と繋がりたいと考えている。

P-33 視覚素材を用いた仮想実験による In-Depth Interviewー山脈的自己モデルによる分析

香曽我部琢(宮城教育大学)

In-Depth Interview は、インタビュアーとインタビューイーの 1 対 1 の対話によって行われるインタビューの方法である。その特徴として、対話を深めることによって顕在化している意識や価値観だけでなく、投影法やラダリング法などを用いて潜在的な意識や価値観、深層心理まで深堀りできる点にある。投影法には、言語連想法、文章完成法、擬人化法、描画法などの方法があり、さらに連想やメタファー（metaphor, 隠喩）と使うことでより深い心理を掘り起こすことが可能となる。本研究では、視覚素材を用いた仮想実験を刺激素材とした In-Depth Interview によって得たデータと通常の半構造化インタビューによってサンプリングした文字データを、山脈的自己モデルを用いて分析し、その効果について明らかにする。

P-34 インクルーシブ保育における集団性とは

岡田美笛(桜花学園大学大学院　人間文化研究科人間科学専攻)・勝浦眞仁(同志社女子大学現代社会学部)

近年、子どもの意見を反映する保育実践が積み重ねられ、多様な子どもの意見表明権を踏まえて、保育参加の権利を尊重することがインクルーシブ保育の特徴であると浜谷（2023）は述べている。
一方で、従来の保育との葛藤を感じながら試行錯誤する保育者もいる。名倉(2018）が指摘するように、幼児の集団づくりの実践は客観的な評価が難しいことから、閉ざされた環境の中で自己流の保育を行い、管理的な幼児集団づくりを改善する余地のない保育者も存在する。保育者主導の集団づくりからインクルーシブ保育への転換していくうえで、集団性とは何かを問い直す必要はないだろうか。
本発表では、5 歳児クラスの「開かれた集団」と「閉ざされた集団」の 2 場面に焦点を当て、保育当事者である筆者が自己エスノグラフィーの手法を用いてゆるやかな集団性について考察を行う。そこから、インクルーシブ保育における子どもの権利の尊重のために必要なことを問う。

P-35 和菓子の復活から捉えるものの物語的自己同一性：失われた味を巡る記憶と記録を通じた修復的実践

竹内一真(多摩大学グローバルスタディーズ学部)

食べ物は腐敗の関係から当初の味や風味，形を長きにわたって留めるのは難しい。そのため，ひとたび世代断絶が起きた和菓子を復活させようとしら，その和菓子がなぜ先行世代のものと同一のものと言えるのかという「ものの物語的同一性」の再構築は難しい課題となる。本研究では世代断絶が起こった上で和菓子を復活させた職人 6 人を研究協力者としてライフストーリーインタビューを行った。分析を行った結果，大きく二つのことが示された。一つ目が先行世代との対話の仕方である。記憶を有する先行世代がいる場合は，和菓子の記憶を直接的な対話を通じて再構築する。一方，記録しかない場合は，文献を介した仮想的な対話を通じて再構築を行うことが示された。二つ目が和菓子のもつ物語である。途絶えた和菓子は途絶えた理由がある。その途絶えた理由を埋め，現代に適応させるために和菓子の有する物語を部分的に組み替えて再構築することが示された。

P-36 幼稚園のある 5 歳児の「つまずき」場面における対処とそれに対する保育者の援助：5 クラスのクラス替えが実施される園での調査から

松原未季(日本学術振興会特別研究員 PD・東京大学)

本発表では、全体活動や見通しがない場面で揺らぎやすいリョウコ（仮名）の「つまずき」場面に焦点を当てて、幼稚園 5 歳児の「つまずき」場面への対処とそれを支える保育者の援助を明らかにすることを目的とする。
「つまずき」場面の参観と保育者へのインタビューを行った。リョウコは、1 学期では、保育者に頼ったり、保育室から飛び出したり、癇癪を起こすことで対処した。保育者は、リョウコに、集団での遊びや活動を通して、「クラスでの時間」に魅力を感じられるようにしたり、他児にも協力を求めたり、「お名前呼び」の中でリョウコにクイズをさせてリョウコの良さがクラスに伝わるようにしていた。2、3 学期は保育者は見守ることが多かったが、リョウコは「つまずき」場面では自分が困ったことを言語化して保育者や他児に自ら解決を求めるようになったり、仲間関係やクラスで居場所を見出した結果、全体活動や行事への取り組みが積極的になったりした。

P-37 「話す」「聞く」はどのように構成されるのか：幼小接続期の話し合い場面の分析
岸野麻衣(福井大学連合教職大学院)

幼稚園・保育所・認定こども園等の幼児教育施設（以下，園とする）では，経験や思い・考えを言語化し，言葉の感覚や表現を豊かにすることが重要とされている。また小学校では，こうして育ってきた言葉を道具として用い，教科等での見方や考え方を働かせて学ぶことに向かっていく。園小とも話す・聞く活動が重要とされているが，その実態はかなり多様である。そこで本研究では，話し合い場面について園小での特徴を明らかにする。隣接する園小で２年間継続してフィールドワークを行い，５歳児クラスでの遊び後の振り返り場面と，翌年度１年生で生活科・国語・算数等での話し合い場面について，エピソードの質的な分析を行った。「今は聞くとき」など，話し手と聞き手の間の境界がくっきりと引かれる状況と，境界が緩やかでつぶやきがあふれる状況とが見られた。話し手と聞き手の関係の構成が「話す」「聞く」のありようを規定することが示唆された。

P-38 一人職場の対人援助職をエンパワーする力――産業保健師と養護教諭へのインタビューから――
稲嶺美祈(立命館大学総合心理学部)・川野健治(立命館大学総合心理学部)

一人職場の対人援助職者が働き続けるとき、どのような感覚を持ち、どのような力によってエンパワーされているのかを明らかにするのが目的である。本研究では、一人職場の対人援助職を「学校や企業などの職場内で、特定の立場の対人援助職が一人しかいないこと」と定義した。方法としては、産業保健師と養護教諭の２名を対象に半構造化面接を行い、Thematic Analysis（主題分析）を用いて分析した。その結果、一人職場の対人援助職者は「信念」にエンパワーされて働いていると考えられる。「信念」とは、自分の仕事が絶対に必要であるという信念あるいは被支援者に必ず寄り添うという信念のことである。また一人職場の対人援助職の特徴として、「周りとの関係性」の特殊さが挙げられる。一人職場であるために自分の影響力を発揮できず、実現したいこととの間で苦しむ場面があった一方で、そのような場面においても「信念」を貫き続ける姿勢が見られた。

P-39 WEB アンケートによる成人期発達障害者の親ときょうだいのやりとりの実態把握の試み
松熊亮(文教大学人間科学部)・大瀧玲子(東京都立大学人文社会学部)

本研究では，成人期発達障害者がいる家族のありようの実態把握のために自由記述を交えた WEB アンケートを行った。調査では成人期の発達障害のある子どもとそのきょうだいがいる親を対象に，障害のある子どもと家族の将来像に関するきょうだいとのやりとりの有無，ニーズや課題について尋ねた。障害者家族において「親なきあと」を見据えた将来の支援体制の準備は重要な課題であり，ケアの社会化が叫ばれて久しいものの，その整備は十分に追いついておらず，加えて親からの「親なきあと」の将来に関する相談自体もオープンに行われにくい可能性が指摘されている。また障害者のきょうだいは，自身のライフイベントを様々経験する一方で，成人期においても家族から影響を受けていることが指摘されており，障害者家族に対する包括的な視点が必要である。当日は結果から確認できる親ときょうだいのやりとりや，今回の WEB アンケートのデータの特徴などを検討する。

P-40 将来の時間的展望と主体的選択が生成されるプロセスに関する研究　－占い師と相談者のやり取りの分析－

大橋靖史(淑徳大学総合福祉学部)・田中元基(淑徳大学人文学部)

青年期から成人期への移行において、若者は将来の就職や恋愛など、さまざまな人生課題について展望し、主体的な選択を行うことが必要とされる。しかしながら、将来への展望が定まらず、自ら選択することをためらっている者も多くいることも事実である。こうした青年期の時間的展望の問題は、従来、本人のパーソナリティやアイデンティティ・ステイタスといった一種の内的属性として扱われることが多かったが、内的属性としてよりも、他者との関係の中で、変わり得る流動的なものとして捉えることも可能であろう。本発表では、人生の移行期にある大学生が占い師に自身の将来について占ってもらっている場面を録音・録画したデータをもとに、占う－占われるという関係の中で、相談者としての大学生が自身の人生課題についてどのように語り、主体的な選択をどのように行っているかを、ディスコース分析や会話分析の分析手法を用い、明らかにすることを試みる。

P-41 夫婦のアタッチメントニーズに関する共同生成ナラティブと社会文化的ディスコース

稲垣綾子(帝京大学文学部)

日本では男女地位格差がみられるが、その不平等感について疑義も呈されている。性別役割分業観の改善にむけ6割が夫婦家族間でのコミュニケーションの必要性を挙げている（内閣府，2023）が、日本の夫婦は東アジアの中で最も悩みを聴き、打ち明けることが苦手である（EASS，2006)。ある共働き夫婦の危機時に発動するアタッチメントニーズを話し合う構造化されたカップルセラピーセッションでの共同生成ナラティブとディスコースを検討したところ、甘えと遠慮の感情により意思疎通の困難がみられたが，仕事・家事育児の現実状況の共有と検討を通して，夫婦の近接性欲求と家庭内パートナーシップが高まる可能性が示唆された (Inagaki, 2023)。本研究では、在宅勤務の夫と専業主婦の妻のアタッチメントニーズの共同生成ナラティブを検討し、共働き夫婦と片働き夫婦の社会文化的ディスコースの比較検討を行う。本研究は所属大学倫理審査委員会の承認を得ている。

P-42 語り合いから探る子育て中の母親の「変わり目」:「変わる」ことをめぐる体験とは

藤井真樹(名古屋学芸大学ヒューマンケア学部)・勝浦眞仁(同志社女子大学現代社会学部)・町田奈緒士(名古屋大学ジェンダーダイバーシティーセンター)

乳幼児を育てている母親はその多くが育児不安を抱えていると言われている。そのため現在の子育て支援は、子どもの成長や子育ての喜びを保護者が実感できるように働きかけることや保護者同士の交流と学び合い等が中核であり、保護者の子育ての認識や養育行動にポジティブな変化が起きることが望まれるわけであるが、母親の認識や養育行動は容易に変化するものであろうか。我々は、こうした支援を目的とした場ではなくとも、いわば日常の生活世界において、母親が世界を見る目を新しくし前進していく契機となるような場を「変わり目」として着目する。「変わり目」として変化を捉えることによって、個体内部に閉じた変化ではなく、「知覚する身体」を介して世界が立ち現れるとする〈私－世界〉系における主体の体験そのものにアプローチできると考える。そこで本研究では、母親との語り合いから、子育ての「変わり目」で生じている体験について検討する。

P-43 社会共創プログラムの活動における国際共修による学習者の心理
福岡寿美子(流通科学大学人間社会学部)

近年、地方自治体と大学等による社会共創プログラムが実施される傾向にある。一方、今日の大学において、日本人学生と留学生が交流を通して、共に学ぶ国際共修が行われている。

本研究は、K 市と大学による観光を通じての地域活性化について、若者ならでは、留学生ならではの斬新なアイデアを提案することを目的とした社会共創プログラムにおいて、参加した日本人学生と中国人留学生とベトナム人留学生の心理が、約 5 か月間のフィールドワークや研究発表活動を通して、どのように変化したかを探るものである。

アンケート調査の自由記述とインタビュー調査（IC レコーダーで録音）を分析することによって、国際共修ならではの学習者の心理の変化について明らかにした。

P-44 アートベース・リサーチによるゼミ教育の可能性： 演劇手法を用いた異文化体験の探究を通して
岸磨貴子(明治大学国際日本学部)・青山征彦(成城大学)

本発表では、第一筆者のゼミで実施したアートベース・リサーチ（Art Based Reserach）を通して、学生がテーマについて「何を」「どのように」理解していくかを、実践のプロセスと振り返りデータから明らかにする。事例として異文化体験を演劇手法を用いて表現する活動を取り上げる。学生はグループになって自らの異文化体験の経験を共有し、そこから 1 つを選んだ。学生たちは、テーマとなった経験をした学生に詳細な聞き取り調査を行いシーンを作るが、実際に演じてみる中で新たな問いがうまれ、さらに聞き取りを行っていた。このようなプロセスによって、登場人物がなぜそのような気持ちや状況になったのかを掘り下げることができ、問題をメタ的に捉えるようになった。本発表では演劇手法を用いた事例を紹介するが、ダンス、ビジュアルアート、音楽などを使った ABR と比較しながら他の方法との違いについても論じる。

P-45 子どもとの関係構築プロセスの可視化による保育者の意識変容とは(4)　ー3 歳児との関係構築の実相に着目してー
上村晶(桜花学園大学保育学部)・

本研究の目的は、TEM(サトウ 2019)を援用した保育者と子どもの関係構築プロセスを可視化する 2 つの取組を通して､3 歳児とわかり合おうとする若手保育者の意識がどのように変化したかを明らかにすることである。1 名の若手保育者へ Parallel-TEM(上村 2018)を用いた協同的可視化(第 1 段階)・自律的可視化(第 2 段階)の取組を 2 ヶ月に 1 度の頻度で 2 年間実施した後、両取組の比較や意識の推移について半構造化インタビューを行い、SCAT(大谷 2019)と TEM で可視化・分析した。その結果、特に若手保育者は保育外業務・職員関係などの多様な外部環境の影響が大きいため、わかり合おうとする意識を涵養するためには組織的・重層的に支える必要性が示唆された。また、特に自律的可視化(第 2 段階)は、わかり合おうとする意識の確度がより鮮明になり他児との関係構築にも波及する可能性があること、他者との対話により多様な視点を獲得・拡充することが見出された。

ポスター発表 2 日目（一般セッション）AS368

P-46 発達障害の親の会に対するペアレント・トレーニングの効果

鰺坂誠之(大阪公立大学高専)・池田友美(摂南大学看護学部)・古川恵美(兵庫県立大学看護学部)

発達障害のある子どもをもつ親の会に実施するペアレント・トレーニングの効果を検証することを目的とした。日本ペアレント・トレーニング研究会が開発した基本プラットホームを基に全 6 回で実施した。実施前後に子どもの行動チェックリスト（Child Behavior Checklist：CBCL）を用いて、発達障害のある児 5 名（男児：10-14 歳/4 名、女児：13 歳/1 名）の保護者に対し評価を求めた。とくに上位尺度で臨床域を超える児が多いことが明らかとなった。また、内向尺度が外向尺度よりも高い場合において不登校の児がみられた。一方、外向尺度が高い場合には水泳やバレエなどのスポーツが得意な児が含まれていた。終了後、「頑張りすぎず続けたい」「ロールプレイが効果的であった」「25%ルール、CCQ を継続して使いたい」等が語られ、『本人の不適応行動に対応すること』や『本人の発達障害のことであなた自身を責めることを減らす』といった項目で自信度があがっていた。

P-47 初任者スクールカウンセラーのリアリティショックを通じた職業的アイデンティティの発達：QUAM を援用した 1 事例の分析

田中寿夫(淑徳大学総合福祉学部)・神信人(淑徳大学総合福祉学部)・我謝昌樹(淑徳大学心理臨床センター)

本研究では、初任者スクールカウンセラー（小学校勤務、経験 1 年未満、女性 1 名）のリアリティショックを通じた職業的発達プロセスについて検討した。インタビュー内容を逐語化し、対話的自己論に基づく分析法である QUAM(Aveling et al, 2014)を援用して分析した。その結果、就職後数カ月間、大学院で学んだ知識や経験が現場で通じないことに衝撃を受け自信を見失うなど【見えなくなる私】が強かった。その後、「同業職の先輩や養護教諭からの支えとなる声」に触れる中で【ひとりではない私】が強まり、さらに「教諭達の真に子どもを思う気持ちが伝わる声」も聴こえてきたことで、職種を超えて同じ思いを持っていることに共振する基盤となる【支援信念としての私】が生じていた。そして【一歩踏み出そうとする私】との自己内対話が深まる結果、最終的に教諭との連携を前提に自らの専門性が明確化された【この場で働く心理専門職としての私】が生まれていた。

P-48 超小型人工衛星開発におけるコミュニティの質的研究（1）

小池星多(東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科)

人工衛星は，これまで国家や大企業が独占して巨額の資金を使い，長期間かけて開発，打ち上げ，運用をしてきたが，最近ではインターネットによる情報流通，安価なマイコンなどの発達，打ち上げ費用の低価格化で，大学，民間団体などが，10cm 角の立方体の大きさの超小型人工衛星を，民生部品を使って安価，短期間で開発，打ち上げ，運用できるようになり，「宇宙の民主化」が進んでいる．本研究は，これまで超小型人工衛星の開発経験がまったくなく，また理科系ではない著者らが，大学の研究室，高専，民間団体，アマチュア無線家，地域住民などの超小型人工衛星に関わるコミュニティに参加，越境してネットワークを築きながら東京都市大学の超小型人工衛星「TCU-01」を開発するプロセスを自ら実践し，コミュニティの関係性を記述する．そして，超小型衛星のテクノロジーをコミュニティの関係性の産物として捉え直す.

P-49 Auto-TEM の表現に写真を用いる提案-コスプレをフィールドに-

福山未智(立命館大学人間科学研究科)・サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)

本研究はマンガ等に登場するキャラクター達に扮して遊ぶ「コスプレ」という行為をフィールドとして、筆頭発表者の 13 年のコスプレ経験を用いてオートエスノグラフィーと TEM（Trajectory Equifinality Modeling：複線径路等至性モデリング）の融合である Auto-TEM を作成し、遊び続けることの発達プロセスを明らかにすることを目指したものである。

Auto-TEM を作成するにあたって重要となることは経験の客体化である。本研究では実際に撮影された約 5 万枚のコスプレ写真を用いて客体化を行い、Auto-TEM を作成した。

写真データは 2 種類の表にまとめた後、Auto-TEM 作成のための資料として用いたが、本発表ではその Auto-TEM 自体に写真を融合することを提案する。

TEM は人の経験を二次元のモデルとしてあらわしたものであるが、そこに実際の写真を掲載することにより、これまでよりも経験の質的な時間の経過を示すことが可能になるのではないか、と考える。

P-50 Digital Transformation（DX）へのとある旅行業者管理部門従業員の認識－ストレス予防の観点からの半構造化面接による研究－

長内優樹(合同会社セカンダリー / Secondary, LLC.)

本研究は、DX 化により懸念される従業員のストレスについて具体的に把握し、その予防のための施策を考案するための基礎的知見を得ることを目的とした。旅行会社の管理部門に勤務する 33 歳の男性 1 名を調査協力者とした。システムの保守・管理業務を担当していた。調査時期は、2021 年 2 月であった。半構造化面接により、「普段している業務」、「周囲の人間関係のなかで DX という言葉を耳にしたことがあるか、どういう場面で耳にしたのか、それについて、どういう考えなのか」であったのかを主に問うた。結果として、調査が行われた時点では、DX への認知度や理解度が低く、類似概念との弁別も困難であるため、それによるストレスは見られず、DX に対しても、無関心であるといえた。そして、研究者との対話により、DX 化のプラス面とマイナス面に注目するに至っていたが、マイナスな印象（疑心や疑念）がプラスな印象よりも表出する傾向にあった。

P-51 里親子関係の構築と家族アイデンティティ形成プロセス――真実告知を経験した里母の語りに着目して――

中澤真理恵(立教大学大学院現代心理学研究科)・山田哲子(立教大学)

本研究は，真実告知（子どもに養子（里子）であると伝えること）を経験した養母（里母）9 名にインタビューを行い，養親子（里親子）が親子関係を構築し，家族アイデンティティを形成していくプロセスを検討することを目的とした。分析には複線径路等至性アプローチを用いた。

結果，【里子を家に迎え入れる時期】と【里子とともに生活する時期】にプロセスは分けられた。「真実告知」にも二段階のプロセスがあり，里子が幼い頃は〈里母から産まれていないことを伝え〉，子どもが青年期頃になると，〈里子になった経緯や実親についての詳細を話す〉段階へと移行していた。この二段階目の真実告知には成長した子の反応に対する里親の不安も大きく，その時点で親子関係や家族アイデンティティの果たす役割が大きいと考えられた。これらのプロセスを経て，里母の〔血の繋がりはなくても家族になれる〕という信念が強化されたことが示唆された。

P-52 障害者のきょうだいによる新たな親理解 ―成人期きょうだいの語り合いから

沖潮満里子(青山学院大学教育人間科学部)・丸吉南海(東京都立鹿本学園)

本研究は、成人期になった障害者のきょうだい（以下、きょうだい）が、子どもの頃を振り返る語り合いを通して、新たに生まれてきた親の理解を明らかにすることを目的としている。身体障害・知的障害のある妹がいる第１発表者と、知的障害・自閉スペクトラム症のある弟がいる第２発表者の同世代の２人による、３回にわたる語り合いについて検討した。その結果、当時の親の年齢と重なるまでになり、改めてきょうだいが振り返ることで、子どもの頃の家族関係や親がおかれていた状況への理解を深めたり、新たな側面を見出したりする様がみてとれた。また、きょうだいが年齢を重ね、親とも距離をおけるようになった今語り合うなかで、多くの観点において親から影響を受けていたことも改めて発見されることとなった。子ども時代の親の捉え方と、成人期になってからのそれの違いも考察していくことで、きょうだいの心理的な特徴の検討につなげていきたい。

P-53 複線径路等至性アプローチ（TEA）と関係学との理論的接合に関する研究

乾明紀(京都橘大学経済学部)・杉本菜月(立命館大学大学院人間科学研究科)

松村康平（1917 - 2003）が提唱した関係学は、人間社会を「自己・人・もの」が共存する関係状況と捉え、それら三者が相互にかかわりあいながら力動的に発展するものとし（関係弁証法)、その過程等の解明と関係発展を支援する理論である。

近年、関係学と質的心理学や文化心理学（記号論的文化心理学）との融合が試みられている。例えば、複線径路等至性アプローチ（TEA）に関係学の「５つのかかわり方」を援用したサトウ（2022）や乾・サトウ（2023）などが発表されている。しかし、そこでの援用目的は、関係構造の把握を主としたものであり、TEA と関係学との理論上の接合については十分に検討されているとは言い難い。

そこで、本研究では、TEA と関係学との理論的接合の可能性と課題について検討する。

P-54 支援者と支援対象児の相互理解である関係的理解をたよりにした支援のプロセス―小学校通常学級で複数の支援者が関わる支援事例から

黒住早紀子(駒澤大学総合教育研究部)

特別なニーズのある子どもへの支援において、専門的支援の場では、通常は診断基準を基にしたアセスメント評価を実施し、評価結果から最も適切な支援が提供される。しかし生活の場では、未診断状態や支援対象児の診断名も含む背景情報が不十分な状態で支援を始めるケースも稀ではない。また、志のある非専門家が支援者として支援対象児と出会い、手探りでより良い支援方法を探る現場もあるだろう。このような場では、支援者はどのように対象児の状態を見極め、支援を進めるのだろうか。本研究では、小学校通常学級で学校生活を送る肢体不自由のある児童に関わる３名の支援者（非専門家を含む）による支援記録の分析を通して、手探りで支援が進むプロセスに迫ることを試みた。その結果、支援者は対象児と自分/他児/他支援者/教員/保護者等の重層的な関係を理解の拠り所としており、支援は支援者と対象児が相互理解を深める過程でもあることが見出された。

P-55 離婚を経験する父が必要とするサポートとは

曽山いづみ(神戸女子大学心理学部)

本研究は、子どもがいて離婚を経験する保護者が、どのようなサポートを必要としているのかを明らかにすることを目的として、未成年の子がいて離婚を経験した父親3名を対象に半構造化インタビューを実施した。質問項目は、離婚の経緯・離婚前後の悩みや支えになったことなど・離婚前後の子どもの様子・現在の子どもの様子・ありがたかったサポート・ほしかったが得られなかったサポート・ふり返って思うことについてなどであった。3者とも一時期父母間の葛藤がかなり高い状況を経験していたが、子どもとの関係を重視しようとする意識から、徐々に葛藤が低減していく様子が見られた。本発表では、離婚を経験する父が必要とするサポートだけでなく、父母間の葛藤を下げうる要因についても考察する。

P-56 保育園の0歳児クラスにおける歌やリズムの果たす機能

朝比奈茉穂(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)・野中哲士(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

本研究では保育現場において、どのように歌やリズムが用いられ、それらが子どもたちの行為にどのような影響をもたらしているのかを明らかにすることを目的とした。この目的のため、大阪府の保育園の乳幼児クラスにおいて、日常の保育士と子どもの関わりの中でどのように歌やリズムを伴ったやりとりが埋め込まれているのかをビデオを用いて観察した。そして、保育の活動内容や、歌やリズムが用いられた場面におけるそれぞれの保育士と乳幼児の発声や身体の動き、その場面の特徴を記述し、それぞれの場面において歌やリズムの果たす機能について考察した。分析の結果、使われる歌やリズムとそれらの機能は、保育活動の種類ごとに異なっていた。また、排泄やオムツ替えといった音楽遊びとは異なる場面で歌やリズムを伴う発声が用いられる様子がしばしば観察され、保育の現場において歌やリズムを伴ったやりとりがさまざまな機能を担っていることが示唆された。

P-57 ピアッシング行為をめぐる体験内容に関する探索的研究

勝見吉彰(県立広島大学保健福祉学部)

日本におけるピアッシング行為に関する心理学的研究は，大久保らによる一連の研究（2011，2011，2012）などが見られるだけで，多いとは言えない。また，耳以外の部位にも複数のピアスの穴を開けている者を対象にした研究は見当たらない。そこで本研究では，ピアッシング行為を繰り返し行う者の体験内容と本人にとってのピアッシング行為の意味づけ等を詳細に検討することを目的として，半構造化面接による調査を行うこととした。対象者は耳以外にも複数部位のピアッシングを行っている者1名（20代女性）であった。得られたデータを元に，Wohlrab et al.（2007）によるタトゥーとピアッシングの動機の10カテゴリーの分類を参照しながら考察を加えた。なお，研究協力と学会発表に関して研究対象者から書面による同意を得ている。

P-58 ESD に取り組む教師のワークとライフ
安達仁美(信州大学教育学部)

ESD の推進拠点校とされている国内のユネスコスクールの加盟校数は世界最多となっている。さらに ESD は学習指導要領においても「持続可能な社会の創り手の育成」という視点で盛り込まれており、ユネスコスクールだけでなく全学校で取り組まれるべき内容として位置付けられている。しかし、ユネスコスクールに関しては登録からの経年による活動低下が問題視され、現在は活動の質の担保について議論されている（日本ユネスコ国内委員会,2021)。このように ESD の質を向上させる方策が練られる一方で、昨今では教師の働き方改革も推進されており、教師の業務負担の軽減が求められている。このような背景の下、本発表では、ワークではなくライフの一部としてユネスコ活動に従事している教師 3 名に対してインタビュー調査を実施する。ESD がワークとライフの中でどのように位置づき、自己認識されているのか、その様相を描き出すことを試みる。

P-59 子どもの「こだわり」が緩むとき―幼稚園での観察事例から―
司城紀代美(宇都宮大学大学院教育学研究科)

本研究は、幼稚園で「こだわり」が強いととらえられる言動を見せた子どもの「こだわり」が緩む場面を取り上げ、その過程を分析するものである。子どもの「こだわり」はその子どもの特性、特に発達障害の障害特性としてとらえられることが多い。その場合には、「こだわり」は支援の対象となり、個人への対応が行われたり、環境調整等が図られたりすることになると考えられる。これに対し、本研究では、「こだわり」を場や活動、大人と子どもとの関係、子ども同士の関係等、様々な要素が複雑に相互作用し、そのとき、その場で生じたり緩んだりするものとしてとらえる。このことにより、障害特性としての「こだわり」という見方とは異なる視点から、保育の場における子どもの「こだわり」の複雑な様相を明らかにすることを目指す。分析対象としたのは、発表者が継続してかかわっている園で観察された事例であり、研究に際しては園の許可を得た。

P-60 大規模言語モデルによる経産婦インタビューデータの文字起こし精度の検討
中田友貴(立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構)・宮田玲音(立命館大学情報理工学部)・安田裕子(立命館大学総合心理学部)・サトウタツヤ(立命館大学総合心理学部)

インタビューにおいて，文字起こしは経済的・時間的コストとなる面もある．そこで本研究では，大規模言語モデルを用いた経産婦インタビューデータの文字起こし精度の検討を目的とした．4 名の経産婦へのキャリアに関するインタビュー音声データを対象とした．話者ダイアゼーションとして Pyannote.audio を利用し，さらに Whisper を用いて，ローカル環境にて文字起こしを行った．文字誤差，文章誤差と実行時間について，人の手によるトランスクリプトやオンライン文字起こしサービスとの比較分析を行った．結果として，人の手による文字起こしなどと比較しても，一定の高い精度で文字起こしを実現しているといえる．しかしながら、複数名の同時発言で誤解識別が存在し，今後の課題として別の識別手法との比較検討を行う必要がある．これらの結果を踏まえ，それぞれの手法の功罪について議論する．

P-61 子育て環境としての日本・アジアのイメージー育児期女性の語りから

三品拓人(日本学術振興会)・鶴原美佑(立命館大学大学院　人間科学研究科)・小林藍(立命館大学大学院　人間科学研究科)・安田裕子(立命館大学総合心理学部)

本報告は、子育て中の母親が、日本あるいはアジアの子育て環境としての特徴をどのように認識しているのかを明らかにすることを目的としている。調査は、0 歳から 2 歳の子どもをもつ女性を対象として、育児支援、仕事、家族関係などについて幅広く尋ねている。その中で、子育てに関して日本・アジアらしい特徴に関する言及のあった 8 名の語りを用いる。

大まかに分類すると 1 つ目に、直接自身が知っている海外の国を参照して、子育てをめぐる周囲の視線の違いに言及する語りが見られた。同様に、仕事の継続しにくさにも言及された。2 つ目に、様々な局面で女性が子育ての中心にならざるを得ないことそれ自体が日本あるいはアジアの特徴ではないかという語りが複数見られた。

以上のような語りをジェンダー論の視座を踏まえた上で、より詳細に考察する。

日本質的心理学会第 20 回大会準備委員会

大会準備委員長

森岡正芳(立命館大学)

大会準備委員(順不同)

南博文（筑紫女学園大学)(副委員長)

山口洋典（立命館大学)(事務局長)

中田友貴（立命館大学)(事務局次長)

サトウタツヤ（立命館大学)

安田裕子（立命館大学)

神崎真実（立命館大学)

駒澤真由美(立命館大学)

土元哲平(中京大学)

廣瀬大介(立命館大学)

福山未智(立命館大学)

堀江貴久子(京都産業大学)

小松藍生(放課後等デイサービス　アミティエ東苗穂)

川本静香(京都精華大学)

広告・展示（五十音順）

株式会社 北大路書房

株式会社 新曜社

株式会社　誠信書房

株式会社 ちとせプレス

東京図書 株式会社

株式会社　ナカニシヤ出版

ユサコ 株式会社

株式会社 ライトストーン

共催

立命館大学総合心理学部

日本質的心理学会第 20 回大会プログラム抄録集

発行日　2023 年 10 月

発行者　日本質的心理学会第 20 回大会準備委員会

大会事務局　〒567-8570　大阪府茨木市岩倉町 2-150　立命館大学総合心理学部

制作(HP・印刷等)　(株)コームラ

北大路書房

〒603-8303　京都市北区紫野十二坊町12-8
☎075-431-0361　FAX 075-431-9393
https://www.kitaohji.com（価格税込）

社会構成主義の地平 ナラティヴ・セラピー入門

ーカウンセリングを実践するすべての人へー　M. ペイン著　横山克貴，バーナード紫，国重浩一訳　A5・392頁・定価4180円　ジェンダーや障害，人種，「夫婦」など社会の支配的な価値観から生じる苦悩にどう向き合うか。社会文化的な視野を広げるナラティヴ・セラピーの全体像を構造的に解説。

社会構成主義の地平 カップル・カウンセリング入門

ー関係修復のための実践ガイドー　M. ペイン著　国重浩一他訳　A5・308頁・定価3960円　カップルの「二つの視点」の間で複雑な関係におかれるセッションをどう構造化するのか，性的な問題，暴力・虐待といった「固有の問題」を取り上げて実践的に解説する。社会文化的な影響を探究し，カップル自らが「物語」るよう導くセラピーを展開。

Journey with Narrative Therapy ナラティヴ・セラピー・ワークショップ Book Ⅱ

ー会話と外在化，再著述を深めるー　国重浩一編著　日本キャリア開発研究センター編集協力　A5・388頁・定価3960円　ナラティヴ・セラピーにおいて外在化と再著述はなぜ重要なのか。「人＝問題」にしない質問法や「問題のある風景」を変える会話法の実践を解説。エイジェンシーが発揮されるナラティヴへ。

Journey with Narrative Therapy ナラティヴ・セラピー・ワークショップ Book Ⅰ

ー基礎知識と背景概念を知るー　国重浩一著　日本キャリア開発研究センター編集協力　A5・312頁・定価3080円　熟練ナラティヴ・セラピストによるワークショップを再現するシリーズ第一弾。基本的知識や背景をわかりやすく初学者に向け解説。ワークによる実践の具体例やデモも一部掲載し，参加者の声も多数紹介。

はじめての家族療法

ークライエントとその関係者を支援するすべての人へー　浅井伸彦編著　坂本真佐哉監修　A5・208頁・定価3080円　家族療法の考え方や理論，背景，技法を概括的に捉えられる入門書。カップルカウンセリングやジェノグラムの実践，さらには家族支援にも役立つ書。オープンダイアローグなど，発展し続けるセラピーの〈多様性〉を紹介。

シシリー・ソンダース，ケアを語る

ー私のスピリチュアリティー　C. ソンダース著　小森康永訳　四六上製・160頁・定価2750円　最晩年に出版した「自叙伝」ともいうべき自選論文集。人間性，相互主観性，そして苦しみの意味を理解するための努力を含む，より広い宗教的・精神的な視点へと，彼女がどのように導かれてきたかを生き生きと伝える。

教育研究のための質的研究法講座

関口靖広著　A5・256頁・定価3080円　現場教員にもわかりやすい教育現象の質的な研究法の手引書。前半の入門編では，専門用語を使わずに具体的な研究の進め方を概説。より専門的な理論や研究法のテクニックは後半の各論編にまとめられ，必要に応じて関心のあるところをピックアップして読めるようになっている。

人間科学のための混合研究法

ー質的・量的アプローチをつなぐ研究デザインー　J. W. クレスウェル，V. L. プラノクラーク著　大谷順子訳　A5・328頁・定価3630円　研究プロセスの各段階において，質的・量的アプローチでデータを収集・分析・混合し，各々のアプローチの長所を組み合わせることをめざした研究方法論。

質的研究ハンドブック（全3巻）
N. K. デンジン他著／平山満義監訳　定価5060円～6160円

人間科学のための混合研究法
J. W. クレスウェル，V. L. プラノ クラーク著／大谷順子訳　定価3630円

教育研究のための質的研究法講座
関口靖広著　定価3080円

質的研究用語事典
T. A. シュワント著／伊藤　勇他監訳　定価3520円

なるほど！　心理学観察法
三浦麻子監修／佐藤　寛編著　定価2420円

〈当事者〉をめぐる社会学
宮内　洋，好井裕明編著　定価3080円

質的データの取り扱い
L. リチャーズ著／大谷順子，大杉卓三訳　定価3520円

心理学マニュアル　観察法
中澤　潤，大野木裕明，南　博文編著　定価1430円

ナラティヴ・アプローチの理論から実践まで
G. モンク他編／国重浩一，バーナード紫訳　定価2860円

新曜社　新刊・既刊のご案内　日本質的心理学会 会員限定 15%OFF！

より良い世界のためのデザイン
――意味、持続可能性、人間性中心

ドン・ノーマン 著／安村通晃・伊賀聡一郎・岡本 明 訳

四六判 472 頁・予価 3,850 円（税込）　9月下旬刊行

急速な技術革新の一方、気候変動や地球環境の汚染、行き過ぎた資本主義などの危機に直面している。政治・経済を含む何世紀にもわたってデザインされた実践の結果だ。人間性中心の、意味のある、持続可能な、我々の行動を変えるためのデザインの提言。

心理学における質的研究の論文作法 ――APA スタイルの基準を満たすには

H・M・レヴィット 著・能智正博 監訳

B5 判 約 200 頁・予価 3,630 円（税込）　10月下旬刊行

質的研究論文をどう書くか、評価するかの基準として、アメリカ心理学会で質的研究のための学術論文執筆基準が作られた。しかし基準は簡潔に書かれていて、そのまま論文に適用するのは難しい。基準を具体的な研究に橋渡しするための実践的ガイドブック。

学びをみとる
――エスノメソドロジー・会話分析による授業の分析

五十嵐素子・平本 毅・森 一平・團 康晃・齊藤和貴 編

A5 判 310 頁・予価 3,740 円（税込）　10月中旬刊行

生徒の学習経験を捉える確実な方法は、学習活動を相互行為（やりとり）として捉え、「みとる」ことである。エスノメソドロジー・会話分析に基づき、授業実践の方法から学習経験の把握、授業の振り返りの仕方まで、豊富な事例で示した本邦初のテキスト。

エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック　新刊

山崎敬一・浜日出夫・小宮友根・田中博子・川島理恵・池田佳子・山崎晶子・池谷のぞみ 編　A5 判 492 頁・定価 4,620 円（税込）

社会学、言語学、人類学、心理学、経営学、政治学、メディア研究、医療・看護研究など、幅広い学問分野で多彩に発展したエスノメソドロジー・会話分析の起源をたどり、その現在を一線の研究者たちが解説。全体を包括的に理解するための待望のガイド。

コミュニティを研究する　新刊
――概念、定義、測定方法

M. L. Ohmer, C. Coulton, D. A. Freedman, J. L. Sobeck, J. Booth 著
似内遼一・高瀬麻以・荻野亮吾・村山洋史 監訳

B5 判 464 頁・定価 9,350 円（税込）

街づくりやコミュニティデザイン、プレイスメイキングなどが注目され、地域を基盤とした住環境の改善、生活の質の向上を目的とした活動が展開されている。そのときに不可欠な近隣地域やコミュニティの測定法を体系的にわかりやすく解説した本邦初の本。日本で初めてのコミュニティ測定と評価の体系的解説。

アクションリサーチ入門　新刊
――社会変化のための社会調査

D・J・グリーンウッド、M・レヴィン 著／小川晃弘 監訳

A5 判 264 頁・定価 3,520 円（税込）

応用のない理論は理論ではない。研究者と現地の人々が協働して問題解決に取り組むアクションリサーチの理論、戦略、よいリサーチャーになるためのスキル、具体的な実践例までを懇切に解説し、公正で持続的な変化のための新しい知見を提供。

オートエスノグラフィー　新刊
――質的研究を再考し、表現するための実践ガイド

T・E・アダムス、S・H・ジョーンズ、C・エリス 著
松澤和正・佐藤美保 訳　A5 判 228 頁・定価 2,860 円（税込）

人生の意味の「意味」　新刊
――心理学から言えること

野口謙二 著　四六判 192 頁・定価 2,420 円（税込）

カタログTEA（複線径路等至性アプローチ）　新刊
――図で響きあう

サトウタツヤ・安田裕子 監修
上川多恵子・宮下太陽・伊東美智子・小澤伊久美 編
B5 判 112 頁・定価 3,080 円（税込）

珠玉の集大成

やまだようこ著作集
全10巻（予定）
やまだようこ 著
すべてA5判上製（定価は税込）

第1巻	ことばの前のことば――うたうコミュニケーション	496頁・定価 5,280円
第2巻	ことばのはじまり――意味と表象	356頁・定価 3,960円
第3巻	ものがたりの発生――私のめばえ	320頁・定価 3,520円
第4巻	質的モデル生成法――質的研究の理論と方法	384頁・定価 4,290円
第5巻	ナラティヴ研究――語りの共同生成	504頁・定価 5,390円
第6巻	私をつつむ母なるもの――多文化の「人と人の関係」イメージ	608頁・定価 6,380円
第7巻	人生心理学――生涯発達のモデル	480頁・定価 5,280円
第8巻	喪失の語り――生成のライフストーリー	336頁・定価 4,730円
第10巻	世代をむすぶ――生成と継承	344頁・定価 3,520円

2023年11月末日まで
15%OFF！
掲載以外の本もOK。
公費でのご注文も承ります。

ご注文はこちらから
https://forms.gle/XK5ZMf4nGxDwa6S89

新曜社
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-9
TEL 03-3264-4973（代表）/ FAX 03-3239-2958
https://www.shin-yo-sha.co.jp/　sales@shin-yo-sha.co.jp

A5 判
3300 円

ＴＥＡによる 対人援助プロセスと分岐の記述

――保育、看護、臨床・障害分野の実践的研究

安田裕子・サトウタツヤ 編著　ＴＥＭから昇華したＴＥＡによる対人援助に関する実践的研究について、その内容紹介から研究の裏舞台までをつまびらかにした書。

A5 判
3400 円

TEM でわかる人生の径路

――質的研究の新展開

安田裕子・サトウタツヤ 編著　質的研究に時間の概念を導入し、視覚的に理解を促す試みの集大成。誰もが自分自身の人生の径路を TEM に描くことができ初学者でも簡単に質的研究用のデータを拾っていくことが可能になる。

A5 判
3400 円

ＴＥＭでひろがる社会実装

――ライフの充実を支援する

安田裕子・サトウタツヤ 編著
外国語学習・教育、看護、保健、介護などに焦点をあてた論文に加え、キャリアデザイン、学生相談など実践的応用事例を収録。

A5 判
3000 円

TEM ではじめる質的研究

――時間とプロセスを扱う研究をめざして

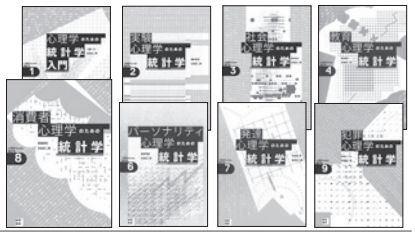
安田裕子・サトウタツヤ 編著　複線径路・等至性モデルを使用して、従来なかった時間の観念を心理学にもたらす。人間の多様性や複雑性を扱うための新しい方法論。臨床心理学分野でも導入が進む画期的手法。

心理学のための統計学 ［全9巻］

荘島宏二郎編集・各巻共著
心理学の分野別に優先度の高い統計手法を取り上げて解説。各巻の各章は、90 分の講義で説明できる内容にて構成。心理学を学ぶ人に必須の統計テキストシリーズ。

❶ 心理学のための統計学入門（川端一光）
❷ 実験心理学のための統計学（橋本貴充）
❸ 社会心理学のための統計学（清水裕士）
❹ 教育心理学のための統計学（熊谷龍一）
❺ 臨床心理学のための統計学（佐藤 寛）
❻ パーソナリティ心理学のための統計学（尾崎幸謙）
❼ 発達心理学のための統計学（宇佐美 慧）
☆シリーズ新刊☆
❽ 消費者心理学のための統計学（齋藤朗宏）
❾ 犯罪心理学のための統計学（松田いづみ）

既刊 ❶ 2100 円 / ❷・❹・❻・❼・❾ 各 2600 円 / ❸・❽ 2800 円

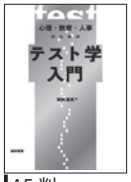


A5 判
3200 円

ウェブ調査の基礎

――実例で考える設計と管理

山田一成 編著
公募型ウェブ調査の有効利用のために調査の方法論的基礎を徹底検証。日本の実例を多数紹介・解説したデータサイエンス時代の新標準。



A5 判
2700 円

心理・教育・人事のための テスト学入門

繁桝算男 編
テストに携わる人が理解を深めたいテスト学の基礎から最新理論まで解説するとともに、人事と臨床における活用場面まで幅広く紹介する。

誠信書房 SEISHIN SHOBO
Tel 03-3946-5666　Fax 03-3945-8880　https://www.seishinshobo.co.jp/　@seishinshobo
〒 112-0012 東京都文京区大塚 3-20-6〔価格は税抜〕

文化心理学〔改訂版〕
理論・各論・方法論

木戸彩恵・サトウタツヤ 編
A5判並製344頁／定価: 2800円

日本の部活（BUKATSU）
文化と心理・行動を読み解く

尾見康博 著
四六判並製160頁／定価: 1700円

障害理解のリフレクション
行為と言葉が描く〈他者〉と共にある世界

佐藤貴宣・栗田季佳 編
四六判並製384頁／定価: 2800円

子どもの話を聴く
司法面接の科学と技法

デブラ・A. プール 著
司法面接研究会 訳
A5判並製280頁／定価: 2800円

犯罪・非行からの離脱

岡邊 健 編
四六判並製312頁／定価: 2500円

幸運と不運の心理学
運はどのように捉えられているのか？

村上幸史 著
四六判並製224頁／定価: 1900円

学びを愉しく

〒157-0062
東京都世田谷区南烏山 5 丁目20-9
ハウス・アム・バンホフ 203

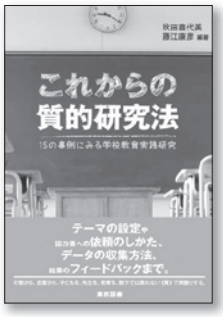
株式会社 ちとせプレス

Webサイト: http://chitosepress.com
E-mail: info@chitosepress.com
Tel: 03-4285-0214 / Fax: 03-4243-3725

理論と事例でみる質的研究法の必読書

これからの質的研究法

～15の事例にみる学校教育実践研究～



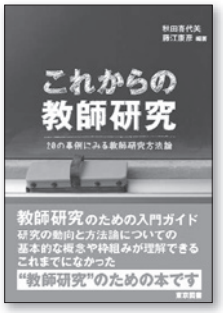
◎秋田喜代美・藤江康彦 編著／A5判／定価3080円

学校教育の現場でどうアプローチすればいいのか？ 本書は、編者による概括的な「理論編」と、協働学習、探求学習、ICT を活用したものなど新たな学びの動向や、教師・学校文化に関する 15 事例を取り上げた「研究事例編」で構成。わかりやすい「理論編」と最新の「研究事例編」で構成された質的研究法の必読書。

これまでになかった“教師研究”のため入門ガイド

これからの教師研究

～20の事例にみる教師研究方法論～

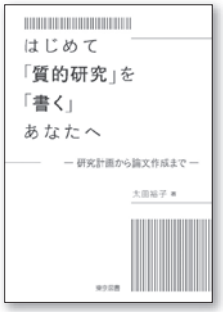


◎秋田喜代美・藤江康彦 編著／A5判／定価3300円

教師とは誰か、その経験、思考、生き方、自己、文化を知ることは学校教育研究の基本であり、研究領域である。本書はこれまでになかった“ 教師研究 ”のため入門ガイド。具体的な 20 の研究事例をもとに、研究の動向や方法論など、基本的な概念や枠組みが理解できるようになっている。

質的研究をはじめると決めたら読む本！

はじめて「質的研究」を「書く」あなたへ ―研究計画から論文作成まで―



◎太田裕子 著／A5判／定価2420円

本書は、初めて質的研究法を用いて研究を行い論文を作成する人が、「質的研究」と「書く」という切り離すことができない活動を、研究プロセスに沿って取り組める構成となっている。第 1 章から順に読み進み、最終的に一本の論文を書き上げるという経験をすることで、読者は研究が一気に進むことを実感できる。

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3-11-19
TEL 03（3288）9461 FAX 03（3288）9470

東京図書

URL http://www.tokyo-tosho.co.jp

関係の世界へ
◎危機に瀕する私たちが生きのびる方法
ケネス・J・ガーゲン 著／東村知子・鮫島輝美・久保田賢一 訳
一番やさしい社会構成主義入門。2420円

何のためのテスト？
◎評価で変わる学校と学び
K・ガーゲン＋S・ギル 著／東村知子・鮫島輝美 訳
教育システム変革に向けて。 2750円

心の臨床実践
◎精神医療の社会学
河村裕樹 著
心の病いと向き合う人びとの営みを記述したエスノメソドロジー研究。 4290円

最強の社会調査入門
◎これから質的調査をはじめる人のために
前田拓也・秋谷直矩・朴沙羅・木下衆 編
「聞いてみる」「やってみる」「行ってみる」「読んでみる」から始まる極意。2530円

PAC分析研究・実践集③
PAC分析
◎支援ツールでここまでできる
PAC分析学会 編
使い方・応用を事例から解説。 2860円

動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニング
◎フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析
樋口耕一・中村康則・周景龍 著 2420円

関係からはじまる
◎社会構成主義がひらく人間観
K・ガーゲン 著／東村知子・鮫島輝美 訳
独自の関係論から世界を記述する、対立を乗り越える未来への招待状！ 5500円

基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法
高梨克也 著
理論的かつ体系的な入門書。 2640円

フェミニスト現象学
◎経験が響きあう場所へ
稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優 編
当事者の経験を記述・考察するフェミニスト現象学の可能性に迫る。 3520円

早わかり混合研究法
クレスウェル 著／抱井尚子 訳
混合研究法を始めようとする読者の入り口として、重要なポイントがぱっと読んでつかめる最適な入門書。 2640円

テーマティック・アナリシス法
◎インタビューデータ分析のためのコーディングの基礎 土屋雅子 著
分析の透明性や厳密性を確保するTA法を実例を挙げ順を追って解説。 2420円

社会調査のための計量テキスト分析
◎内容分析の継承と発展を目指して
【第2版】 樋口耕一 著
KH Coder の利用方法、事例。 3080円

あなたへの社会構成主義
K・ガーゲン 著／東村知子 訳
「常識」を覆す社会構成主義への格好の入門書。平易な文章で、ガーゲンとの対話の世界へ誘うロングセラー。 3850円

コミュニケーション・デザインのこころ戦略
◎対人コミュニケーションの最適化
大坊郁夫 編
相手を知るための心理学。 3520円

医療とケアの現象学
◎当事者の経験に迫る質的研究アプローチ
榊原哲也・西村ユミ 編
医療やケアにかかわるさまざまな当事者の経験を「現象学」によって描く。3300円

内容分析の方法
【第2版】 有馬明恵 著
メッセージ内容の客観的・体系的かつ科学的分析の技術を、コーディングシートとテキストマイニングに分けて解説。 1760円

質的研究のための理論入門
◎ポスト実証主義の諸系譜
プシュカラ・プラサド 著／箕浦康子 監訳
考え方、基本的概念、研究事例。4180円

会話データ分析の実際
◎身近な会話を分析してみる
中井陽子・大場美和子・寅丸真澄 著
会話ビデオ、文字化資料を見ながら会話データを具体的に分析する。 2750円

社会構成主義の理論と実践
◎関係性が現実をつくる
K・ガーゲン 著／永田素彦・深尾誠 訳
既存諸科学の脱構築を標榜する社会構成主義アプローチの大著。 6380円

コミュニケーションの社会心理学
◎伝える・関わる・動かす
岡本真一郎 編
最先端の研究を幅広く解説。 3520円

グラウンデッド・セオリーの構築【第2版】
K・シャーマズ 著／岡部大祐 監訳
多くの事例と内容を盛り込み詳説した増補版。 6050円

フィールドワークの学び方
◎国際学生との協働からオンライン調査まで
村田晶子・箕曲在弘・佐藤慎司 編著
新しい時代の変化に対応したフィールドワークを学ぶための実践的参考書。2420円

jamoviでトライ！統計入門
◎フリーソフトウェアで始める科学データの分析
眞嶋良全・永井暁行 編 2750円

なぜあなたは国際誌に論文を掲載できないのか
◎誰も教えてくれなかった本当に必要なこと
加藤 司 著
全ての悩める研究者へ。 2970円

ナカニシヤ出版
TEL 075-723-0111 〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15
FAX 075-723-0095 http://www.nakanishiya.co.jp/
〔税込価格〕

世界150ヶ国以上、150万人以上のユーザーが使用する定番ソフト

インタビュー分析
アンケート分析
文献レビューには

NVIVO

質的・混合研究支援（QDA）ソフトウェア

01 データをかんたんに一元管理

NVivoでひとまとめ！

インタビュー文字起こし（逐語録）やアンケート回答から
参考文献、動画、音声、ウェブサイトからTwitterの書き込みまで
どんなファイルもNVivoにひとまとめ。
研究に必要なデータを**1ケ所にまとめて整理**することが可能です。

02 データのカテゴライズ・コーディングを効率化

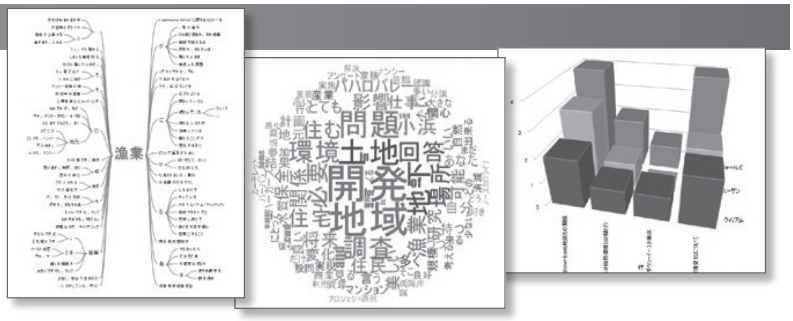
操作は快適かつスムーズ！

カードや付箋、表計算ソフトを使ってデータのカテゴライズ・コーディングと比較し、NVivoは**ドラッグ＆ドロップで簡単にデータをコーディング**することが可能です。名前をつけて**階層化管理**しつつ、**1クリックで元の場所に**戻ることができます。

03 データを上手に活用しましょう

**さまざまな切り口で
データを分析、簡単に可視化！**

データを、回答者の性別や年齢、
使われている言葉の頻度などによって
NVivo上でかんたんに図式化。
図は出力して、ポスターや発表資料で
そのまま利用することが可能です。



NVIVO Collaboration Cloud

質的データ の効率的な
整理、管理、分析支援ソフトウェア

01 研究チーム間で素早くデータ、専門知識、洞察を安全に共有することができます。

複数のユーザーが同じプロジェクトに接続して、**リアルタイムで研究の更新、コーディング、分析**を行うことができ、チームワークを向上させることができます。NVivo14 で NVivo Collaboration Cloud を使えば、Windows とMac でプロジェクトを簡単に接続して同期することができ、ファイル変換の手間を省くことができます。

02 コラボレーションがよりかんたんに

各自のパソコンにて**オフライン環境でも作業が可能**です。インターネットが接続されている環境であれば、**自動的に作業内容がクラウド上のプロジェクトに反映**されます。NVivo Collaboration Cloud を利用するためには、すべてのユーザーがライセンスを購入する必要はありません。**1つのライセンスで最大5人**のユーザーが共同作業することができます。

専任スタッフのサポートが付いているので慣れない方でも安心。
まずは14日間無料トライアル！

NVivo トライアル　検 索

【国内代理店】 **ユサコ株式会社**

E-mail：shop@usaco.co.jp

http://www.usaco.co.jp/

ライトストーンのブース
ご来場者様限定！

質的＆混合法データ分析ソフトウェア

MAXQDA

MAXQDAの**新規ご購入**にかぎり

15% OFF

申込み案内
配布中！

2023年12月28日（木）まで有効

ご来場お待ちしていまっきゅす！

MAXQDAの妖精まっきゅすクン

開発元
VERBI Software – Consult – Sozialforschung GmbH
VERBI Software. Consult. Sozialforschung GmbH

正規国内代理店
LightStone®
株式会社ライトストーン
Ubiquitous AI Group Company

25年以上の経験と実績でお客様をサポートします。
〒101-0031
東京都千代田区東神田2-5-12 龍角散ビル7F
TEL 03-3864-5211　E-Mail：sales@lightstone.co.jp

https://www.lightstone.co.jp/pr/ad2311jaqp/